オーズとストライクウィッチーズとパンツ

ノリユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オーズとストライクウィッチーズとパンツ

【Ｎコード】
Ｎ４４３０Ｗ

【作者名】
ノリユキ

【あらすじ】
オーズが恐竜系のコアメダルをフルスキャニング弾をグリード・マキにあてて、そのブラックホールに吸い込まれたどうなんの？って話です。

一応ストライクウィッチーズの登場人物、ストーリーはアニメの１＆２をミックスした感じになってます。

ちなみに、作者の書きたい様に書くので、内容的にブラック要素は

あんま無いっすー

――――――――――追記：なんか色々と設定考えてたらこれ、小説とか漫画とか陸や海のネウロイも出さなくちゃいけないんじゃないのって気づいた。

――――――――――追記２：スオムスいらん子シリーズ熟読なう

――――――――――追記３：４巻っていつでるの？

プロローグ（前書き）

初めて書きます、なるべく原作に忠実に書いて行きたいでっす

プロローグ

「アンクゥー！！」

メダルの器　暴走状態の中に居る、仮面ライダーオーズこと『火野映司』は、恐竜系のコアメダルで放ったギガスキャンにより生じたブラックホールへと手を伸ばした。
その中に吸い込まれていく数々のコアメダル、しかし彼がつかもうとしているのは、自分自身の着けているベルトから飛んで行った、クジャクメダル、コンドルメダル、アンクの人格を生成しているタカメダルだった。
そのメダルはタカメダルは真っ二つに、他は全て砕け散り、一枚残らずブラックホールの中へと吸い込まれて行った。
そして彼自身も・・・

「うっ・・・吸い込む力が強すぎる・・・！うわあああぁー！！」

Ｄｒ．マキの様に四肢がもげたり、メダルの様に砕け散ったりはしなかったものの、彼は変身が解けてしまいブラックホールの中へと吸い込まれてしまった。

タッタッタ・・・
「芳佳ちゃん、待ってよー」
「リーネちゃん早くー！ちょっと寝過ごしちゃったから、急いで朝ご飯作らないとみんなに怒られちゃうよ、特にルッキーニちゃんに・

・・ん？」
「あれ、芳佳ちゃん？どうし・・・あ。」
二人は廊下を走って食堂へと向かってたが、廊下に横たわる『あるもの』を見つけた。
「ねぇ、あれって人だよね？」
「うん、でも見たこと無い服だよね。ウィッチーズの誰かじゃないっぽいけど・・・でも何で倒れてるんだろ、寝てるのかな？」

「う・・・あ・・・アンク・・・」
「「！！」」
廊下に倒れてるそれは、苦しげに呻き声を上げる。
「お、男の人だ！」
「どうしたんだろう、怪我してるのかな？だったら治してあげないと！」
「ちょ、ちょっと芳佳ちゃん！」

芳佳と呼ばれた少女は、男のそばに駆け寄ると両手を映司の胸の上に手をかざし優しく声をかける。
「あ、あの、どこか痛いんですか？」
「いつつつ・・・ここは・・・ぐっ・・・」
（コンボ使いすぎたから流石にまずいかも、とりあえず休まないと。それに、マキ博士の身体に吸い込まれて、ここがどこだか未だに把握できてないしね・・・）
「うっ・・・すいません、痛い場所は特に無いんですけど疲れてるんで・・・どこか休める場所に・・・って！パンツ？！」
映司の目がカッと目が開かれた。

目の前に映る少女の姿は、上半身が水兵の着るセーラー服の様な格好だが、下に穿いているのが靴下とパンツだけだった。
「ひっ？！あの、いえ、これパンツじゃないです、ズボンです！」

「え?どっからどう見てもパンツじゃないの?」
「いえ、ズボンです!」
「いや、ズボンは流石に無理があるでしょ、パンツだってば」
「何言ってるんですか、これはズボンです!」
「でも、パンツにしか「何の騒ぎだ?」ん?」
二人がズボンだパンツだって言い合ってる間に、いつのまにそこに居たのか片手に木刀を持った眼帯をしてる女の子がそこに立っていた。そして女の子を見る目線は、上から下へと行き
「ま、またパンツ?!」
「あの、さっきまで苦しげでしたけど、大丈夫なんですか?」
「こっちも?!」

映司は目の前にいる女の子達が全員パンツ(ズボンだと言い張ってるが)を穿いているのを見て驚き戸惑っている。
(タイムスリップはガラの時と電王の時としたけど、これもそういう類なのかな・・・だとしたら、少なくとも俺の知ってる常識が通じないのも分かるし)
「あ、幾分か楽にはなってきたから大丈夫。ほら、どこも怪我してないし。ちょっと体中がギシギシ痛むくらいだけど。何か、心配かけちゃったみたいで悪いね。」
すると、さっきまでズボンだのパンツだの言ってた少女は安心したように息を吐いた。

「そうですか、良かったぁ、さっきまで苦しそうだったから心配しましたよ。」
「ところで、話の筋が見えないんだが、貴様は何者だ?」
「あぁ、俺は」
クキュルルゥ・・・
映司のお腹から、何かを伝えるには十分に分かり易い音が鳴った。
「・・・あ、あはは。すいません、昨日からアイス以外何も食べて

無くて・・・」

「じゃあ、私たちこれから朝ご飯なんで、よければ一緒にどうですか？少佐、いいですよね？」

「フム、本来は即刻つまみ出すんだが、事態が事態だからな。だが、色々話は聞かせてもらうぞ。」

「それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。」

そうして四人は食堂へと向かった

プロローグ（後書き）

次回あたりから、ストーリーに一段落着くたびに後日談書きます。

自己紹介とメダルとズボン（前書き）

？「アーッハッハッハ」

映司「このテンプルにカチンと来る笑い声は」

シャーリー「シャーリーこと、シャーロット・E・イェーガー中尉どぇす、調子はどうかな?映司きゅん!アーッハッハッハ」

ってネタがふと思い浮かんだ、どうだろ?

自己紹介とメダルとズボン

場所は食堂、先ほど映司が倒れてた場所が食堂に近かったので、お互い移動中に簡単な自己紹介を済ませた。

先ほど映司を怪我したと思い、怪我を治そうとしたのが『宮藤　芳佳』
その後ろにくっついてたのが『リネット・ビショップ』みんなからはリーネの愛称で呼ばれてるそうだ
木刀持って眼帯してた強気な女性が『坂本　美緒』

ちなみに、映司自身は数年前から世界中を旅している旅人とだけ言った。何故あんな所に倒れてたのかは「世界の平和を守るために戦ってたら、（推測ながらも）ブラックホールに飲み込まれました」なんて言えるワケないので、都合の良いように

「気づいたら倒れてました」
「倒れる前の記憶が全然有りません」

とだけ偽った。

そして食堂にて。
宮藤とリーネは朝食の準備に入り、坂本と映司のお互いが向かい合う形で席に着き軽い事情聴取に入る。

「さて、宮藤とリーネが朝食を作ってる間に貴様に聞きたい事が山ほどある。全部明確に答えてもらおう、嘘は吐くなよ。」

「分かってますって、俺からも聞きたい事ありますし。」
「ほぅ、だが質問は私の質問が終わってからにしてもらおう。何でここに倒れてたかは、倒れる直前の記憶が無いから省くぞ。だから記憶が戻るまで別の質問をさせてもらおう。まずははっきり言って旅人とは思えん、そんな鞄やトランクも持たずに旅する奴がどこに居る。第一、ガリアがネウロイの巣と化してる上に、今はネウロイがいつ、どこに出てくるかの予測すら困難だ。それなのに旅だと、貴様死にたいのか?それに、名前からして私や宮藤と同じく扶桑皇国　出身の男児の癖に、戦争に行かないのは何故だ、ネウロイが憎いと思わないのか?全部答えてもらおう。」

と一気にまくし上げる坂本だが、映司は聞いたことも無い単語がポンポン出てくる上に、今の質問で戦争ってワードが出たことでなんとなく世界が危ないって事はなんとか理解したものの、はっきり言ってさっぱり理解ができなかった。
そのため答えるまでに間がしばらく空いてしまい、更に怪しまれてしまった。

「・・・えーっと、その、世界中旅してたのは何でかは知らないけど、旅が大好きな祖父に『男はいつ死ぬか分からない』って言われて、とりあえず旅をしようかなって。荷物の件に関しては・・・」

と区切り、ズボンのポケットから取り出した布と、それに包まれた物を差し出し

「いっつも持ってるのはこれだけです。」

その布を広げた坂本は顔を少し赤らめ、中に有る物を確認する。

「これは男性用のパンツじゃないか、それと見たことの無い硬貨だ

がどこの硬貨だ?それと、赤と黄色と緑の・・・なんだこれは、これも硬貨なのか?それに、これだけで旅をするとは随分ふざけた事を「あー!なんでコアメダルがここに?!」えぇいなんだいきなり!」

あ、すいませんと映司が軽く頭を下げる。だが映司は目の前に粉々に砕け散りブラックホールに飲み込まれたはずの、『タカメダル』『トラメダル』『バッタメダル』が自分のパンツから出てきたのを見て思わず叫んでしまったのは仕方の無いことだろう。

「・・・どうやら、火野映司とやら「あ、フルネームじゃなくて好きな様に呼んでください」じゃあ映司。どうやら貴様は嘘をついたな?少佐である私の知らない言葉が出てきたりするとはな。嘘はつくなと言ったはずだが?」

坂本は隣の椅子に置いていた木刀を右手に持ち直し、ブンッと映司の喉に突きつける。それに対して思わず映司は苦笑いして、両手を挙げて降参のポーズを取る。

「今言った事には嘘、無いんですけどね。」
「なら今までの事情は全て嘘だったということか?」

映司は(しまった)と思ったがもう遅かった。
坂本は木刀を突きつけたまま忠告をする。

「いいか、全て包み隠さず言え。でないと・・・分かるな?」
「ハハハ・・・俺の言うこと信じてくれますかね・・・」
「信じるか信じないかは私が決める事だ、これは返しておこう。」

そう言ってパンツをわずかな硬貨と、何故かあったコアメダルを包んで投げて寄こした。

「あ、ども・・・それじゃ、事実だけは話「おはようございます少佐」・・・ん?」

映司が入り口を見ると、芳佳や坂本とは違い、眼鏡をかけた少女が明らかにパンツと呼べる物を穿いてるのを見た映司は、心の中で突っ込みを入れた。

(これは流石にパンツでしょ!流石にズボンって言うには無理があるって!)

ところが

「おはよー、あれ、誰その人?」
「おっはよー!ごっはんーごっはんー・・・あれ、君誰?」
「オハヨー、飯だ飯ー・・・お前誰だ?」
「おはようございます、あら、そちらの男性は?」

次々と来るのは女の子だけで、しかも全員芳佳がズボンと言い張ってたパンツを穿いてるのを見てただ苦笑いするしか無かった。

「さて、ハルトマンとバルクホルン以外は揃ったな。この男・・・火野映司と言うらしいが、素性は私も分からん。だが今は、近くにネウロイが来ていると情報が入っているから外に追い出すワケにはいかない。とりあえず朝食を食べてから映司に説明してもらう。それで良いな?ミーナ、映司。」

「ちゃんと説明してくれるなら私は構わないわ。」

「はい、食べ終わったら包み隠さずに全部言いますよ、朝食までごちそうになりますしね。信じてくれるかどうかは別問題としてですけど・・・」

「・・・だそうだ、それじゃいただきます。」

「「「「「いただきまーす!」」」」」

「素性が不明か、謎だらけだけどおもしろくなりそうだな。アッハッハッハ」

「ねぇねぇ、君どこから来たの?何でここに居るの?その服ってどこの服?」

「どうですか火野さん、和食ですけど美味しいですか?」

「まったく、五月蠅い人たちですわ。ご飯くらい静かに食べられないのかしら・・・」

「あはは・・・」

(少佐とか言ってたから怖い軍人さんが居ると思ってたけど、なんで女性だけなんだろう。少佐ってただのあだ名とかなのかな。でも着てる服って世界中旅したから分かるけど軍服だよね・・・一体ここってどこなんだろう・・・なんでパンツがズボンなんだろう。あ、でも俺のパンツ見て確かにパンツって言ってたよな。一体なんなんだろ・・・)

自己紹介とメダルとズボン（後書き）

次回に続く

自己紹介とメダルとズボン2（前書き）

前回の続き

最終回でアンクが最後に投げたアンク自身のコアメダルを映司が受け取ったとき、映司がアンクのヒビが入ったメダルを見ても、グリード化が進んでいた所為でヒビが入ってる様には見えてなかった。って個人的に解釈してます。

あ、あとこの映司、プトティラのメダルが身体の中に入ってるかどうかは秘密です。

自己紹介とメダルとズボン2

「「「「「ごちそうさまー！」」」」」
映司もご馳走様と言い、少し考え事をした。
（普通に美味しかった。味は分かるし、目に映る物の色がかすんだりする事はないし、これって恐竜系のコアメダルが全部砕けたからなのかな。でも、砕けたはずのコアメダルが俺のポケットにあったのって何でだろう・・・）

そんな映司を見て、芳佳は自分のご飯が不味かったんじゃないかと勘違いし心配そうに
「あの、火野さん美味しくなかったですか？火野さん扶桑出身だと思ったから、てっきり和食は行けるかと・・・」
と聞くが映司がごまかしつつ、素直な感想を返す。
「い、いや！全然そんな事はないよ！むしろ美味しすぎたって、料理上手なんだね！」
「そ、そんな、私なんてまだまだですよ」エヘヘ

コホンと咳払いが聞こえたので、映司は音のした方に顔を向ける。先ほどから坂本と仲良く話してた人が真面目な顔をしてこっちを見ている。
「それじゃあ本題に入るけど、映司君って言ったかしら。美緒少佐から大体の話は聞いたわ。でも、不明な部分が多いから全部話してくれるわね？あぁ、座ったままで結構よ。」
「えっと、それじゃあ簡単な自己紹介からですけど、俺は火野　映司　って言います。

キングクリムゾン！

で、それの所為でこっちに来ちゃったと思うんですけど・・・あの、今更ですけど俺の話、ついてこれてます・・・？」

話が非常に長くなってしまい、現在の時刻は午前１１時半を回ったところだった。

映司が遠慮しがちに聞くと、当たり前ながら、しかし厳しい返事が返ってきた。

「・・・・・えっと、何おっしゃってるのかさっぱり分かりませんわ。異世界？グリードにヤミー？メダル？オーズ？火野さん、頭がおかしいんじゃありませんの？」

「言われるとは思ってたけど、いざ言われるときついな・・・えっと、コアメダルについては見せる方が早いんじゃないかなと思うんですけど。セルメダルは持ってませんけどね。」

そういって映司はタカ、トラ、バッタのコアメダルを机に一度並べて見せた。

「これがお前の世界の技術かー。是非ともこれを使った実験をしたいな！なぁ、そのオーズとやらにはなれないのか？」

「いや、なれない事は無いと思いますけど、えーっと・・・？」

「シャーロット・Ｅ・イェーガー、シャーリーって呼んでくれ。」

「分かりました、えっと、変身は・・・」

（なぁ、お前だったらどうするアンク？お前の事だから、『オーズはみせもんじゃねぇんだ、見たけりゃセルメダルを寄越せ！』とか言いそうだな）

机の上にあるタカメダルを見ながら映司は思う。
このタカメダルが、アンクの人格を形成してたメダルかどうかは映司自身分からないが、アンクがプトティラコンボは危険だからと言って、あのアンクが自分自身のコアメダルを投げたのだ。
それは映司にとって、今まで見てきたアンクが取った行動とは信じられなかった。アンクは何よりも自分の欲望がままに色んな事をしてきた。グリードは本来そういう物だから、何よりも過去の出来事で戦いを嫌う映司がグリードと戦ったのは、グリードが人間とは分かり合えないと映司が割り切った程、ヤミーとグリードが欲望に忠実だからである。そのグリードのアンクが、自分を犠牲にしてまで映司のグリード化を止めた事は、それくらい心に響いた事だった。
だからこそ、映司は手の中にあるタカメダルに、アンクの意志が内包されたコアメダルであってほしいと思っている。
しかし、当然ながらメダルからの反応は無いので、映司は続けて言う。

「うーん、オーズは見せ物じゃないんで、簡単には見せられないです。すいません、シャーリーさん。それに・・・君は？」
「ペリーヌ・クロステルマンですわ。」
「分かった、ペリーヌさんには悪いけど、俺自身もこれが夢であってほしいって思ってますよ。さっき言ってた、ネウロイでしたっけ？詳しい事情は分からないけど、そんな怪物と戦えるのが君たちみたいな、女性しか居ないなんて信じたくもないし。」
「まぁ、さっき貴方の話が本当なら、元の世界に戻りたいって言うのも分かりますわ・・・でも、やっぱり信じられ『プウウウゥゥゥーウウウウゥゥゥゥゥー』え？」
「警報だな、ネウロイが来たぞ。今はみんな大変混乱してると思うが、出撃準備だ！」

「「「「「はい！」」」」」」
「まったく、面白い事が起きてる上にネウロイまで来てるってのに、ハルトマンさんと、バルクホルンさんはまだ来ないのカヨー」
「そうねー、警報まで鳴ったのにまだ来ないなんて・・・何してるのかしら？」
「あのー、ミーナさんでしたっけ？その、ネウロイって奴とこれから戦うんですよね。」
「そうね、これから出撃します。今外は危険ですので、ここで私たちが戻るまで待っててください。」

映司は、目の前の女の子達が戦いに行くのを黙って見ているのは無理だった。
なにより、過去の旅で内紛に巻き込まれた時、目の前の女の子を助けられず、身代金を払って一人だけ日本に帰って、その上内紛の話を美化されたのだから。何もするなというのが無理である。
なにより、今は伸ばせば届く手が、力が、映司にはあるのだから。

「だったら、俺も戦います！目の前に手を伸ばせば助かる命があるのに、何もできないなんて嫌ですから！」
「映司君・・・フフッ、宮藤さんみたいな事言うんですね。でも、そんな簡単に私たちを信用していいのですか？」
「勝手に信用してますよ、朝ご飯ごちそうになりましたし。それに、今朝からの長い付き合いですからね。」
と映司は少しも顔色を変える事無く平然と言いのける。
「ミーナ、私からも頼む。是非とも仮面ライダーとやらの力を見てみたいしな。それに、映司はもう止めても無駄だと思うぞ。芳佳の時みたにな。」
「美緒・・・そうみたいね。それじゃあ映司君、ネウロイに勝てないと思ったらすぐに引く事。これだけは守ってください。私としても、せっかくできた仲間を失いたくは無いですしね。それと、これ

を耳につけてください。簡単な無線機器です。」
「分かりました。っと、これでいいですかね。」

耳にインカムを取り付けた映司は、メダルを机の上から取り、ふとある疑問が出てきた。
「そういえば出撃って、どこから出ればいいんですか?廊下から外を見たとき、周りが海ばかりだったんですけど・・・」
「そうね、着いてきてくれれば分かるわ。ところで、その仮面ライダーって空飛べるのかしら?」
「うーん、メダルによっては飛べない事は無いですけど、なんでですか?」
実際にネウロイを見た事のない映司の想像するネウロイは、ヤミーやグリードが一回り二回り大きくなって、それが世界各地で暴れているとしか考えたなかった。
「・・・ネウロイはね、空を飛ぶのよ。」
「・・・え?」

自己紹介とメダルとズボン2（後書き）

映司が自分の事を説明する場面がありカットしましたが、内容的大まかに説明したのは以下の事。

まず自分はこの世界の人間じゃないのかなって推測を前提に話し始めて、グリードって怪物が人間の欲望に、セルメダルって特殊なメダルを投げてヤミーって怪物を生み出して、人々を襲い欲望が膨れあがりそれを餌に育つヤミーからセルメダルを稼ぎつつ、コアメダルを全て集めて完全体になろうとしてる。それを阻止するのがオーズ。

映司が話してる間にも、周りのウィッチーズから質問が有ったり、茶々が入ったりして大分馴染んでます。他のウィッチーズメンバーの名前を少しだけですけど覚えてます。

飛ぶ力とコアと復活（前書き）

？「ハーッハッハッハ！」
映司「この分かり易い元気でうるさい笑い声は・・・」
坂本「おはこんばんちは諸君！鬼の少佐こと、坂本美緒少佐だ！最近はまってるのは訓練に、機関銃と扶桑の刀の手入れだ！ハーッハッハッ　　ハハァ→」

ところで阿部礼二知ってる人読んでる？

飛ぶ力とコアと復活

「・・・あの、ネウロイって飛ぶんですか？」
「少なくとも、私たちの相手をするネウロイは飛行するネウロイね。なにせ私たちは、『第５０１統合戦闘航空団・ＳＴＲＩＫＥ　ＷＩＴＣＨＥＳ』ですからね。」
ミーナは一区切り置き「ルッキーニさんとシャーリーさんは早く出撃準備しなさい」と叫ぶと、まだ面白半分興味半分で映司を見ていた、ルッキーニとシャーリーは「「はい」」と返事すると、駆け足で食堂を出て行った。

「戦闘航空団・・・ね、なるほど。さっさと知っておくべきだったなぁ。それにしても知らない言葉がいっぱいだなぁ。ストライクウィッチーズって、ミーナさん達が魔女みたいな言い方なんですね。」
「えぇ、私たちはウィッチーズ、魔女よ。あら、これもまだ説明してなかったかしら？」
「全然知らないですよ！じゃあ、箒に乗って戦うんですか？戦う方法は魔法？ドイツで見た魔女って色んな薬草使ったりとか、暗い感じの服装だったんだけど・・・やっぱり、俺の常識は通じないって事なのかな・・・」
「フフッ、どうやらそうみたいね。格納庫につくまでに軽くだけど、私たちの事とネウロイについて説明するわ。それじゃ着いてきてください。」

キングクリムゾン！

「そこまで深刻な問題だったんですね、ネウロイに領土を侵略されてるなんて・・・」
「そうよ。昔は国々が争ってばかりいたから、その罰が当たったのかもしれないけど・・・それでもネウロイは許せないわ。」
ミーナは幼い頃から歌が得意で、将来は歌手を目指していた。それをネウロイという地球外生命体がいきなり現れ、戦争の所為で夢を断念しウィッチにならなければならなかった。それ故に、ネウロイを倒すことはもちろんの事、ネウロイに対し私怨を抱いていた。

「それにストライカーユニット・・・ですか。」
だからそんな格好してるのかと映司は一人納得する。
「そうよ、ストライカーを装着してるウィッチのみが、瘴気の関係でネウロイと近づけない人々の代わりに、近づいて戦う事ができるわ。最近だと、対ネウロイ用主砲を装備してる戦艦もあるらしいけど、主な戦力は私たちウィッチーズね。さ、着いたわ。」
映司が扉の中を覗くと、既に説明に聞いた『ストライカー』と呼ばれる装備を、脚に装着し、背中に銃器を持っている女の子達が居た。
「本当に戦争なんだな・・・」
映司はしばらく戦争という大きな争いごとから離れ、グリードやヤミーと戦っていたため、あの時の、目の前の少女を救えなかった事を思い出し、改めて目の前の少女達の命だけでも助けなければと思い直した。
のだが・・・
「そういえば、俺どうやって戦えばいいんだ・・・」

映司が悩むその一方で、更に悩む者が一人

「えぇい、まだハルトマンとバルクホルンは来んのか！」
と一人怒りをあらわにして叫んでる坂本がいた。

その直後、噂をすればなんとやら。
「少佐！遅れて申し訳ありません！」
「バルクホルン！規律を重視する貴様が遅刻とは珍しいじゃないか、どういう了見だ！」
映司が怒鳴り声がした方を見ると、肩ではぁはぁと息をし、坂本の怒声をくらってる女性、バルクホルンがいる。
「それが、ハルトマンが珍しいものを見つけまして・・・そいつが、昨日ハルトマンが拾ったメダルを盗ったものですから、それを一緒に追いかけ回して、気づいたらいつの間にかこんな時間になってしまって・・・」
「メダル？珍しいものだと？こっちはネウロイが・・・ん、メダルだと？「遅れてすいませーん」ハルトマン！」
坂本の考えを中断させたのは、間の抜けた謝罪がしたのと
「ッチ、メダルの気配がしたからゲットしたのはいいものの、こんな間抜けな奴らに捕まるとは、なぁ。」
と愚痴をたれる、縄に繋がれた赤い腕に、羽根を生やした生き物が宙を浮いていたのと

「あ、ア、アンクウウウゥゥー！！！」

と、いきなり叫びだし、その赤い腕に向かって全力疾走した映司の姿を見たからだった。
「アンク・・・？あれが話に聞いていたグリードとやらの一人か。」

「そうみたいね。でも、美緒あれを斬ろうと考えちゃ駄目よ。」
坂本はさっきまで持っていた木刀はどこへやら、手に持っていた真剣を抜こうとしていたところだった。
「なんでだ、グリードとは話を聞く限りじゃ怪物を生み出す化け物じゃないか。そんな奴、さっさと切り捨てるに限る。」
「あら、あれを見た限りじゃそうとは思えないわ。」
ほら、と続けて指を差した先には

「アンク、お前無事だったのか！良かった、本当に良かったよ！」
と目に涙を溜めて、赤い腕を両手でつかんでブンブンと振り回す映司と

「ハッ、せっかく手に入れた命なんだ、早々簡単に手放せるか。・・・最も身体はもう無いがな。お前が恐竜のコンボを使えば、その必要も無かったかも知れないけどなぁ。」
と皮肉混じりに返す赤い腕。

それを聞いた映司はニヤリと笑った。
「何言ってんだよ、お前がこれにしろって言って投げたんじゃないか。」
「そうだったか？もう覚えてないな。」
と、他は全て出撃し、残った四人はその光景を見てそれぞれの感想を口に出した。
「・・・どうやら、その様だな。」
「でしょう？まるで兄弟みたいね、不気味ですけど。」
「誰だろ？この男の人、ちょっと格好いいなぁ。」
「誰だ？この男は、赤い腕の知り合いか？」

最後の二つの言葉を聞いた映司は、この二人がエーリカさんと、バ

ルクホルンさんと理解した。
「あ、俺世界中を旅してる火野映司って言います、こいつは色々あって今は俺の仲間のほら、アンク」
と赤い腕を小突く。
「アンクだ。」
とだけ、アンクは言う。
「ゲルトルート・バルクホルンだ。カールスラント空軍、階級は大尉だ。」
「エーリカ・ハルトマン。カールスラント中尉。ねぇねぇ、こいつは何なの？」
と言って縄をグイッと引き寄せる。
「おい、いい加減こいつをどうにかしろ。邪魔だ。」

「お前達！詳しい説明は後だ！特にそこの二人、さっさと出撃準備をしろ！」
と坂本が怒鳴る。
「えぇー、でもこいつどうするの？見るからに怪しいよー」
と言って縄をぐいぐいと引っ張る
「だから引っ張るな！」
「そいつは見るからに怪しい。が、そこの男の知り合いだそうだ。そこの男の事は、私たちは信頼している。だから縄を外しても大丈夫のはずだ。いいからさっさと準備をしろ、ネウロイがこっちに近づいてきてる！」
「ちぇー、分かったよー。」
見るからに不快な顔をしながら縄を渋々外すが、ハンッとアンクが鼻で笑うものだから、更に渋る。
「いいからハルトマン、早くしろ！今はネウロイが先決だ。おい、

火野と言ったか。一般人ならさっさと基地の中に隠れた方がいいぞ。」

バルクホルンは、縄を外すのを渋っているエーリカをせかし、映司に怪我をさせないために基地の中に誘導を促して出撃の準備をしにいった。

「まぁ、そういう事だから、そいつ連れてさっさと布団にでも潜ってた方がいいよー」

と、似たような台詞を言い残して同じく出撃準備に向かった。

「忙しい人だなー」

「やっと離れたか、おい映司。ここはどこだ?メダルの気配がまったくしないぞ。」

「あぁ、ここは「おいそこの二人」・・・アンク、詳しい話は後で。」

「それじゃあお前達、感動の再会の所悪いがお前達はどうする。映司の変身するオーズとやらは、空は飛べないのだろう?どうする?」

さっきの映司とミーナのやりとりを聞いていたので、おそらく今のオーズは飛べないだろうと推測したのだ。

「あー、そうですね・・・そう言えばアンク、お前の盗ってきたメダルって何のメダルだ?」

「俺のコアメダルのクジャクとコンドルだ。あのとき粉々に砕け散ったはずなんだが、なんでここにあるのか、未だに理解できていないがなぁ・・・おい映司、お前他のコアメダル持ってるな?」

「クジャクとコンドルか、良かったー。坂本さん、ミーナさん、これで空飛べますよー!」

「そうか、それじゃあ私とミーナも出撃する、後の事をどうするかは任せるぞ。」

「それじゃ私たちも行くわ、頼りにしてるわね。」

二人とも映司に声をかけ、出撃に向かう。

残った二人はしばらく会話を続けていた。
「あ、そうそう、なんかいつの間にか入ってたんだよね。タカトラバッタのメダル。アンク、お前自分自身のタカのメダルはどうしたんだよ?この世界にあるメダルの気配くらいは感じるんだろ?」
「無い」
「そうか、無いのかー・・・えっ、無いの?!」
「あぁ、俺のタカコアメダルの気配が無いんだ、そのタカメダルじゃない。セルメダルは大量にあるんだがな。それだけじゃ腕で精一杯だ、なんでセルだけで生成できたのかすら、不思議で仕方ないがなぁ。今はクジャクがあるから楽だが、さっきから気持ち悪くて仕方ない。」
「へぇー、コアメダル無しで腕が作れたんだ、何か不思議なもんだな。」
それで、と一言置き
「アンク、何か感じるか?」
「あぁ、グリードと似た雰囲気がする。が、メダルの気配がまったくしない。コアメダルはともかくな。ヤミーともどこか似てるんだが、メダルの溜まる音がしないからヤミーとも違う。ワケの分からんもんを感じるなぁ。」
「そいつさ、ネウロイって言ってこの世界のお前達みたいなもんなんだ。」
と区切って、いつの間にかアンクが指に持っていたクジャクとコンドルのメダルを取り、タカのメダルを取り出す。
「だからアンク、行くよ。」
「勝手にしろ。だが、俺はセルメダルを失うわけにはいかないから俺はここで待つ。奴からはセルメダルが奪えないしなぁ。」
「そっか、それじゃアンク、行ってくる。」
「コアメダル無くすんじゃねぇぞ」
「分かってるって」
これまたいつの間にか手に左手に持っていたオーカテドラルを腰に

当てると、ベルトの様な形になり腰に巻き付く。そこに空いてる三つのくぼみに右から順に、タカ　クジャク　コンドル　の順番にメダルを入れ左が下になるように傾かせ、オースキャナーで右からスキャンしポーズを取り

「変身！」

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タージャードールー』

いくつもの丸い光が出てきて綺麗に映司の周りを回り、三つのマークが一つの大きな赤い円となり、それが映司の体に当たると同時に、そこに映司の姿は無く『仮面ライダーオーズ』がそこに立っていた。

飛ぶ力とコアと復活（後書き）

次回に続く。

飛ぶ力とコアと復活2（前書き）

亜種のクジャクじゃ飛べないらしい、やっちまったな。
だが編集すれば問題なかろうなのだー！

あと擬音やポーズは各自脳内変換でお願いします

飛ぶ力とコアと復活2

バッバッバ
と優雅に、しかしキレのあるポーズをとり「ハァーッハ！」と声をあげる。
すると、オーズの背中から3対の翼を展開し空へと飛び立って行った。
残されたアンクは、何か使えそうなものは無いかと格納庫を探り始めた。

一方そのころ、既に空へと飛び立ったウィッチーズは今まで戦った事の無い、亜種のネウロイに苦戦を強いられていた。

「くっ、あのネウロイなんなんですの?!今までとは全然違う戦い方をしてきますわ！」
「それにあの見た目、なんか虫みたいで嫌ですー！」
「深緑の模様が入ったネウロイか、昨日報告にあった赤い鳥模様が入ったネウロイには似てるが、攻撃方法や形が随分違うな・・・」
「当たらなければ大丈夫なんだが、今回はチョットキツイナー」

今ウィッチーズが戦っているネウロイは、従来のネウロイに似てはいるものの、先端と思われる部分には内側に曲がった角が二つついており、攻撃も本来の赤いビームに加え、近づこうとするなら緑色の雷がネウロイから発せられ近づき難いのだ。
所謂じり貧である。

「坂本さん、まだコアは見えないんですか?！」

（このままだと、基地に被害が出ちゃう！）

芳佳に限らず、他のウィッチも機関銃でネウロイを攻撃するが、壊れた部分はすぐに再生し始める為長期戦となり、飛ぶ魔力は残しつつシールドを展開するもそれぞれに限界が来ていた。
そんなウィッチ達の焦りを悟り、落ち着かせようと坂本は声をかける。しかし、坂本自身も焦っていた。
「落ち着け宮藤、しかし、くそっ！コアが小さすぎて特定しづらい！」

ネウロイのコアにも例外はある。基本的にネウロイが大型であればそれに比例しコアも大きい。だが今回は違い、コアが小さく坂本の『魔眼』を持ってしても特定は難しい物だった。
その焦りからできた隙を、ネウロイは見逃さなかった。

「少佐！右です、右！」
ウィッチーズの後ろから狙撃するタイミングを計っていたリーネが、誰よりもいち早く坂本が展開しているシールドの死角から、緑の雷と同時に向かっていくビームを察したが少し遅かった。
（まずい、このままじゃ少佐が！）

声に気づいた少佐が右に目をやる。だが、シールドの展開も救助も間に合わない。
リーネの声に気づいた者達は、誰もが無理だとあきらめた。

「少佐ー！！」

そう叫んだリーネの横を赤い何かがすり抜けた、そう錯覚する程それは早く空を駆けた。

そして、その赤い何かは坂本の居た場所から少し離れた所に、坂本をお姫様抱っこして滞空していた。

「キィー！なんなんですの！あの赤い怪人は！少佐になれなれしくして！」

「マァマァ、オチツケヨ。」

「はぁー危なかった。っと、坂本さん、大丈夫ですか？」

「その声は映司か！すまんな、助かった！・・・ところで、降ろしてくれるか。」

「あ、すいません。」

よっこらせと空中に降ろしたオーズはネウロイを見る。

「これがネウロイ・・・思ってたより随分大きいな。それに、あの攻撃や角見てるとクワガタヤミー思い出すな。っと！」

ビームと雷がオーズと坂本を襲ってきたので、二人とも際どく避ける。

映司は両手を前に出し、少し手を引くとオーズの後ろに無数の羽根が出てきて、思い切り両手を前に突き出すとその羽根が全てネウロイ向かって飛んでいった。

少しばかりビームや雷に撃ち落とされたが、残った羽根手裏剣一つ一つの破壊力がすさまじく食らったネウロイは体中に穴が開いた。

が、治癒能力はすさまじくどんどん傷口が塞がれていった。

「おぉー、なんだありゃすげーな！しかもあの飛ぶスピード、目指している音速に追いつきそうな勢いじゃないか！」

「あれが、火野さんの言っていたオーズですの？でも話に聞いていた赤黄緑の色じゃないんですのね。」

「流石にコアを当てるのは無理だったみたいだけどねー。」

ウィッチーズはその威力に驚いていたが、当のオーズはこの攻撃を軽いジョブ程度にしか思っておらず、この程度で倒せる相手とも思っていなかったようだ。
「話に聞いていた通り、コアってのを壊さなくちゃいけないみたいだな。」

しかし、この攻撃も無駄に終わったわけでは無く、再生するのに隙ができ坂本はコアの位置を特定に専念ができた。

「この攻撃でまだ再生が終わってない所、とすると、コアのある位置は・・・見えた！みんな、聞こえるか！コアの位置が把握できた、奴のど真ん中だ！」
「ど真ん中ですか、分かり易いですね。じゃあ、俺は止めを刺せるかどうか微妙だな。電撃やビームで威力が落ちるだろうし、とすると・・・」

オーズはふと大きな得物が目に入り、あれなら行けるかもと思い近づいていく。

「よっと。確か、リーネちゃんだよね？」
「その声、やっぱり映司さんですね？！」
「そ、詳しい説明は後だけどこれがさっき言ってたオーズ。それで、見たところその銃って狙撃銃みたいだから、コアが見えるところまで外側を削るからコアを狙撃してほしいんだけど、やってくれる？」
「は、はい。やってみます！」
「それじゃ行くよ！」
「はい！」
「ま、待ってください。私も行きます！」
「芳佳ちゃん！」

「映司さん、私まだ魔力はありますから、シールドをはってある程度までなら近づけます！」
「分かった、それじゃあリーネちゃんの護衛頼んだよ！」
「わ、分かりました！」

映司は無線を使って、これから大規模な攻撃をするから、少しの間芳佳とリーネの二人以外はネウロイとの距離を安全な距離を保ってくれるよう頼んだ。
ペリーヌはまだ信用できないとかご託を並べていたが、芳佳とリーネの説得により渋々離れていく。

「よし、こっからなら！」
オーズは大きく飛翔し、ネウロイの真上を取る、まだ再生がすんでいないのか飛行するスピードはのろのろと遅い。
ベルトの左側についているオーメダルネストから、黄色と緑のメダルを取りだしベルトに入れてスキャンする

タカ！
トラ！
バッタ！

『タットッバ！タトバタ・ト・バ！』

「・・・今の歌、少しダサイ・・・」
「なんていうか、変な歌ですね・・・」
「あっはっはっは、面白い歌だな！」
「わははは、何今の歌ー」

「俺も初めて聞いたときはそう思ったな、もう慣れちゃったけど・・

・それじゃリーネちゃん、芳佳ちゃん行くよ！」
「「はい！！」」

オーズはネウロイに落下していきながら、芳佳とリーネに指示を送りつつ、もう一度ベルトにはまったメダルをスキャンする

『スキャニングチャージ！』

すると、映司の脚がまさにバッタの脚の様に変形し目の前のネウロイに向かって、赤・黄色・緑の三つのリングが出る。
映司は、タカの複眼で坂本の言っていたど真ん中を寸分狂わずに狙いを定め『タトバキック』を放つ。

「ハァーッセイヤァァァァー！！！」

ドッゴォン！
と大きな爆発がした。
コアを破壊するまでには至らなかったものの、表面がとても大きくえぐれ今までの大きな六角形のコアとは違い、小さな丸い形のコアがあらわになった。

「リーネちゃん今のうちに！」
芳佳が爆風からシールドで照準器を覗くリーネを守る。
「お願い・・・当たって！」
ドォン！
ガチャン、キィン！

ドォン！
ガチャン、キィン！
ドォン！
そして
三つの弾は狙い通りに当たり
一つ目はコアをかすり、傷をつけ、二つ目でヒビを入れ、三つ目で完全に破壊した。
ネウロイのコアは砕け散り、周りにはキラキラと輝く欠片だけが残った。
「やったね！リーネちゃん！」
「やった、やったよ！芳佳ちゃん！映司さん！」
二人は仲良く手を取り合い喜んでいる。
他のウィッチーズ達も、無茶だとか凄いキックだとワイワイとしていた。
一方オーズは
「うわぁー！やっつけた後どうするか考えて無かったー！」
マヌケな悲鳴と共に海の中へとダイブして行った。
オーズは体が重いので水の中で変身を解き、急いで水面へと泳いだ。
水面に顔を出した映司は、ぷはーっと息をし
「すいませーん、誰か助けてくれますかー！」

と叫んだ。

「分かった、今向かうから待ってろ。ミーナ、手伝ってくれ。」
「分かったわ。それにしても映司君、結構無茶するのね。」

助けを待つ間、映司は空を見上げながらぷかぷかと浮いていた。
その時、映司のすぐ真横にぽちゃんと何かが落ちてきた。
映司は思わず落ちてきた『それ』を水の中でつかんだ。

「これってまさか・・・やっぱり、クワガタのコアメダルだ。もしかしてって思ってたけど、やっぱりコアメダルがネウロイの中にあったんだ。」

映司はキックの時、タカの力で狙いを定めたとき微かにメダルの反応を感じたのだった。

「もしかして、このクジャクとコンドルもネウロイから出た奴なのかな。だとしたら、大体に説明がつきそうだけど、ゾウのコアメダルを取り込んだネウロイも飛ぶのかなぁ。」

こうして新しくクワガタのメダルをゲットした映司は、坂本とミーナが引き上げて両肩を支えてくれた。そのまま基地に運ばれた映司は、アンクにネウロイとコアメダルの関係を話してコアメダルを全部アンクに渡し

「ハックション！」

と大きなくしゃみ一つした。みんなが笑っていたので、思わず釣られて映司も笑った。

飛ぶ力とコアと復活2（後書き）

アンク「映司、無線で聞こえていたがお前、自分の命も大事に思えてきたか？」

映司「え、何で？」

アンク「いつものお前なら、いくら体力を消耗するからと言っても威力の高いタジャドルで蹴りをつけるだろうと思ってなぁ。」

映司「あぁ、それなら違うよ。」

アンク「何？」

映司「確かに、タジャドルなら俺一人でいけたかも知れないけど、何も一人で背負うことは無いんじゃないかなって思ってね。後藤さんや伊達さん、ヒナちゃんやアンク達のおかげで、仲間に頼ってみるのもいいかなって、そう思えるようになった。ただそれだけ。」

アンク「ハッ！伊達が妙に乾いてると言ってたが、映司、お前も少しずつ潤ってきたみたいだなぁ。しかし、相変わらず自分の命は別問題か。」

映司「そうかなぁ。でも、潤いすぎるとまた手を伸ばさなくなるかも知れないから、それだけは勘弁な。」

アンク「俺に言ってどーする」

契約と新しい身体とバイク（前書き）

感想なんかで、それぞれの髪型の特徴を教えてくれるとこれ幸い也。てかお願いします。知ってる髪型ポニテとツインテールとロングヘアー、ショートヘアー、ボブヘアーと三つ編みとアンテナくらいしか知らないんで、あれ、アンテナじゃなくてアホ毛だっけか？そういやウルトラマンにツインテールって出てきたよね、グドンに食われたんだっけ。てかあれってツインテイルだっけ。

契約と新しい身体とバイク

あの後、映司は基地の中にお風呂があるから入れと言われ、入ったのはいいが着替えが無いので服を軽く洗い乾かしている間、パンツ一丁でアンクと基地の中を探検していたら坂本にものっ凄く怒られた、坂本以外のウィッチーズにも、ものっ凄く怒られた。アンクは相変わらず腕だけでふわふわ浮きながらそんな映司を笑っていた。

夕食を取る前に、芳佳とリーネに簡単に基地を案内され、最後にブリーフィングルームに案内された。
そこには、芳佳とリーネ以外の５０１メンバーのみんなが既にそこに揃っており、ミーナが教壇に立ちミーティングが始まった。

「さて、今日は色々な事がありました。映司君とアンク君が、話に聞いた通り・・・っと、ハルトマン中尉とバルクホルン大尉はまだだったわね。後で本人に聞くと良いわ。それで、二人はこれから行く当てが有るのかしら？」
「俺は特に無いです。アンクお前は？」
「俺も無いな。だが、ネウロイがコアメダルを持ってると分かった以上、俺としてはここを離れるのは嫌だがなぁ。」
「そうね、昨日ハルトマン中尉とバルクホルン大尉が倒した亜種のネウロイからもメダルが出たらしいわね。これから先、まだまだ新しいネウロイが出てきて苦戦することは目に見えてます。今は少しでも戦力がほしいのが現状です。そこで、一般人の二人にはとても申し訳ないと思うのですが、しばらくここに住んでもらい、ネウロイとの戦いの力になってほしいと思ってます」

映司はてっきり、この力を利用するためにもう少し厳しめの意見がでるのかと思ったので、良心的な意見に素直に聞き返した。

「えっ、良いんですか？」
「もちろんよ。正直、まだ信じられない事だらけですけど、目の前で起きた出来事ですからね、そこまで頭は硬くありません。ただし、あなたにはネウロイが出た時は出撃してもらいます。それに、雑用もいくつかやってもらうわ・・・どうかしら？」
「もちろんいいですよ！良かったなアンク、寝床は見つかるし、これでコアメダルも回収できるし、一石二鳥だな！」
「そうだなぁ。だが、いくつか心配事がある。だから三つほど契約してもらおうか。」
「契約？できる範囲ならしますが、ここに居るみんなが守れるとは限りませんよ？特にルッキーニさんには、ね。」
すると、少し褐色がかった肌の女の子が返事をする。
「なんだよー、そんなにあたしって信用無いのー？ミーナ中佐ー」
ルッキーニの隣に居るシャーリーが茶々を入れる。
「お前のどこに信用が持てるって言うんだ？よくさぼって寝て騒ぎを起こす癖にー。このこの。」
そんな様子を見てもアンクは何もコメントせず続ける。
「ハッ、それじゃあ一つ目だ。まず、コアメダルは全て寄越せ。コアメダルの力を制御できるのは、この馬鹿、オーズの力だけだ。」
そう言って映司を指さす。
「普通の奴が持っても良い代物じゃねーんだ。お前らにも、はっき

り言って制御は無理だ。力を使おうものなら間違いなく暴走する。いいな？」

みんなオーズの力を見たので、頷くが一人だけ、バルクホルンが手を挙げて聞く。

「その、コアメダルが暴走するとどうなるんだ？」

「さあなぁ、どうなるかは様々だ。ただ、昔のオーズはメダルの力を制御できなくて暴走。結果、周りに居たグリードを封印して消滅した。」

「なるほど、ありがとう。」

「トゥルーデ、もしかしてメダルの力使おうと思ってたんじゃないのー？」

金髪の少女、エーリカ・ハルトマンの言葉は核心をついたらしく

「な、何を言うか！カールスラント軍人たるもの、少しでも戦闘が楽になればと思ってだな「はいはい、分かったよー」ハルトマン！」

「フッ、似たような考えを持つ奴はどこにでもいるなぁ。メダルの力を制御した兵器は向こうの世界にもあった。「だったらこちらでもその兵器を」だが、そのメダルはコアメダルとは別、もう一つのメダルが主体なんだ。」

このメダルだ、とアンクは手首をくるんと回すと、指には銀色のメダルがあった。

「こいつは『コアメダル』とは別のメダル、さっきのネウロイのコアを覆うようなもんだ。」

「ん、あれ、アンク。お前戦闘見えてたの？結構遠かったと思うんだけど。」

映司がタジャドルに変身し、全速力で飛んで探しても３０秒はかかったが、実際には格納庫からの出撃ブリッジから真逆だったため、見えない位置にあったものだからそんなにかかった訳だ。

「いや、近かったぞ。それに便利なもんがこっちの世界にも入ってきているのを見つけてなぁ。そいつを使った。」
「便利なモノ？遠くの景色が分かるのがここにアルノカ？」
と殆ど棒読みで聞いてきたのが、エイラ。

「あぁ、格納庫を探索してたら見つかってなぁ。もしかしたら、俺らの世界から俺ら以外のモノがどこかに紛れ込んでいるかも知れないな。」
「そうか！それで、そいつを借りたいんだが・・・良いか？」
「駄目にきまってんだろ」「良いよ、それくらいしかできないけど」
と一つの質問に二つの答えが返ってきた。

「ッチ、おい映司、お前「どうせタカカンとバッタカンでしょ？それに、しばらくここにお世話になるんだから、な。」・・・仕方ねぇな。」
「って事で、後で俺らの世界の道具をお貸しします。」

「良かったな、サーニャ。これで少しはラクになるぞ。」
と、寝ているのか起きているのか分からない、寝ぼけ眼のサーニャに向かって言った。
「うん・・・エイラが無理言ってごめんなさい、ありがとうございます・・・」

「良いって、気にしなくて」

やりとりが終わったのをアンクは見て、話を続ける。

「・・・話はそれたが二つめだ。どうやら、ネウロイとやらと戦っているのはお前達以外にも居るみたいだなぁ。そいつらに、亜種のネウロイを見ても、例え倒してコアメダルを手に入れたとしても、上層部には言わないようにいっといてくれ。」

その言葉を聞いて、映司も頭を下げて同意する。

「あの、それは俺からもお願いします。」

映司は顔を上げて、一気にまくし立てる。

「今まで、色んな戦争を見てきたから分かるんです。上の人達は良い人間、悪い人間にかかわらず、新しい力が見つかったら、間違いなくそれを研究して戦争に投入すると思うんです。それが強力だと知れば知るほど、戦場に繰り出して、自分の戦果を挙げたいって欲望はどんどん大きくなって、戦場に居る人間なんておかまいなしに自分の欲望に忠実になって、その結果として国が滅ぶ事になったりするんです。」

映司は辛辣な顔をしながらも、拳を強く握りしめながら話す。

「中には良識ある人も居ます。でもその人が上の人間であれば、何が何でも伝えてはいけません。いくら信用していても、家族でも、それだけは避けたいんです。情報なんてどこから漏れるか、そんなの特定できませんから。ですから、お願いします。」

絶対にこれだけは止めると覚悟を持って話し終え、もう一度頭を下げる。
元々、有名な政治家の息子のため、映司は戦争のメカニズムはそこそこ詳しい。
だからこそ、小さな村が内紛で滅んだり、目の前の少女が助けられなかったのは、死ぬほど後悔することだった。
分かってても、手が届かなく、手を伸ばせなかったから。
しかし、今回はまだ手が届く。だからこそ、手遅れになる前にどうにかしたい。
そんな映司の必死の説得が通じたのか、ミーナが口を開く。

「・・・分かったわ。みんな、何があってもこれだけは絶対に守る事いいわね？」
「「「「「はい！！」」」」」
「もしかしたら、もう亜種が発見されてるかも知れないけど、できるだけこの情報は保守して、ウィッチーズだけでリンクするようにするわ。それでいいかしら？」
「はい、ありがとうございます。良かったー、みんな分かってくれて。やっぱり、みんな朝からの長い付き合いだから分かってくれたんだよなー。」

ハァ、と安堵して溜め息をつく。
相手は今日会ったばかりの人間であろうと、たったの数時間でもあれば、相手が信用できる人間かくらいは理解できる。
どこか抜けて現金な所もあるが。（例：泥棒さんのジュース）

「まぁあんな顔して説明されたら、誰だって説得されちゃいますよ。凄く、凄く悲しそうな顔でしたよ・・・」
「そうでしたよ。とっても、とっても辛そうな顔でした・・・」

と、芳佳とリーネまでもが釣られて辛辣な顔で映司に声をかける。

「こ、ここまで空気を重くするつもりは無かったんだけどね。難しいとは思うけど、俺の言ったことを理解してくれれば俺は良いし。ほら、アンクまだあるんでしょ？」

「あぁ、三つめだ。さっきも言ったが、俺ら以外のものがこっちの世界に入ってきている。それが、どこに、どんな形であるのかさっぱりだ。だから未確認の物が見つかったと情報が入ったら、逐一俺に教えろ」

「アンク、もう少し頼み方があるだろ」

「フン、俺からはこれだけだ。全部守ってもらうぞ」

この後、もう少しばかりミーティングが行われ、お互いの情報を交換し合った。

アンクはエイラとサーニャと一緒に格納庫に向かい、他は食堂へと向かう。

食堂にて、映司と芳佳とリーネが晩ご飯を作り終わった、丁度良いタイミングでアンク達が帰ってきた。が、入ってきたアンクの姿を見て、アンクと分かったのは映司だけだった。

「待たせたなぁ。」

「ア、アンク！どうしたのその身体！まさか刑事さんの身体まで来てた?!」

金髪でガラの悪い青年がエイラとサーニャの後に続き入ってきた。

「ご飯できましたー。って、え、アンクさん?その人が?」

「えぇー、アンク？この人が？」
「また知らない人だー」
「しゃべり方と見た目のイメージはアンク君そっくりですけど・・・」
「ハッ、ならこいつで分かるか？」
そう言って普通の腕だった右手を、赤い羽根の生えた右手に変えるのを見てみんな納得した。

「でもアンク君、その身体ってどうしたのかしら？」
「そうだよアンク、お前のその身体刑事さんのか？」
「いや、違うなぁ。セルメダルが大量にあったから、コアメダルとセルメダルで生成した身体だ。しかも、メダルで生成したにも関わらず、だ。色がはっきりと識別できるし」
一度区切って映司と芳佳とリーネが作ったスープカレーを、皿を持ち上げてごくごくとワイルドに飲み干した。
「おいアンク、スプーン使えって。行儀悪いぞ。」
「まったくですわ！映司さんはともかく、アンクさんは礼儀が全然なってませんわ！後でしっかりと「もぐもぐ、ゴクン。これが熱くて味がするってのも分かる。」キィー！」
「まぁ、落ち着けペリーヌ。」

ポンっと坂本がペリーヌの肩に手を置き続ける。
「しょ、っしょしょ少佐！」
「アンク、つまりメダルの塊であるグリードの貴様が、『命』を手に入れたというわけか。一体どうやったんだ？」
「さあなぁ、前は死にかけの刑事にくっついてたんだが、今回ばかりは俺もさっぱりわからん。大量のセルメダルとコアメダルだけで作ったはずなんだからなぁ。ただ分かるのは、今俺は確かに生きてるって事だけだ。」

そんなアンクを見て映司は少しだけ嬉しい気持ちになった。

「・・・良かったなアンク、欲しい物、手に入って。」

「まぁな。だが、メダルの塊でできたグリードが『命』を手にいれたんだ。」

ニヤッと不適に笑い

「こんな面白い、満足できることがあるか。」

「満足、できたんだな。」

「あぁ。後はメダルでできてるって所除けば完璧だなぁ。」

「そればっかりは誰かにくっつくしかないんじゃないかな・・・」

二人の会話を見ていたウィッチーズは、敵対関係にある人同士とは思えない会話に、なんとも言えない暖かい気持ちになった。

しかしお腹を空かしたシャーリーが空気をいつもの空気に変える。

「さーて、二人とも、とりあえず飯にするぞ飯！」

「映司、おかわりだ。」

「はいはい。それじゃ、アンクのスープカレーのおかわり取ってきますー」

「そうそう、今日はせっかく映司さんが手伝ってくれたので、映司さんが南米って所を旅してた時のメニューだそうです。」

「この赤いスープは何だー？」

「スープカレーって言うらしいです。なんかスパイスが足りなくて唐辛子でごまかしらたしいです。」

「へぇー、どれどれー」

とエーリカがスプーンですくい、ズズズと飲んだがすぐに

「かっ、辛いいいいいぃぃぃ！！！！」

と叫びごくごくと喉に水を流し込み、サラダをガツガツと食べ辛さを薄め始めた。

「どれだけ酒を飲んでも余裕なエーリカがスプーン一口でダウン・・・」

「エーリカ、大丈夫か！あのれ火野！なんて物を食い物を作ったんだ！」

「アンクよくゴクゴク行けたナー。あ、サーニャは少しにしておけヨ。」

「・・・でも、全部食べないと映司さん達に申し訳ない気が・・・」

「あら、結構いけるじゃない。映司君って料理も上手なのねー。」

「お、お前ら、訓練がたっ、足りないんじゃないのか？ハッハッゲホッゲホッ・・・全然辛くな、ゲホゲホ、辛く無いじゃないか。」

「美緒、目に涙溜まってるわ。」

「スパイスが足りなかったから、ちょっと唐辛子入れすぎちゃったかなー・・・アハハ。はい、アンク。おかわり」

「ねぇねぇ、アンクさんは食べても平気なの？私も味見したけど、これは流石に辛すぎるよー」

「あぁ、辛いという味は少ししかしないからな。だが、これは美味い。アイスキャンディーの次くらいになぁ。」

「アイスキャンディー？」

「この世界には無いのかな？そういえば、時代もちょっと古いような気もするし・・・」

「何！アイスが無いのか？！」

「あぁ、大丈夫だって。『クスクシエ』で働いてた時に、作り方は知世子さんに教わったから暇なときに作ってやるよ。」

「ハルトマン中尉が簡単にダウンするなんてねー、ほんとにそんな辛いのー？ズズズ」
「あ、まてルッキーニ、少しずつにしておけ「ニャアアアアアアアアアアアア辛いいいいいいいいいいいい！！」・・・ほらみろ、いわんこっちゃない。まぁ、私は少しくらいなら辛いの平気だから大丈夫だけどな。あっはっはっは」
「あはは、リーネちゃん。私たちも食べよう？」
「そうだね、でもこれ、食べきれるか心配だよ・・・」
「残った分は映司さんが一晩寝かして、スープカレーを少し工夫して甘くするって言ってたから、食べられる分だけ食べよ？」
「そうだね、それじゃ映司さん、いただきます。」

「「「「か、辛いいいいいいいい！！」」」」

契約と新しい身体とバイク（後書き）

唐辛子ってなんかやみつきなる辛さだけど、あれって唐辛子の中にうまみ成分が入ってるからしいっす

っつか、見てて思ったけどウィッチーズ側の心情が全然書かれてねーなー、どうすっかなー。
次回はネウロイが出てこない、ドラマＣＤ的な感じにしたいなーって思ってます
ほのぼのとした話を書こうかな。

契約と新しい身体とバイク2（前書き）

前回の続き

ストライクウィッチーズはパラレルって考えてるんで、カレーがこの世界に浸透してないのはパラレルだからと思ってください。それ以外に都合が良い言葉が思いつかないんすよぉ・・・

ゆるゆり9話見たんだけど、おばけ屋敷のお墓のシーンで里中、鴻上、後藤、伊達、って文字がぎりぎり見えるお墓にだけ書いてあったんだけど、発見したときめっちゃ嬉しかった。ナイス演出

台詞の最後に句点いれないのがおベターなんですね。でも入れないとその台詞がうまく完成しないような気がするんで、自分の好き勝手させてもらいまぬーん

契約と新しい身体とバイク2

飯の後、映司とアンクは部屋に案内され、疲れが溜まっていた映司はすぐに眠りについた。
そのせいか、起きるのはいつもより早かった。
時刻は5時半。

「ふぁー、今何時だろ・・・うわ、早く起きすぎたかな、まぁ丁度いっか。」

映司はのっそり起きあがって食堂に向かうが、基地の外で木刀を振ってる坂本を見つけて声をかけようと近づく。

以下殆ど台詞

「ふっ！ふっ！ふっ！ふっ！」
「坂本さーん！」
「ふっ！ふっ！と、おぉ映司か、おはよう。よく眠れたか？」
「おはようございます、おかげさまでぐっすり眠れました」
「なんだ、映司も訓練か？」
「いや、こんな朝早くから訓練はちょっと・・・昨日のカレー辛すぎたみたいなんで、今日は甘くしようと思って仕込みを。」
「そうか、私は別に昨日の辛いままでも構わないがな、他の奴らは訓練が足らん！わっはっはっは！」

「そうですか？それなら、昨日の奴だけ坂本さん用に取っておきますね」
「い、いや！せっかくだから、これから仕込むのをもらおうか！」
「アハハ、分かり易くて助かります。それじゃあ、俺はこの辺で。訓練頑張ってくださいね」
「映司！」
「はい？」
「分かってると思うが、お前も今日から５０１ウィッチーズのメンバーだ。もっともウィッチでは無いがな。他人事みたいに言うが、お前も今日から訓練だ！ビシバシ行くぞ！分かったな！」
「いぇ、訓練は遠慮「分かったな？」・・・分かりましたよ。どうせやだって言ってもやらせる気みたいですしね、お世話になる身ですから文句は言えませんし。じゃ、食堂行ってきます！」
「あぁ、カレー楽しみにしてるぞ！」
（それにしても、ここ最近誰かの目線を感じるな。まぁ、大体予想はつくが。）

それを遠くから望遠鏡で覗く乙女が一人、自室で歯ぎしりしていた。

「キィー！なんなんですの、火野さんったら！少佐にあんなに慣れ慣れしくして・・・！宮藤さんと言い、火野さんと言い、なんでこうも少佐に・・・！キィー！」

場所は変わって食堂、映司が食堂についたのは６時。
時を早めてそこから更に３０分。

「おはようございます！映司さん起きるの早いですね、珍しく私一人で早く起きたと思ったに。」

「おはよう、芳佳ちゃん。十分早起きだとは思うけどね」

コトコトグツグツ

「あ、何かお手伝いします！」

ジャー、キュッキュ

ごそごそ（割烹着を着ける音）

「あ、じゃあさ、蜂蜜ってどこにあるか知ってる？リンゴはいっぱいあったけど、蜂蜜がどこにあるかわからなくってさ」

「おはよーございます。芳佳ちゃん、映司さん。」

「おはよー、リーネちゃん！蜂蜜どこにあったっけ・・・」

「おはよー、リーネちゃんも早起きだなー、流石軍人さんだなぁ」

「エヘヘ、そんな事ないですってば。私も何かお手伝いします。」

ジャー、キュッキュ

ごそごそ（エプロン着ける音）

「うーん、そう言えばカレーに合う汁物ってなんだろ。クスクシエだったら、何出すかなー」

「くすくしえ？」

「うん。俺がバイトしてた料理屋さんなんだけど、多国籍料理店って言って色んな国の料理を出してるお店。今日はフランスだ、明日はイタリアだ、デザートフェアなんてのもあったかな。」

「あ、だから映司さん料理お上手なんですね。」

「うーん、俺はあくまで料理のお手伝いだけしかだったし、元々旅してたから見覚えある料理が多かったから覚えるのも難しくなかっ

たし、でもそういってもらえるのは嬉しいなぁ。」
「映司さん、蜂蜜ありましたー」
「ありがと、そこに置いといてー。そういえばさ、二人は歳いくつ？」
「私は１４歳です」
「私は１５です」
「やっぱり、二人ともそんな若いんだね・・・」
「ルッキーニちゃんなんて１２歳だったよね、あれで少尉っていつも思うけど凄いよねー」
「１２！？そんなに小さいの！？」
「はっ、はい。昔はもっと若くて、１０歳くらいのウィッチが空を飛んでたって聞きますし」
「１０歳って・・・事情が事情だから仕方ないかもだけど、やっぱり小さい子が戦いに行くのって、気分が悪いな・・・」
「「映司さん・・・」」
「あ、いや、気にしなくていいよ！それだけこの世界が苦しんでるって改めて理解できたし、やっぱり俺、この世界に来て良かったって思ってるよ。前の俺だったら、何もできなかったかもしれないけど、今だったら戦える力があるし。きっと、向こうの世界は平和になっただろうからね。」
「何か、映司さんを巻き込んじゃって悪いです・・・」
「そんなことないって、これだけそれにほら、これが本来の大人の仕事だし。やっぱ、どこ行っても俺のやることって変わらないのかな。」

バン！ギギィー・・・
「おい映司！」
「アンク、珍しいじゃん。まだ7時にもなってないのに起きるなんて。腹減った？」

「腹は減ったが、今はこっちだ。面倒な事になってなぁ、ちょっとこっち来い。」
「うわっとと、ちょっとアンクー！ごめん、二人とも。それ、もう少し弱火で煮込んでおいて、焦げない程度にね！」
「「い、いってらっしゃーい！」」

「おいアンク、どこ行くんだよ。こっちって格納庫だろ？」
「あぁ。昨日あった、タカカンとバッタカン以外にも、俺らの世界の物が入ってきてたぞ。」
「だったら昨日、寝る前に聞いたぞ？伊達さんの持ってたミルク缶と、タコカンだろ？バースバスターとバースベルトは無かったけど。」
「さっきも言ったが、面倒な事になってな。タカカンに見晴らせて正解だった。突ついて起こされて見に行ったら・・・このざまだ！」

バン！

「あ、あれ？これってどうやって元に戻すんだ？うわっとっと、髪は突っつくなって！あ、おい、ストライクユニットの上で跳ねるなって！」
キュイキュイ！
クゥー！
ピョンピョン！
ガシャンガシャン！

「アハハ、確かに面倒な事になってるね・・・」
「あ、映司ー！アンクー！丁度いいとこに来た、手伝ってくれー！これ元に戻す方法がわからなくってさー！」
「ッチ、ったく映司。後は任せた。」

「おいアンク、丸投げかよ。ちょっとは手伝えって！」
「おーい、これどうやって戻せばいいんだ？」
「あぁ、それならこうやって手に乗っけて、そうすれば大体は勝手に元に戻るはずです！」
「よし捕まえた！どれどれ、手に乗っけて・・・おぉほんとだ！缶詰がちょっと長くなった変な形に戻ったな！」
「っと、シャーリーさん、後ろにバッタカン！」
「ほいきた！」
「俺も・・・よっと！」

こうして続けること１０分

「これで全部かなー。いやー悪いな、助かった助かった。あっはっはっは！」
「あはは。それで、なんでこんな大惨事になってたんですか・・・」
「いやー、それがなー。昨日言ってたタカカンとバッタカンを、是非私も使ってみようと思ってな！とりあえず、目に当たる缶詰のプルタブを開けたらこうなったってワケだ。まさか、ここまで自律型の機械があるなんてなぁ。あっはっは！」
「大体は命令すれば言うこと聞くんですけど、どこか調子悪くなったかな？」
「なに、命令すれば言うことを聞くのか！いやー、とりあえず弄くりたかったから、気持ちを自由に持てよーって言ったのが間違いだったか！今度からは言い方を変えるとするか、あっはっは」
「大雑把な人だな、でも人生楽しんでるって感じで良いなぁ。やっぱ若いっていいな。それでアンク、お前が連れてきたのってこれだけじゃないだろ。お前だったら放っておくだろうしな。」
「あぁ。映司、ちょっとこっち来い。」
「ん、そっちは武器格納庫だぞ？今は鍵が閉まって」

ガコン
ガガガガガガガ
「あ、開いた！昨日鍵当番したのってルッキーニだったけか？」
「こいつだ、映司。」
「これって、ライドベンダー！これまでこっちに入ってきてたのか！ミルク缶のセルメダルの使い道が決まったなー。」
「なんだ？その細長い箱は？お、タカカンとバッタカンとタコカンとやらも入ってるじゃないか。どうやって取るんだ？それ。」
「えーっと、こん中にセルメダルを入れて・・・アンク、メダル。」
「ッチ」
チャリン
「欲しいカンドロイドの下のボタンを押すと」
ポチ
ガシャン
「こっからカンドロイドが出てくるんです。」
「おぉー！画期的だな！でもセルメダルじゃないと駄目なのか、私には使えないなー。っちぇ」
「それにこれ、バイクにもなるんです。」
「なに！！バイクだと！！！貸してくれ！是非！」
「別にいいよな？アンク。」
「壊したり分解さぇしなければなぁ。」
「そうか、悪いな！私のバイクとどっちが早いか比べるか。いや、別世界の物だから燃料は何で走るのかも気になるな。っくぅー！早く乗り回したいなぁ！」
「あ、居た居た。シャーリーさんも来てないから、もしかしてって思ったら。映司さーん！アンクさーん！シャーリーさーん！朝ご飯できましたー！」

「っと、すっかり忘れてた。うまくできてるといいなぁ。」
「そういえば腹減ってったな、行くか。」
「バイクは後に持ち越しだなー、でも楽しみだなー。」

「「「「「いただきまーす」」」」」
「どうかな？ちょっとは、食べやすくなったと思うんだけど。」

「おいしい！映司、これおいしいよ！」
「うまい！料理当番が増えて、私の当番も少なくなったし、一石二鳥だな！」
「そうね、昨日に比べてコクが出て、一層美味しくなってるわ。」
「うぇー、辛くないー？昨日辛かったからやだー。」
「大丈夫だよルッキーニちゃん、甘くしたから。ほら。」
「ふぁー、む。」
ぱくん
もぐもぐ
「本当だ！おいしい！」
「でしょ？」
「朝っぱらからカレーはどうかなって思ったけど、結構好評みたいだな。海軍カレーってのもあるくらいだし、軍隊には由縁ある食べ物だなぁ」
「まったく、どうして昨日のうちに辛いほうじゃなくて、こっちを出さなかったのかしら。」
「とりあえず、珍しいもの作ってみようかなーって。」

「とりあえず、であんな辛いもの作らないでくださいまし！昨日は舌がしばらくヒリヒリして痛かったんですわよ！それに、少佐とあんなにべったり・・・」
「ペリーヌさん、昨日治すって言ったのに」
「ふん！扶桑の豆狸の力なんて、借りなくたって大丈夫ですわ！」
「ま、豆狸ー？！」
ガタッ
「よ、芳佳ちゃん、ペリーヌさん落ち着いて・・・」
「ペリーヌ、賑やかなのは良いが、飯の席は少し静かにしろ。流石にうるさすぎるぞ。」
「しょ、っしょ、少佐！クッ・・・」
「サーニャ、これ美味しいな！これが昨日と同じ食べ物とは思えナイナ？」
「うん・・・一晩寝かせて味が出て、とっても美味しい・・・ね、エイラ、今度作り方教えてもらっか・・・？」

「やっぱ、こういうのが一番良いよな。アンク、カメラか何か無い？」
「ハッ、あるわけ無いだろ。」
「そっか。あ、でもバッタカン使えば映像撮れるかな？」
「さぁなー、映像送る事ができるから、録画もできるかもなぁ。こんな風にな。」
ピロン
録画を開始します
「そ、それって刑事さんの！てか、ご飯の食べてるんだからいじるなって。」
「バッタカン持ってる奴に言われてもなぁ。伊達のミルク缶の中に入っていてな、使い慣れたしこいつはもう俺のもんだ。」
「ちょっとそれ貸せって。」

「あ、おいこら映司！」

みんなが仲良く、賑やかにカレーを食べるのを見て、映司は一人こう思うのだった。

（やっぱ、こーゆーのがあるべき姿だよな。）

契約と新しい身体とバイク2（後書き）

芳佳「ところで映司さん、さっき何してたんですか？」

映司「みんなが仲良くご飯食べてるのを、記録に残したくてねー。ほら、映像にとったんだ。」

芳佳「うわー、凄い綺麗に撮れてますね。私たちの撮った撮影器具と同じくらいかそれ以上かな？」

映司「え、映画なんか撮ったの？」

芳佳「はい、他の部隊でも撮影をしたみたいですよ。今度休みをもらって見に行きましょうか？」

映司「そっか、映画があるのか。他のみんなも誘ってみにいこっか。」

芳佳「はい！」

映司「ところで、どんな映画があるの？」

芳佳「えーっと、学校のみんなが言ってたのだと『リバウの雷鳴』とか、『扶桑海の閃光』とか、あとは・・・・・・・・・・」

訓練と誤解と戦い方（前書き）

いらない子見てたら更新遅くなっちゃったね、仕方ないね

異世界だからっておのれディケイドー！でお馴染み鳴滝さんは出ません。

ディケイドも出ません。

これはあくまで、オーズとストライクウィッチーズのクロスオーバーなんで、他の作品の介入は一切しない予定っすー

あ、それと本来ならば『ｋｇ』→「ポンド」　『ｍ、ｃｍ』→「インチ」等と表記するところですが面倒なんで今の日本の表記にあわせます。ゴメンナー

訓練と誤解と戦い方

「「「「「ごちそうさまー！」」」」」

今日も朝から元気に話しているのはシャーリーとルッキーニの二人組。

「さーって、私はあのバイクの解体方法を見つけなきゃなー。」
「解体方法？もしかしてシャーリー、まだあのバイク解体できてないのー？」
「あぁ、幾重にもプロテクターが掛かってるみたいだし、その上私が持ってる道具じゃ解体できそーに無いんだ。でも、まだ諦めないぞ。」
「どしてー？」
「だってあのバイク、最高時速６１０ｋｇも出るらしいぞ！私の出したオートバイの最高時速の軽く二倍だ！」
「おぉー、それじゃすっごーく早いんだね！」
「違うぞ、ルッキーニ。すっっっっっごーく、早いんだ！そうと決まれば、早速解体に行くぞ！」

映司とアンクがこっちに来てから早一週間が過ぎた。
その間はネウロイは出ないものの、映司はくたくたに疲れていた。
と、言うのも

「さぁ映司、今日も訓練だ！」
「きょ、今日は流石に遠慮しておきます。ここずっと、朝から晩まで訓練ばかりで体中痛いですし・・・」

「ほぅ、誰のおかげでここに居られると思ってるんだ？」

ニヤリと笑う坂本と、体中がギシギシ言う映司。

坂本からしてみれば、鍛えがいのある男が二人も居るのだ。訓練大好きな坂本は、この二人をもっと強くしてやろうと張り切っているのだが、二人からしてみれば良い迷惑である。

「それは助かってますけど、って・・・あれ？ミーナさんのおかげじゃないんですか？」

チラッとミーナを見るが、ミーナは「うーん」と苦笑いして首を横にかしげる。

「そうだ。ストライクウィッチーズの指揮、管理はミーナがとっている。そのミーナから、お前達の面倒を見るよう頼まれてるのは私だ。だから行くぞ！アンクの分まで頑張ってもらわんとな！」

「ア、アンクは？今日も逃げたんですか？」

「そうだ。まったくどこに逃げたんだか・・・」

「アンク何かしなければいいけどなぁ。何か、アンクが迷惑かけてすいません。」

「おいおい、お前が謝るな、アンクに謝らせろ。ほら、行くぞ。」

「はい。まぁ、アンクが頭下げてるところ見たこと無いですけどね」

坂本に着いていく映司だが、その様子を食卓から憎々しげに睨むペリーヌが毒づいていた。

「まったく、映司さんはどうしてああも少佐とべったりなんですの？まだ来て1週間じゃないですの。そのくせして、ああも簡単に信用して・・・少佐も少佐ですわ。やっぱり、扶桑にそっくりの国から来たからですの？」ブツブツ

「ペリーヌさんさっきから怖いね、芳佳ちゃんが来た頃みたい。」
「そっかー。でも、私ってもっときつーく言われてた気がするけど、なんで映司さんに直接文句言わないんだろ？」
「うーん。そう言えばペリーヌさんって、映司さんと目も合わせようともしないよね。男の人だから意識してるのかな・・・」
「そっかー、基地に来てから男の人と話す機会なんて全然無かったもんね。リーネちゃんも、映司さんやアンクさんと話すときって緊張する？」
「わわ、私？私は、その、緊張する・・・芳佳ちゃんは？」
「私？私は全然しないよ、むしろお兄ちゃんができたみたいで嬉しいかも。エヘヘ」

「宮藤！リーネ！何をぼさっと突っ立ってる、お前達も訓練だぞ。来い！」
「「えぇー？！」」

ペリーヌはまたしてもグヌヌとなった。

（なんでまた宮藤さんとリーネさんですの？少佐は最近何かあれば、「おい宮藤」ですもの。どうして私に頼ってくださらないのかしら？私だって、微力ながらも少佐のお手伝いをできるのに・・・）

「ペリーヌ！お前まで何をぼさっとしてる、お前も来い。」
「はい、ってえぇ？！しょ、少佐、私ですか？」
「そうだ、今日は映司とペリーヌで模擬戦をしてもらう。映司が新しい空を飛ぶ力を手に入れたと言ってたしな。ペリーヌは、敵の動きに対して綺麗に立ち回れるから、初めて見る能力と戦うには適材だ。頼りにしてるぞ」

「は、はい！」

とペリーヌは笑顔に戻り、元気よく返事を返して映司達と外に向かった。

「面白そーだから見に行こーっと。」

「あ、こらエーリカ！お前はまたそうやって自分の厄介ごとを押しやって。相変わらずお前はカールスラント軍人としての自覚が・・・」

「大尉ー、中尉ならモウ行ったゾー」

「何?！あいつめ、最後まで人の話を聞かないで・・・」

タッタッタッタ・・・

「ん、私も見に行く。」

「サーニャ、夜間哨戒チョットは楽にナッタか?」

「うん、この子達が頑張ってくれてるから・・・」

サーニャは後ろの椅子に置いてたポシェットから、タカカンとバッタカンを取り出しプシュとプルタブを開けて、タカカンとバッタカンを自由にする。

タカカンはキィキィと鳴きサーニャの周りをくるくると周り、バッタカンはピョンピョン

とエイラの頭の上に乗っかる。

「ソウカー、便利な物貰ったナー」

「私も何か、映司さんとアンクさんにお返ししなくちゃ・・・」

サーニャはそう呟いて、ポッと頬を染めた。そして、ニコリと優しい顔をして、タカカンとバッタカンを手のひらに乗せ回収する。

しかしエイラは、アンクと言葉が出ると露骨に嫌そうな顔をした。

「えー、アンクもか？アイツ、サーニャに貸すの渋ってたジャナイカー」
「だめよ、エイラ。メダルくれたのアンクさんだから、ちゃんとメダルの分はお返ししないと映司さんにも、アンクさんにも悪いわ・・・」
「マッタク、サーニャは優しいよなー。そ、それじゃあ、今度の休暇に一緒に買い物行くかー？」
「でも、男の人にプレゼントしたこと無いから、ちょっと不安かも・・・」
「だったら、映司とアンクも誘ウカー？」
「え？え、えと、その、うん・・・。それじゃ、映司さん達の訓練見に行こ？」
「オー」

「あの子達ったら、フフフ。それじゃ、私は書類の整理しないと。後で映司君にも手伝ってもらおうかしら」

「さて、ペリーヌ、準備はできたか？」
「はい、ばっちりですわ。」

ペリーヌは既に自機のストライカーユニットを装着し、軽機関銃を装備している。中はもちろん模擬戦に使われるペイント弾である。

「そうか、後は映司だが何に手間取ってるんだ？」
「負けるのが怖くなって逃げ出したんじゃありませんの？そもそも、前の赤い体じゃない状態で戦うなんて、他に対空手段なんて早々あるものじゃないですわ。」
「いや、そんな事は無いはずなんだが・・・」
「すいませーん、準備できましたー！」
格納庫から映司のＯＫのサインが出た。
「ペリーヌ、先に空を飛んでおけ。何が来るかわからんぞ。」
「はい、少佐。」
ペリーヌは助走をつけて、思い切り海の上に飛んでいく。
「ところで、どうしたら俺の勝ちですかー？」
「ペリーヌの持ってる弾が切れるか、ペリーヌの魔力が尽きるか、一撃を与えたらそれで終わりだー！」
「分かりましたー！」
一方格納庫の中は、バイクに変形したライドベンダーと大量のタコカンがあった。
「それじゃ行ってきます！」
「頑張って・・・」
「ツンツン眼鏡に負けンナヨー」
「ペリーヌは結構強いから、気をつけてな！」
「映司ー！がんばれー！」

４人の応援を背に、既にベルトをつけメダルを入れていた映司は、オースキャナーを使い斜め右上から一気にスキャンしポーズをとって変身する。

「変身！」

タカ！トラ！バッタ！
タ・ト・バ　タトバ　タットッバ！

変身を終えたオーズはバイクに乗り、大量のタコカンがペリーヌの居る空に向かって道をつくる。

「メダジャリバーが無いのは心もと無いけど、無くても戦えるようにならなくちゃ！」

オーズはアクセルをふかし、バイクをタコカンの造った道をスムーズに通る。

「あーやって空飛ぶんだー。でもあれって、空飛ぶって言うより空を走ってるよね？」
「バイクが空飛ぶのかと思ったんだけどなー。しかし、あのバイクは本当に速いな！」
「タカカン、バッタカン、お願い。」
「私たちも外出よーかー」
格納庫の外でも、既に驚きの声がしていた。
「わー、すごーい。ああやって空飛ぶんだ。でも、あのタコさん痛

くないかな。」
「芳佳ちゃん、タコさんは痛くないと思うけど」
「あ、そっか」
「芳佳ちゃんらしい悩みだね」
「へぇー、タコが道を作って飛ぶんだー。」

いつの間にか、隣に来ていたエーリカに芳佳は当然の疑問をぶつける。

「あれ、ハルトマンさん今日はバルクホルンさんと訓練なんじゃ？」
「訓練なんて、めんどくさい事やってらんないよー。それより、こっちのが面白そうだしー。あっ、ほらほら始まったよ！」

オーズは器用にバイクを動かし、右へ左へとペイント弾をよけながらなんとかペリーヌに近づこうとする。

「うわー、よくあんなに大きなバイクを器用に動かせるなー。あっ、今のは当たったと思ったんだけどなー」
「ハルトマン！」
「げっ、トゥルーデ。来ちゃったんだ」
「げっ、とはなんだ！げっ、とは！」

エーリカはまた、バルクホルンに訓練漬けにされるのを嫌がり、バルクホルンの注意をオーズに向ける。

「そ、それよりさトゥルーデ。ほらほら、あれがオーズなんだって！」
「あれは・・・バイクか？なるほど、あれが今朝ルッキーニ少尉とシャーリーが話していたバイクか。しかし、あの速度は中々だな。」
「でしょでしょ？戦い方も面白いよ？」

まったくもってその通りで、映司はバイクに乗りながらトラクローで魔法壁を攻撃しつつ、時にバイクから高くジャンプして、上から思い切り降下しキックを放つ。それも防がれると、乗り捨てたバイクにタコカンがまとわりついて一本の縄となり、それをオーズの落ちる位置に投げ、その下に足場となって元に戻る。

「よっと、魔法壁って結構硬いな」
「くっ、トリッキーな技を使いますのね」
「結構危ない場面もあったけどね・・・おっと！」

オーズが返事を返していても、ペリーヌは容赦なく撃ってくる。

そんな戦いを、眼帯をはずし魔眼を使っている坂本はうんうんと頷く。

「二人とも中々やるな。やはり、日頃の訓練が物を言うな。ペリーヌは私の訓練を手伝ってくれたり、自主的にも訓練をしていたしな。宮藤！リーネ！よく目に焼き付けておけ！仲間と連携をとるには、まずは仲間の手の内を知っておかないとな。今日は、オーズとペリーヌの戦い方を見てどう連携をとればいいのか、それを考えるのが今日の訓練だ。分かったな？」

「「はい！」」

二人の返事に頷き、すぐに模擬戦を見始める。
だが、ふと何を思ったのか坂本は模擬戦の方向を見ているが、目線をもっと遠くにやり無線に叫ぶ。

「・・・・・・・ネウロイだ！」

訓練と誤解と戦い方（後書き）

次回へ続く。

訓練と誤解と戦い方2（前書き）

家に全巻ある魔人探偵脳噛ネウロを現在15巻まで読み直しなう

睦月ちゃん可愛いです

ネウロ読み終わった後はムヒョ待ち

それと、映司からしてみればウィッチーズ全員年下ですけど、貫禄のある人にだけ敬語を使っていきます。なので少しずつ敬語が剥がれていくキャラが出てきますのでご了承ください。

ネウロイがメダルの力を使うだけじゃなくて、それぞれが取り込んでるメダルに対応した個性を出していこうかなって検討なう。

あ、カマキリメダルのネウロイが脳筋だったのはこの所為か！

訓練と誤解と戦い方2

「ネウロイ？」
「ネウロイですって？」

二人は攻撃の手をピタリと止め、坂本の視ていた方角を見る。

「あの黒い点がネウロイですの？」
「・・・うん、あれがネウロイなのかな」

ペリーヌには、遠くのネウロイを魔力で視力を少しばかり強化しても、ネウロイがただの空に浮かぶ黒い点としか見えなかった。
だが、オーズのタカの視力は魔力で強化した視力とは、比べものにならないほど強くペリーヌの目では目視できてないものまで見えている。

「でしたら、貴方との決着はあのネウロイを倒してからになりそうね。まったく、何もこんな時に出なくても・・・」
「準備ができてるときに出るより、よっぽどマシだと思うけどね。」
「それもそうですわね、銃を交換してきますわ」

坂本は他のウィッチ達を出撃させ、次は自分が出撃だが空に出る前にミーナと無線で会話している。

「ミーナ、ネウロイが出た。それにしても最近、各地のネウロイが活発化してきたと聞いたが私たちに来るネウロイは単体ばかりで少ないな」

「そうね、ロマーニャやスオムスにも映司君のコアメダルの要請をしたときも「映司のじゃない、俺のだ」・・・映司君とアンク君のコアメダルの要請をしたときも『忙しくて手を離せない』って言ってたわ。」

坂本は少し黙って考え事をした。

（あちらではネウロイが大量に出ているのに、我々の所には全然来ない・・・。一体何を考えているのか、相変わらず考えが読めんな、ネウロイという生き物は。）

「・・・そうか、何か裏が無ければいいが。ところで今、アンクの声が聞こえたがそこに居るのか？」

「えぇ、書類仕事を手伝ってくれて楽だわ。アンク君ってば、書類整理とか上層部への言い訳とか結構うまいのよ？」

「アンクめ、訓練をしたくない為にそんな所に逃げ込みおって。ミーナ、変な事されてないか？」

「されてないわ」

「しかし、アンクがデスクワークとは・・・少し・・・いや、かなり笑え・・・プッ」

「チッ」

と電話の向こうから舌打ちがが聞こえてきた、おそらくアンクだろう。

「これだからばれたくなかったんだ。おい、映司には言うなよ」

「クッいや、失敬。しかし、一週間しか一緒に居た私が言うのもなんだが、お前が他人を手伝う奴とは考えられんな。何か裏があってもおかしくないが・・・」
「あぁ、ただ書面を眺めて整理するなんて、退屈すぎて訓練から逃げるのがマシだからなぁ」
「その件に関しては、映司君が戻ってから説明するわ。とりあえず美緒、貴女も出撃しなくていいのかしら？」
「あぁ、今出撃しようとしてたところだ。ミーナ、アンクに変な事されたらすぐ言うんだぞ。私がそいつを切り刻んでやる」

美緒はわざと口元に日本刀の鍔部分を持ってきて、鞘からチャキンと少し刀を抜きわざと音をたてる。

「美緒ったら」
「ハッ、できるもんならやってみろ」
「こら、アンク君も挑発的なこと言わないの」

坂本はストライカーユニットに魔力を送り込み、自分自身も魔力を解放させて行く。坂本の使い魔であるドーベルマンの耳と尻尾が坂本からピョコンと出てくる。

「・・・前方異常なし、坂本一番出撃する！」

坂本も先にネウロイと交戦しているオーズとウィッチーズに遅れを取るまいと、会話を早々に切り上げすぐに出撃する。

その六分前

「うわっとっと、このネウロイ戦闘機みたいな形してるな。昨日のとは全然違う・・・」
「映司さんがこないだ戦ったのは、コアメダルを取り込んだからあんな形だったんだと思います。これが本来のネウロイの姿なんです。でもコアを壊したらネウロイはこないだみたいに消滅しますよ！」
「分かった！でも、流石のタカでもコアメダルは見つけられるけど、コアは別物みたいだから無理だし・・・」

映司はあの訓練のまま来たので、バイクに乗りビーム攻撃をかわしつつ、どう攻撃をしようか悩みながらネウロイの姿を見て呟く。
隣に来て、前方にシールドを貼りつつ攻撃している芳佳が映司に助言をしてくれる。

「コアなんて、見えちまえばこっちのもんなんだ。コアが出るまで攻撃するぞ！」

とシャーリーが、分かり易い指示で味方を鼓舞する。

「マッタクだ。今まで通りのネウロイなんて、避ければ簡単ナモンダろ」
「エイラ、またシールド無しで・・・」
「ハルトマンさん、またビーム全部避けてる。凄い・・・」

エイラは相変わらず、ビームを避けシールドを貼らずに機関銃を撃ち続けている。

「あれはちょっと無茶しすぎなんじゃ・・・」

オーズもその様子をビームを避けつつ見るが、ペリーヌが一人でシールドを貼りつつ、ネウロイの背後取ろうとしてるのをオーズは見た。

「・・・あれもちょっと無茶しすぎでしょ！」

オーズは一気にバイクのアクセルを入れ、ペリーヌの方へ駆ける。
ペリーヌはネウロイの背後をとり、機関銃を撃ち続ける。
だが、周囲には誰もおらずペリーヌ一人。周りに助けを求められる仲間がいない状況だった。

「なかなかしぶといですわね、やはり少佐がいないと・・・！コアが見えましたわ！」

ペリーヌが戦闘機型のネウロイの背後をとり、胴体の一番後ろについているエンジンを攻撃し続けてコアを発見した。

「やりましたわ！これで少佐も私を認めて・・・え？」

ペリーヌが軽機関銃を構えたその時だった、なんとネウロイが今まで前方を攻撃していたビームを一度止め、全てのビームを後ろのペリーヌ向けて撃ったのだ。

「しまっ」

いきなりのビームなので、シールドに魔力を集中させるものの魔力は少ししか行き渡らず、ペリーヌは死を頭の中が横切り目をギュッとつぶる。

ドッゴォーン！！
と派手な音がした、だが当のペリーヌには衝撃が来ず、目の前で爆発が起きただけだった。それに気づき、目をそっとあける。
爆発の煙が少しずつ消え
「っく、今のは結構効いたかな・・・っ痛ぅ」
ペリーヌは一瞬で理解した、オーズが自分の盾になってくれていたからだった。
後ろに回るペリーヌを、何故か攻撃しなかったネウロイに疑問を抱き、真っ先にペリーヌの元に向かったオーズは、その攻撃を自分の体を割り込ませる形でペリーヌの代わりに被弾した。
「トラのマークが点滅してる、結構まずいかも・・・」
「なんで、なんで私を庇ったんですの?!シールドのある私より、シールドの無い貴方が危険だったんですのよ?!」
「なんでって言われても、体が勝手に動いちゃって。そ、それにほら!俺この通りなんともないし・・・やっぱちょっと痛いかな。」
ペリーヌはこの瞬間まで、映司の事をただ旅好きで、異能の力を使えるのを良いことに坂本にくっつく男だと思っていた。
少佐と訓練の相手をしろと言われたときも、自分の力の強さを見せつけて映司に目に物を見せて今後一切少佐に近寄らせないとも考えていた。
そんな考えを、一瞬でバカバカしいと思える事を映司はやってのけた。
不純に見えた全ての行動を、善意の言葉で片付けられると。

「・・・少し、貴方を誤解してました。女性に片っ端から手を出す男だと思ってましたわ。でもちょっとは・・・ちょっとだけですのよ、見直しましたわ。」

「そう、それならよかった。ってか、俺そんな風に見られてたんだ。まぁ普通に考えれば女の子がいっぱいいるところに男が来たらそう思うよね・・・」

「そうでなくても、火野さんいっつも他のウィッチに『それ持ってあげるよ』とか、『洗濯はやっておきました』とか、訓練が大変なくせしてそんな事するなんて、好感度アップが目当てとしか思えない行動ばかりしてますもの。そう思われても仕方ないですわ。」

「俺はそんなつもり無いんだけどね・・・うわっと！」

話が弾みかけてた二人は、ネウロイのビームによって再び現実へと戻された。

「火野さん、ネウロイのコアは一番後ろのエンジンにありますわ。」

「分かった。それじゃ、一緒に行けば壊せるかな。」

「了解しましたわ！」

「それじゃ行くよ！」

オーズはライドベンダーを走らせ、真っ正面からビームを少々被弾するが殆どかわし、ペリーヌはその横をシールドを展開させつつエンジン部を攻撃する。その攻撃が実り、前方と横からの攻撃が激しく回復が間に合わず、コアを露わにする。

「コアが見えましたわ！」

オーズはむき出しになったコアを確認すると、トラクローを展開させてトラクローに意識を集中する。すると、胸のトラマークが光りその光がトラクローに行くと同時に

「ハァー、セイヤァー！！」

ライドベンダーの加速を生かし、コア突っ切る勢いのトラクローでクロスに切り裂きコアを粉々に砕く。

この間わずか六分

「む、私が来るまでも無かったか」

坂本は遠くから魔眼で戦闘を見つつ、自機であるストライカーユニットを走らせたがネウロイが粉々に散ったのを確認するとホバリングしフッと笑う。

「また映司に助けられたな」

所変わって映司とアンクの相部屋。

「ッチ、結局普通のネウロイだったか。」
「うん、倒してもコアメダルが出なかったし、それっぽい攻撃もしてこなかったから多分そうだと思う。」
「しかし、随分タコカンが減ってるなぁ、映司？」
「仕方ないだろ、ライドベンダーの道作る時にビームに被弾しちゃったんだから。」

コンコン

「ん？はいはい、あいてますよー」

ガチャ

「失礼しますわ。」
「ペリーヌちゃん、どうしたの。もう寝た方がいい時間だと思うけど」
「ちゃんですって！はぁ、随分慣れてくれたものですわね。それより、今日のお礼を言いに来たんです。・・・・・庇ってくれて・・・・ありがとう」
「あぁ、気にしなくてよかったのに」
「私が気にするんですわ、下手したらあの時死んでたかも知れないのに・・・」
「でも、シールド貼ってたんだから、死ぬってのはちょっと大げさなんじゃ？」

その言葉を聞くとペリーヌは少しあきれた顔をした。

「まぁ・・・私の事じゃなくて貴方の事ですわ！私を庇ってくれたのはありがたいですけど、もう少し自分自身の事を考えて行動してくださいまし！そもそも、自分を守る術が無いのに思いつきであんな集中砲火を全部受けるなんて、正気の沙汰じゃありませんわ！まったく・・・」

「あぁ、うん。今度からそうしてみるよ。」

と少しだけニコリと笑い、軽く言った。

「・・・分かりましたわ。それじゃ、今日はこれでまた明日。ごきげんよう」

訓練と誤解と戦い方2（後書き）

映司「・・・結局、俺ってずっとこの性格なんだろな。」

アンク「ハッ、使える馬鹿でいいじゃないか。こっちからしてみれば、お前はその性格で十分だ。」

映司「馬鹿って・・・！まぁ俺もこの性格やめたくないし、止めたら止めたで死ぬほど後悔しそうだし。」

アンク「死んでもらったらこっちが困るからなぁ。」

映司「お前はまた、自分の利益しか考えないで・・・」

ドアの外

ペリーヌ（死ぬ程後悔するって、どーゆー事ですの？まだまだ聞かないといけない事だらけですわ）

坂本「ペリーヌ、そこで何をやっている。」

ペリーヌ「しょ、しょ、少佐！これは、その、えっと、ちょっと考えごとをしてまして、これはその・・・」

坂本「そうか。時に、今日のネウロイに対する回り込みはよかったぞ。」

ペリーヌ「そ、そうですか？」

坂本「少々無茶をしすぎだがな。」

ペリーヌ「うっ・・・」

坂本「だが、映司との連携は見事だったぞ。それに、あそこでお前が戦果を優先せずに、映司にコアを破壊させたのも、恐らくコアメダルがあるかも知れないと考えてだろ？」

ペリーヌ「そこまでご存じでしたか、流石少佐ですわ！」

坂本「まぁ半分は勘だがな！ハッハッハ、よし、明日に備えて今日はもう寝るぞ。」

ペリーヌ「はい。では、お休みなさい、少佐」

坂本「あぁ、お休み。ペリーヌ」

今回の一番の功績者はタコカンさん。
多分これからも。

夜更かしと誕生日と過去の話（前書き）

平成生まれだから、ライブマンって一回も見たこと無いけど今朝のゴーカイジャーで結構グッと来たのはミンナニハナイショダヨ

やっとアニメオマージュ回来ました、そしてアンク空気回

このキャラ、ストパン2で出てきたのすっかり忘れてた。

てことでこの小説にはオリジナル要素が含まれました。おっかしーな・・・

夜更かしと誕生日と過去の話

前回の戦闘から一日が経ち、時刻は夜。

「・・・そう、分かったわ。えぇ、それじゃお願いするわね」

ガチャンとミーネは電話の受話器を置く。
書類が綺麗に整っている机の上に、片膝を立てて座っていたアンクが聞く。

「どうだ」
「今の所、コアメダルを取り込んだと思われるネウロイを倒して、コアメダルを持っているのは、アフリカの第３１統合戦闘飛行隊『ストームウィッチーズ』ね」
「ストームウィッチーズ？ストライクウィッチーズとは別モンか」
「今、アフリカに出現しているネウロイの関係で遅れるけど、５日後にはコアメダルを持ってここに到着するみたいよ。ただ・・・」
「ただ？」

ミーネは一度区切って、困ったような顔をして続ける。

「来るのが一人だけで、ハンナ中尉なのよね。」
「誰だ、そいつ？」
「ちょっと説明が難しいけど、他人につっかかるタイプの人なのよ」

アンクは机に座ったまま、モヤモヤと昔の頃の後藤を思い出す。もっとも、こっちはつっかかると言っても種類が違うが。

「そういう人間なら慣れてる。向こうにも、似たようなのがいたからなぁ」

「そう、なら心配は要らないわね。それで、肝心のコアメダルの絵柄はタコの模様らしいわ」

「タコか。ハッ、これは使えるなぁ。」

「それじゃ、みんなにも伝えましょうか。」

「そんなわけで、5日後こちらにハンナ・マルセーユ中尉が来るそうよ」

「うげぇ、面倒なのが来る・・・」

「あいつが来るのか・・・」

「二人ともお知り合いですか?」

芳佳は反応したエーリカとバルクホルンに聞く。が、バルクホルンは嫌な顔をして、エーリカは心底面倒な顔をして机に腕組みして突っ伏した。

「あいつとは昔、私とトゥルーデと同じ部隊に居たんだけどさー」

「嫌みな奴だったよ。あいつは・・・」

「へぇー、お友達・・・ではなさそうですね。」
バルクホルンは腕組みしてキッと芳佳を睨んだ。
「当たり前だ、あんな奴と友達なわけがあるか！」
「そ、そうなんですか」
ミーナはパンパンと手を打って静かにさせる。
「それと、昨日ネウロイと交戦の後、夜間哨戒してくれてるサーニャさんから報告がありました。どうやら、基地付近をうろつくネウロイが出たみたいです。姿は見えなかったらしく、攻撃もしてこなかったみたいです」
「恥ずかしがり屋さんのネウロイ。とか、無いですよね・・・」
「だとしたら、丁度似たもの同士、気でも合ったんじゃなくって？」
カモミールティーの入ったカップを右手に持ったペリーヌが、ちらりとサーニャを見て茶々を入れた。
そばに立っていたエイラは、ベーと舌をペリーヌに向けて対抗する。
「し損じたネウロイが、出現する確率は極めて高い」
「そうね。そこで夜間戦闘を想定して、シフトを臨時的に増やそうと思います。」
「はーい、ハイハーイ！私がやる！」
ぐいぐいと机に身を乗り出すエイラ。
ミーナは元からそうするつもりだったらしく、即ＯＫを出した。
「そうね。それじゃエイラさんと、宮藤さん。」

「私もですか？」
「えぇ。それと、映司君。」
「え、俺？」
「コアメダルを取り込んだネウロイを想定すると、少しでも戦力が大いに超したことは無いです。その場合、見た目でどんな能力を使ってくるのか分かるそうですし。ですから、三人を夜間専従班に任命します」

映司はもちろんと答えそうになったが、一応アンクをちらっと見る。アンクは相変わらず机の上に座り、メダルをチャリンチャリンと右手で遊ばせて顔を上げずに言った。

「タトバとクワガタなら別に使っても構わんが、タジャドルは渡せんなぁ」
「なんでだよ？」
「こうなるからだ」

映司とサーニャとエイラを覗くみんなが目を見開いた。
アンクが手をグリード化し、タカ・クジャク・コンドルのメダルを指に挟んで出した瞬間

ガシャン！ジャラジャラジャラ・・・

と大きな音をして、アンクの右手を覗く体が全てセルメダルになりその場に崩れ落ちた。
アンクがタカのメダルを右手にコポンと音を出して取り込み、崩れ去ったセルメダルにクジャク・コンドルのメダルを投げ込むとコアメダルを中心にセルメダルが集まり、アンクの体を生成した。

「最初見たときは凄カッタナー」
「うん、いきなり知らない人が目の前に出てきたから・・・」
「なるほど、二人は夕食の時アンクと来たんだったな。」

坂本は二人が驚かない事に合点が行き一人納得する。
その一方で映司もタジャドルを早々使えないことに納得する。

「・・・そっか、分かった。お前も体が無いときついもんな。」
「あぁ、せっかく自由になれる体を手に入れたからなぁ。易々と腕だけになってたまるか。」

アンクは、グリード化したまんまの右腕の手首をくるんと回転させて、タカ・クワガタ・トラ・バッタのメダルを取り出し映司に投げる。映司はメダルを受け取りポケットに入れた。

「サンキュ。それじゃ、しばらくタトバとクワガタで頑張るか。それで、俺は何したらいいんですか?」
「あ、私も夜間哨戒なんてしたことありません。何したらいいのかまったく分からないんですけど・・・」
「そうね、それに関してはまた明日にするわ。今日は夜遅いですし、それじゃ今日はこれで解散します」

そして朝。

【食堂】

「あら、ブルーベリー。でも、どうしてこんなに？」
「私の実家から送られて来たんです。ブルーベリーは目に良いんですよ」

そう答えるリーネは、両手にかごを持っており、その中もブルーベリーでいっぱいだった。

「いっただきー！」
「確かに、ブリタニアでは夜間哨戒のパイロットが、よく食べると言う話を聞くな」
「へぇー、ブルーベリーが目に良いって、あれ本当だったんだ。アンク、お前目つき悪いんだからいっぱい食べておけよ。」
「ハッ、余計なお世話だ」

「芳佳、シャーリー、ベーして、ベー」

「「ん、こう？」」

ベーと舌を出す三人だが、ベロは紫色に染まっていた。

それを見て三人は
「「「うわっはっはっはは」」」
と笑い出す。

「・・・美味しい」

朝食を取り終わった芳佳、映司、エイラ、サーニャの四人は坂本に呼ばれ告げられた。

「さて、朝食も済んだところで、お前達は夜に備えて寝ろ！」

サーニャの部屋・兼臨時夜間専従業員詰め所

中ではベッドの上で芳佳がぼやいていた。

「さっき起きたばっかりなのに、何も部屋の中まで真っ暗にする事ないのに」

「暗いのに慣れろってコトだろ」

一方の映司は、床の上に毛布を敷いてその上で寝ころんでいた。

「ごめんね、サーニャちゃんの部屋なのにこんな暗くしちゃって」

「別に、いつもと変わらないけど」

といつもの調子でサーニャが返す。

「でもこれ、なんかお札みたいだよね」
芳佳が部屋の中に、カーテンを固定する為の剥がれ落ちたシールを拾い上げて言う。
「お札？」
「お化けとか、幽霊が入ってきませんようにっておまじない」
「私、よく幽霊と間違われる」
「へぇー、夜飛んでると間違われそうだね」
「うぅん、飛んでなくても言われる。居るのか居ないのか分からないって。」
むふふっと芳佳が笑う。
「ツンツン眼鏡の言うことナンテ気にすんな。暇だったらタロットでもヤロウ」
「タロット？」
「うん、私は未来予知の魔法が使えるんだ。ま、ほんのチョットの先ダケドナ」
二人がタロットカードの準備をしてる間に、映司はトイレに行こうとドアに手をかける。
その時、サーニャに服の裾を引っ張られた。
「ん？」
「ごめんなさい、私が取り逃したから・・・」
「俺は全然気にしてないよ。それに仕方ないって、コアメダル取り込んだネウロイだったら、いつも通りってワケにも行かないし。」
「でも、映司さんいつも大変なのに・・・」

「んー、確かに大変だけど、辛いことばかりじゃないから。楽しいことだってあったし、これからも楽しいことがあると思うし。だから、サーニャちゃんも取り逃した事後悔するより、これから起きる楽しい事を考える方が、気分が楽になれると思うよ。気分を楽にさせないと、ご両親に会ったときに笑ってあげられなくなっちゃうから。」

サーニャはここまで親身になってくれるのは、エイラにミーネ、他のナイトウィッチーズだけだったので、男の映司に対して素直に嬉しい気持ちになった。

「ありがとう」
「きっと会えるよ、ご両親に。」

「ふー、すっきりした」

映司が戻ってきた頃、エイラはベッドの上にタロットカードを綺麗に並べて、芳佳に選ばせて何回か戻して引いてをさせていた。
そして何回目かで、芳佳の引いたカードを覗く。

「フーン、よかったな。一番あいたい人ともうすぐ会えるって」
「えっ、そうなの？」

芳佳は嬉々とした表情をしたが、すぐにうつむき

「でも、それは無理だよ」

「なんで？」

「だって、私の会いたい人は・・・」

芳佳の言わんとしている事を理解したエイラは口をすぼめる

「そうか・・・うーん・・・」

「誰なの？芳佳ちゃんの会いたい人って。」

事情を知らない映司は芳佳に聞く。

「お父さんです。でも、ストライカーユニットを作り終わったら、死んだって報告が届いて・・・。」

「芳佳ちゃんのお父さんって、あのストライカーユニットを作った人なんだ。」

「はい、私の誇りです。」

「凄い人なんだね・・・」

映司は頭の中を嫌な想像がよぎった。一瞬目蓋を開いたまんま、遠くを見るような目をして考えをめぐらす。

「・・・芳佳ちゃんってさ、お父さんの遺骨とか遺品とかって見た？」

「いえ、軍の方から規律でそれは駄目だって。でもお墓には行きました。」

「・・・・・あまり、ネウロイと戦ってる人を悪くは言う気は無いけど、もしかしたら、もしかしたらだけど、芳佳ちゃんのお父さん生きてるかも」

その場に居た三人は、その言葉にビクッと体を震わせて静かに聞く。

「ど、どうしてそう思うんですか？」

「戦争に限らずよくある話なんだけどさ、ストライカーユニットなんて凄い物を作っちゃうお父さんの技術。それに目をつけた国々がお父さんを奪おうとしたら、もし芳佳ちゃんがお父さんの立場だったらどうする？」

「どうするって、話し合ってどうにかしたり、それが駄目だったら逃げたり・・・」

そこで芳佳はハッとする。

「うん、ネウロイって得体の知れない物と戦うってなると、どうしても更に強い力が必要になるから。魔力が無い人も、対抗できる武器を開発させようとしてたんじゃないかな。」

「でも、ネウロイと戦ってる最中なのに、国々が、そんな事・・・」

「ネウロイと戦っててもだよ。いっぱい見てきた、誰かを守りたいって気持ちは、自分達の正義を守りたいって気持ちがどんどんエスカレートする事がある。正義の為なら人間はどこまでも残酷になれるんだ。正義の為なら、何でもして良いって思っちゃうし。お父さんの遺骨・遺品を見せてすらもらえなかったのは、きっと遺骨も遺品も無いからなんじゃないかな。あくまで可能性だけど、お父さんは生きてる。」

「そっか・・・」

映司の話が終わると、芳佳は少し下を向いてすぐに頭を上げて映司を真っ直ぐに見る

「映司さん、私お父さんが生きてるって信じてみます！」

「よしっと、それじゃ自分にできることからやらないとね。夜に備えて寝よっか。」

芳佳はベッドに横になった。自然と目の前の壁にあるカレンダーに目が行き、１８の印に赤い〇で囲まれてるのを見つけた。

（あれって・・・）

夜更かしと誕生日と過去の話（後書き）

ミーティングが終わり、映司も自室に戻ろうとしたときミーナに引き留められた。

そして芳佳とミーナ、それに映司の三人が自分のカップと一緒に残った。

ミーナ「・・・夜間哨戒は周囲が暗闇ですから、仲間との意思疎通・連携が一番大事になります。ですから、サーニャさんの昔の事を少しだけ話そうと思います」

映司と芳佳は少しだけ話を聞かされた。

歌が得意で、ウィッチに憧れてウィッチに入って、でもその所為で戦線が分離して両親と生き別れた。

芳佳「そうだったんですか。でも今は離ればなれでも、いつかはまた会えるじゃないですか」

映司「うん、俺もそう思う。サーニャちゃんが会いたいって思ってれば、きっとご両親も会いたいって思ってると思うから。」

芳佳「そうやって、どちらも諦めなければきっといつかは会えます！それってとっても素敵な事ですよ」

映司「にしても、やっぱり何か事情があったんだ。」

ミーナ「映司君は、旅してたからそこら辺の事は分かるのね。」

映司「なんとなくですけど、ほんと、なんとなくですけど、何か事情はありそうだなって思ってました。できれば、違ってほしいと思ってましたけどね」

ミーナ「彼女はまた会えるって信じてます。もちろん、私たちもそう願ってるわ。だから別段贔屓はしないけど、でも彼女が凹んだときは親身になって話しを聞いてあげて、励ましてあげてほしいの。」

芳佳&映司「分かりました」「分かってます」

ミーナ「・・・二人には、いらぬ心配だったようね。私からの話は以上です、明日から夜間哨戒が始まりますから、二人ともゆっくり休んでくださいね」

ー話は全て聞かせてもらった！ー

サーニャ「カップ取り損ねたの取りに行きづらい。でも、嬉しい・・・」

夜更かしと誕生日と過去の話2（前書き）

映司とアンクは魔力を使うウィッチから、耳と尻尾が生えても大して気にしてません。人間体からグリードになるの見てるから慣れちゃってます。てか気づいてるかどうかすら怪しい。

俺の文章で同じ様な表現が多いのは、ブラックな成分があまり入ってないからとお考えください。ホワイトな表現ばっかりなのー

夜更かしと誕生日と過去の話2

夕方

「夕方だぞ、おっきろー！」
「うぅん・・・」

ルッキーニの元気な声で目を覚ました映司は、のそりと起きあがって一足先に食堂に向かう。他の三人も目を覚まし、ラフな私服から着替えて食堂に向かう。

「何か、いつもより暗いね。目が痛くならなくて助かるけど」
「あぁ、暗い環境に目をあわせる訓練らしい。もっとも俺は、夜目が利くから問題無いけどなぁ」
「そういや、アンクって鳥の化けモンだもんなー。いいよなー、夜目が利くって。私も夜目だったら、徹夜でストライカーの改造に勤しめるんだけどなー」
「ハッ、こっちは夜目が利くから夜間見回りにかり出されてるんだ、良い迷惑だ」

アンクは自分のカップに手を伸ばし、ズズッと一気に飲み干す。

「これは？」

芳佳も自分のカップを手に取り飲もうとしたが、いつもの紅茶と色が違ってるのを見てリーネに聞く。それに自信満々に答えたのはペリーヌだった。

「マリーゴールドのハーブティーですわ。これも、目の働きをよくすると言われてますのよ」
「あら、それって民間伝承じゃ・・・」
と毒づいたリーネにペリーヌは牙をむき出しにする。
「失敬な！これはおばあさまのおばあさまの、そのまたおばあさまのおばあさまから伝わるものでしてよ！ガルルルルルル」
「ご、ごめんなさい・・・」
サーニャの評価は
「・・・不味い」
プシュ、キュイー
「タカちゃん、今日もお願い」
キュイ、キュー
「ふ、震えが止まんないよ・・・」
夜間哨戒の為、夜の滑走路にストライカーをつけた芳佳、サーニャ、エイラ、そしてバイクにまたがるオーズ、その前方に小さな道を造

るタコカン。
そんな中でも、真っ暗で寒い夜がこんなに怖いと思わなかった芳佳は思わず口に出す。
外は曇り空で目の前は滑走路、唯一ある灯りは点滅する誘導灯だけ。その先は海しかない。まだ１５にもなってない少女からしてみれば、未だ体験したことのない恐怖である。

「夜間飛行初めてナノカ？」
「無理なら止める？」
「手、繋いでみたら？」

オーズは怖がる芳佳に、手を繋いでみたらどうかと提案してみる。

「サ、サーニャちゃんが手繋いでくれたら、きっと、大丈夫だと思う」

オーズに提案に芳佳も乗っかり、サーニャに手を繋いでくれと言う。そんな芳佳の右手を、サーニャは左手でそっと包み込むように握る。二人を見てヤキモチを焼いたのか、エイラも
「早く行くゾ」
問答無用で芳佳の左手を右手でグイっと掴み、足下に魔法陣を展開する。

「え？ちょ、ちょっと心の準備が・・・え、わ、わ、うわあああああぁぁぁ」

エイラとサーニャに挟まれて、芳佳は引きずられる形で滑走路を滑って行き、飛ぼうとする二人にあわせて自分も引きずられながら魔法陣を出す。

「よし、俺も行こう」

オーズもタコカンの作る道をバイクで走り、三人の後をつけていく。

「絶対、絶対手離しちゃ駄目だよ！」

「もう少し我慢して、で雲の上につくから。」

そう言って間もなく、四人は雲の上に出た。

「凄いなー、私一人じゃこんな高いところに来られなかったよ！ありがとう、エイラちゃん、サーニャちゃん！」

「任務だから・・・」

「ははは、でも確かに凄いなぁ。雲の上がこんなに綺麗だったなんて、日本じゃ見られなかったし。やっぱり、良いことあったなぁ」

さっきまでの怖がっていた姿はどこへやら、芳佳は両手を広げて夜の空を満喫していた。

オーズも、日本の都会から見ていた夜空とは全然違い、真っ暗な空にちりばめられた星々、頭上にきらめく大きな大きな月に、少しの間バイクのスピードを緩めて夜空を見上げていた。

結局、この夜はネウロイは見つからず、四人とも基地に戻り報告して風呂に入り、自室に戻って2時間ほどの睡眠をとった。

そして翌日。

「これは？」

小さな湯飲みに入った濁ったお茶の様なものに、ペリーヌはいぶかしげに眉をひそめる。

「肝油です、ヤツメウナギの。ビタミンたっぷりで目にいいんですよー？」

芳佳が持っていた『肝油』と、ラベルの貼った一斗缶を持ったまま答える。

「スンスン、何か生臭いぞ」

エーリカが臭いをかいで、露骨に嫌そうな顔をして手に持った湯飲みを机に置こうとする。

「魚の脂だからな、栄養があるなら味など関係ない」

隣に座っているバルクホルンは、相変わらずの仏頂面で臭いの元を魚の脂だからと断言する。

「ホーホッホッホ、いかにも宮藤さんらしい野暮ったいチョイスですこと。ホーッホッホッホ」

右手を顔の左側に持って行き、馬鹿にした態度でペリーヌが笑ったが

「いや、持ってきたのは私だ」

芳佳の後ろに立っていた坂本が、腰に手を当ててペリーヌに言う。

その瞬間ペリーヌは、一瞬で真っ青な顔をして
「ありがたく頂きますわ！」
と、一気に肝油を飲み干すものの、青かった顔が更に青くなりしばらく口を手で押さえて吐きそうになった。

「うぇー、な〝に〝こ〝れ〝ー」
「エンジンオイルにこんなのがあったな」
「ぺっぺ」
「ま、不味い・・・。でも、せっかく持ってきてくれたんだから、全部飲み干さないと・・・、でも不味い・・・」

「新米の頃は、無理矢理飲まされて往生したもんだー」
「お気持ちお察しします・・・」

そんな中、肝油を美味いと飲み干すアンクとミーナ。

「もう一杯」
「お前ら、飲まないなら寄越せ」

うわー、と二人を化け物を見るような目で見てエーリカは後ずさる。
バルクホルンは撃沈してた。

そしてサーニャの自室

「そういえば、二人の出身地ってどこですか？」
「私スオムス」
「・・・オラーシャ」
「スオムスはヨーロッパの北の方、オラーシャは東」
映司は床の毛布の上であぐらをかいて、壁に貼ってある世界地図を見ながら、この基地ってどこら辺にあるんだろうと考えながら三人の話を聞く。
「ヨーロッパって本土の殆どがネウロイに侵略されて・・・」
芳佳はハッと気づいて口を止める。
「私の居た町も、ずっと前に陥落したの。家族はみんな、町を捨ててずっと東に避難したの。ウラルの山々を越えて・・・」
そんな会話を聞いて、映司も会話に入る。
「そっか、でもいつかきっと会えるよ。サーニャちゃんも家族も、早く会いたいって思ってるなら」
「はい」
「サーニャも映司も、随分簡単に言えるナ」
「知ってるから、二人がエイラと同じくらい心配してくれてるのも、家族ときっと会えるって信じてるのも」
芳佳はふと、一昨日のミーナと映司と一緒にサーニャについて話してたのを思いだし、もしかしたらとサーニャに聞いた。
「サーニャちゃん、もしかして一昨日の・・・」

「うん、聞いてた」
「そっか、でも俺たちは一昨日話してた事が本音だから。だから、そのまんまの意味だって受け取っておいてね」
「何々？何か秘密なコトでも話シテタのか？」

エイラだけ会話に置いてけぼりになってしまい、芳佳も気をきかせて話題を変える。

「そ、それにしても今日暑いねー。汗かいてきちゃった。汗でべたべたー」
「じゃあ、汗かきツイデにサウナに行こう」
「サウナ？」
「ほう、宮藤はサウナを知らないノカ。フッフ」
「へぇー、ここにもサウナってあるんだ。なんだか、この基地って結構充実してるね」

映司はサウナを知っているが、こんな基地にあるとは思わなかった。風呂もあればサウナもある、ここの基地ってこんな充実した場所なんだなと思う映司であった。

「うー、これじゃさっきと変わんないよー」

頭と体にタオルを巻いた芳佳は、木でできた段々になっている長い椅子の上に寝っ転がりだべる。

「スオムスは風呂よりサウナなんダゾー」
「もしかして、オラーシャとかスオムスって、一家に一つはサウナあったりするの？」

映司はフィンランドに旅した頃を思い出して、ヨーロッパと聞いてもしやと聞いて訪ねる。
ちなみに、映司は風呂に入ると言い張ったが、魔力で強化した腕力にかなわず強制的にサウナに連れてこられていた。腰にタオルを巻いて、三人から少し距離をあけて一段目に座っている。

「あぁ、友達の家にも親戚の家にも、必ずと言っていいホドあったぞ。ここのサウナも私とサーニャの為に、ミーナ隊長が作ってくれたンダ」
「へぇー、ってことはお風呂もミーナさんが？」
「あぁ、少佐に頼み込まれて扶桑式に作ったラシイ。あの人はほんと何でもアリダナー」
「男湯とか作ってくれないかなぁ。お風呂に入ってるときに、いつ、誰と出くわしちゃうか心配なんだよなぁ・・・。アンクは気にしてないみたいだけど」

サーニャは相変わらず、静かに下を向いて座ったままである。

「サーニャちゃんって、肌白いよねー」
「ドコ見てんだお前」

映司も芳佳に反応して、サーニャを見て改めて気づく。

「うん、いっつも黒い服着てるから余計目立つねてか、ほんとに肌白いね」

サーニャはサウナの暑さで顔が赤いのを、二人の言葉を聞いて更に顔を真っ赤にさせる。

「くっ！サーニャをそんな目でミンナー！」

「コッチコッチ、サウナの後は水浴びに限るンダ」

芳佳とエイラは、ザバザバと基地の側を流れる川を裸で歩いていく。
映司はサウナを出た後、アンクを誘って風呂に入りに行った。
芳佳とエイラが少し川を下ると、歌が聞こえた。
二人は岩陰からこっそり歌の聞こえる方を覗く。

ラーラーラーラー・・・

そんな二人に気づいた歌の主、サーニャは歌を止めて岩陰に隠れていた二人を見つける。

「ご、ごめん！」
「何で謝るの？」
「だって、邪魔しちゃったから。あの、素敵だね、その歌。」

なんとか取り繕って、褒める芳佳だが効果覿面だった。最も、サーニャ自身は全然気にしてないが。

「この歌は、昔お父様が私の為に作ってくれた歌なの」
「お父さんが？」
「私が小さい頃、いつまでも雨の日が続いて、私が退屈して雨粒の音を数えていたら、お父様がそれを曲にしてくれたの。」

「サーニャはお父様の薦めで、ウィーンで音楽を勉強してたんだ。」
「素敵なお父さんだね」

芳佳は小さい頃、ストライカーの研究でたまにしか帰ってこない父を思い出して、サーニャの為に音楽を作ってくれる父親が純粋に羨ましく思えた。

「宮藤さんのお父さんだって、素敵よ」
「え、何で？」
「お前のストライカーは、宮藤博士がお前の為に作ってくれたんだろ。それだって、お前が羨ましいって事だよ。」

自分の父親が褒められて、へへへと笑う宮藤だが

「だけど、せっかくならもっと可愛い贈り物のがよかったかも」

とぼやく。

「贅沢ダナー、かなり高いんだぞ、アレ。」

フフッとエイラが笑い、それにつられて芳佳もサーニャも笑った。

そして場面は変わり、夜の雲の上。
芳佳は空で両手を広げて、下を飛んでいるサーニャとエイラ、タコ

カンの上をバイクで走るオーズに声をかける。

「ねぇ聞いて！今日はね、私の誕生日なの！」

「え？」

「何で黙ってタンダヨー」

「そうだよ、もっと早く言ってたら何かあげたのに」

そんな三人に、芳佳は嬉しそうに、反面少し悲しそうに続ける。

「私の誕生日はね、お父さんの命日でもあるの。なんだかややこしくて、みんなに言いそびれちゃった」

エイラは少し高度をあげて、芳佳の上を飛び、横に降りてきて平行飛行をする。

「馬鹿ダナー、お前。こーゆーときは、楽しい事を優先シタッテいいんだぞ？」

「えー？そーゆー事かなー」

「ソウダヨー」

サーニャも二人に高度をあわせて、平行飛行をする。

「宮藤さん、耳を澄まして」

「え？」

サーニャは尻尾をゆらゆら揺らして魔力をコントロールし、頭の横にある大きな魔導針と呼ばれる探知機を緑色に光らせる。

すると、耳についている無線機から、ザザッザッザザザッとノイズに混じり何かの声が聞こえてくる。

「あれ、何か聞こえてきたよ？」
「ほんとだ、これって・・・？」
「ラジオの音」

サーニャは、エイラの言葉にコクンと首を縦にふる。

「夜になると空が静まるから、ずっと遠くの山や地平線からの電波も、聞こえるようになるの」
「へぇー、凄い凄い！こんなこともできるなんて！」
「うん、夜飛ぶときはいつも聞いてるの。」
「二人だけの秘密じゃナカッタのかよぉ」

エイラは少し残念そうにしてサーニャに近づく。

「ごめんね、でも、今夜だけは特別」
「ちぇ、しょうがナイナー」
「え、どうしたの？」
「うん、あのね「アノナー、今日はサーニャの」」

エイラが芳佳とサーニャの間に割り込み、サーニャの言葉に続けようとした瞬間
キュインキュインと魔導針が光、キュイキュイーとタカカンもエイラの頭の上を旋回し始める。
その瞬間、サーニャの目がカッと見開く。
その豹変を見逃さずにエイラはサーニャを見る。

「ドーしたー？」
「あれ、歌だよ！」

芳佳も、無線の外。つまり空から聞こえた声に、びっくりする。

「本当だ、ラジオの音でもない・・・ってことは！」

オーズも歌に反応し、もしかしてと思い体を引き締める。
ただ、サーニャだけは
「どうして・・・」
と呟いただけだった。

その声は、基地にも届いたらしく、司令室に居るミーナと坂本とアンクにも聞こえていた。

「これが、ネウロイの声！」
「サーニャを真似てるってのか？」

右手を見つめているアンクは、二人の言葉を拾い考える。

「ハッ、ネウロイってのはよく分からん生き物だな。」
「サーニャを真似た歌・・・そうか、敵の狙いは！」

坂本は何かに気づき、不安げに遠くの空を睨む。

「どうして・・・」
「これって、サーニャちゃんの歌じゃ・・・」

「どうした、サーニャ？」
「ネウロイなの？！どこ！」
「三人共、避難して！」

サーニャは三人にそう告げた後、思い切り上昇した。
その瞬間、雲の隙間を縫うように一筋の黄色い光が、サーニャめがけて放たれた。
サーニャはぎりぎりで回避したものの、片足のストライカーを壊されてしまった。
エイラは真っ先に、落ちていくサーニャの元へ飛んでいき抱きかかえる。
芳佳とオーズもその後に続いてサーニャの元へ行く。

「馬鹿！一人でドースル気だよ！」
「敵の狙いは私、間違いないわ。私から離れて、一緒に居たら・・・」

グッと、エイラの袖に掴んでいた手に更に力を入れ、サーニャは悲しい言葉を放つ。

「馬鹿、何言ってンダ！」
「そんなこと、できるわけないよ！」
「だって・・・・・」

重苦しい雰囲気の中、エイラは自分の武器であるマシンガンと、サーニャのロケット砲を構えて、サーニャを芳佳に預ける。

「どうする気なの？」
「サーニャは、私にネウロイの居場所を教えてクレ。大丈夫、私は敵の動きを先読みデキルから、やられたりしないよ」

ビームの飛んできた方向を見て、エイラは続ける。

「アイツはサーニャじゃない、アイツは一人ぼっちだけど、サーニャは一人じゃないだろ?私たちは、絶対負けないよ!」

「でも、あのネウロイは私を狙って・・・」

そんなサーニャを後押しするように、オーズも三人の側に行き、昔を振り返りながら話す。

「エイラちゃんの言うとおりだよ。俺も、何でもかんでも自分一人で背負い込んで、周りの人たちに心配ばっかりかけちゃってさ。」

(後藤さんやヒナちゃんも、こんな気持ちだったのかな)

「自分には力があるから、やれる事があるからって、自分の手の届く範囲は全部自分がやりきろうって、勝手に自分一人で張り切って。その結果、仲間に心配ばっかりかけて、怒られちゃって。」

(あの時、伊達さんや後藤さんが怒ってくれなかったら、まだ一人で突っ走ってたかも)

『火野!お前は何でもかんでも一人で背負い込みすぎだ!少しは周りの事も考えろ!』

『他人は助けようとするくせに、自分の命は無視してる。お前は、自分の命を賭けてすらいない。』

「だからさ、サーニャちゃんの気持ちは分かるけど、でも、本当に辛かったら手を伸ばせば掴んでくれる仲間がいるから、こーゆー時くらいは甘えてもいいんじゃないかって思う。」

タカカンがキュイ、キュイーと呼応するかのように、サーニャの頭の上を回る。

（だから、俺みたいになってほしくないな。サーニャちゃんには、帰る場所があるから）

「それに、今日は芳佳ちゃんだけじゃなくて、サーニャちゃんも誕生日でしょ？だったら、もっとワガママ言っていいのに」

「えぇ？！私と一緒？！」

「知ってたのか、ツマンネー」

「だって、部屋のカレンダーに書いてあったし」

「あ、あの赤い丸ってそーゆー意味だったんだ・・・」

当のサーニャは顔を赤らめて、「うん」と頷いた。

「それで、ネウロイは今どこにいるの？」

サーニャは顔つきが穏やかになり、オーズをしっかりと見据えて座標を口にする。

「・・・ネウロイは、ベガとアルタイルを結ぶ線の上を真っ直ぐこっちに向かってる。距離、約３２００」

「こうか？」

エイラは、サーニャのバズーカ砲を手に取り狙いをつけている。

「もっと手前を狙って、そう。あと三秒」

「当タレヨ！」

エイラがバズーカ砲を撃ったと同時に、向こうからも黄色く眩いば

かりの光を放つビームが飛んでくる。
オーズはその光に見覚えがあった。

（あれって、やっぱりライオンの・・・）

オーズは、はずれたビームの通った直線上にバイクを走らせて止まる。そして、ベルトのメダルの一番右のタカを抜き取り、代わりにクワガタメダルをセットする。そしていつものポーズでスキャン。

『クワガタ！トラ！バッタ！』

ガタトラバにフォームチェンジしたオーズは、エイラがバズーカ砲をはずした時の事を考えて、ネウロイの進行方向を遮る形で迎え撃つ準備をする。
そしてもう一度スキャン。

『スキャニングチャージ！』

オーズはバイクから降りた。バイクを支える為に半分のタコカン。
そして、自分の足場になる半分のタコカンを残して。
頭のクワガタホーンからトラクローに緑色の電気が走り、トラクローを突き出して腰を低く落とし構える。

その直後、ドォン、ドォン、ドゴォン！
と立て続けに三回大きな音がした。

「外した？」
「いいえ、速度は落ちてるわ。ダメージを与えてる」

光が眩しすぎて、思わず撃つ瞬間に目をつぶってしまったエイラは、

外したと思ったが三発目が当たっており、ネウロイにダメージを与えていた。ダメージを食らってしまったネウロイは、速度を落としたとはいえかなりの速度を保っていた。そのままの速度でネウロイは

「はぁー・・・」

頭からオーズに

「セイヤー！」

突っ込んだ

ネウロイは真っ二つになり、切れ目からバチバチと緑色の火花を散らして、ドォーン！と大きな音と共に爆発し、綺麗な欠片となって宙を舞った。

オーズは、トラクローに挟まった黄色いメダルを抜き取って、オーメダルネストにしまう。

「お疲れ。」

ポロロンポロン

無線からは、まだピアノの音が聞こえていた。

「マダ聞こえる」

「何で、やっつけたんじゃ・・・」

「違う・・・これは、お父様のピアノ」

サーニャはピアノの慣れ親しんだ音を聞いて、片足だけのストライ

カーを器用に操り、月に向かって飛んだ。

「そっか、ラジオか！この空のどこかから届いてるんだ！凄いよ、奇跡だよ！」

「いや、ソウデモ無いかも。」

「え？」

「今日はサーニャの誕生日だからサ、正確には昨日かな。サーニャの事が好きな人なら、サーニャの誕生日を祝うなんて当たり前ダロ。世界のどこかに、ソンナ人が居るんなら、こんな事ダッテ起こるんだ。奇跡なんかジャナイ」

「エイラさんって優しいね」

エイラは褒められたのが恥ずかしく、月とサーニャの重なった美しい姿を見ながら

「ソンナンじゃねぇよ、バカ」

と呟いた。

「お父様、お母様、サーニャはここにいます・・・ここにいます・・・」

（誕生日か、会長ならハッピバースディ！だな）

オーズはバイクに乗り、一人仮面の下笑いながら三人に走り誕生日を祝福した。

「お誕生日おめでとう、サーニャちゃん。芳佳ちゃん。」

「オメデトナー」

「「ありがとう」」

夜更かしと誕生日と過去の話２（後書き）

晴れた日の朝、『ストライカーユニットの父』・宮藤一郎の墓の前に三人は来た。

坂本「今回のネウロイは、明らかにサーニャにこだわっていた。行動を真似してまで」

ミーネ「ネウロイの行動に対する認識を、改める必要があるのは確かなようね」

坂本「アンク、上の連中、このことをどこまで知っていると思う」

アンク「さぁなぁ、もしかしたら、お前達の持っている情報より多くの事を掴んでるかもなぁ」

坂本「うかうかしてはいられないか」

坂本とミーナは、墓に手向けられている花の上に、ある写真を見つけてクスっと笑った。

アンクは相変わらずの仏頂面だが、ほんの少し、ほんの少しだが、笑った。

その写真には、ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ　と書かれたチョコの乗っかったケーキの周りで、アンクを除くみんなが笑ってこっちを見ていた。

ミーナ「あ、アンク君今笑ったわね？」

アンク「ハッ、まさか。」

坂本「何！それは惜しい物を見逃してしまった・・・」

アンク「だから、笑ってねぇよ」

アンクはクスクシエを追い出されて、河原で乗っ取った体の泉　信吾と、アンクとしての誕生日をしてもらったのを思い出した。

ただ

それだけ

それだけだった。

お休みとデートと潤い（前書き）

ドラマＣＤ風、所々の描写を文体にしますが細かいとこまで書きません。各自脳内再生お願いしゃーす

お休みとデートと潤い

ミーナ「昨晩ネウロイと戦闘があったので、本日の出撃は無いと考えられます。四人とも、お疲れ様でした。」

芳佳「エヘヘ」

エイラ「マァ、これくらい当然ダナ」

ミーナ「明日はマルセイユ中尉も来ます。ですので、これから忙しくなる事は目に見えてます。今日は丁度お給料ということもあり、今日は全員丸一日非番にします。外出する人は、申請書を提出してください。」

芳佳「わーい、お休みだー」

リーネ「芳佳ちゃん、どこかに遊びに行かない?」

芳佳「私、ブリタニアをあんまり知らないから、リーネちゃん案内してくれる?」

リーネ「うん、いいよ」

坂本「宮藤、休みだからってあまり浮かれるなよ!」

芳佳「はーい」

ミーナ「はい、映司君とアンク君のお給料」

映司「すいません、居候の身なのにお金もらっちゃって」

アンク「こっちはネウロイ倒してんだ、もらって当然だ。」

映司「倒してるのアンクじゃないでしょ。大体、アンクが訓練に来ないから俺がアンクの分まで追加でやってるのに」

アンク「こっちもこっちでやることがあるんだ、我慢しろ」

映司「まったく・・・って多！こんなにもらっていいんですか?！」

ちなみにお金はポンドでも映司は読めるから問題無いね。

ミーナ「映司君は軍隊の階級は無いけど、オーズとしての戦闘能力は私たちウィッチの上を行くわ。軍に正式に、仮にでも申請すれば、大佐はくだらないわ。だから、それくらいが相当だと判断したの」

映司「そうなんですか。やっぱり、ウィッチから見てもオーズって凄いんだ」

アンク「当然だ、オーズの力は強い。そこら辺のちんけな魔法なんかと一緒にされてたまるか」

映司「おいアンク！すいません、アンクが失礼言って。こいつ子供みたいにワガママで・・・」

アンク「チッ映司！」

ミーナ「ふふ、やっぱり二人を見てると兄弟みたいね。それじゃ、今日はゆっくり休んで英気を養ってください」

映司「はい、ありがとうございます。ほら、アンクも」

アンク「オイ映司、アイス食いに行くぞ」

映司「っとと、アンク、引っ張んなって。そーいえば今着てる服借り物だし、俺の普段着一着しか無いから新しい服買わなきゃなぁ。」

（服か。ヒナちゃん、大好きだったお洋服の勉強どうなったのかな。ユニコーンヤミーの所為で夢が壊れちゃったけど・・・。立ち直って何か新しいこと見つけてるといいな）

映司「まぁ、まずは明日のパンツ買ってからだな」

サーニャ「・・・みんなは誘わなくていいの？」

エイラ「リーネは宮藤と行くみたいダシ、シャーリーとルッキーニはさっさとどっか行っちゃったし」

サーニャ「映司さんは？」

エイラ「そーいやあの二人、今日は何するんダロウナ」

サーニャ「エイラ、あの二人も誘っていい？」

エイラ「ン・・・サーニャがいいなら、私も構わナイゾ」

タッタッタ

サーニャ「あの、映司さん、エイラが面白い物があるからって・・・その、一緒に行きませんか？」

映司「うん、全然構わないよ。どうせ服買うだけだったし。あ、アンクもいい？アンクがアイス食べたいんだって」

サーニャ「はい、大勢のが楽しいですから」

アンク「エイラ、今から行くとこにアイスあるんだろうな」

エイラ「サーナー、行ってからのお楽しみダ。早く申請書を出しに行こー」

映司「あれ、ペリーヌちゃんはいいの？」

ペリーヌ「私は、結構ですわ」

映司「でも、ペリーヌちゃん全然休んでないんじゃ・・・」

ペリーヌ「貴方、人の事言えまして・・・？はぁ、いいったらいいんですの」

映司「あ、行っちゃった」

アンク「ほっとけ映司、本人がいいって言ってんだ。さっさと行くぞ」

映司「アンク、無愛想すぎだって。ちょっとは愛想良くしようよ」

アンク「ハッ、良い子ちゃんぶる気は無いなぁ」

エイラ「申請書も出した、お金も持った」

サーニャ「タカちゃんとバッタちゃんも持った」

映司「コアメダルも一応持った」

エイラ「ソレジャ、しゅっぱーつ！」

――ロンドンのとある男性用洋服屋さん――

映司「うーん、どっちのパンツにしよっかな。迷彩と水玉・・・うーん。なぁアンク、どっちがいいと思う？」

アンク「あぁ？どっちも一緒だろ、さっさと決めろ」

映司「どうしようかなー、水色じゃない水玉模様って面白いから・・・こっち！
にしようかな、でも１９４４年の迷彩柄は珍しいしなぁ。やっぱこっち！
もいいけど、どっちにしよっかなー」

アンク「だったらどっちも買え。前みたいにケチケチしないで済む金、今は持ってんだろ」

映司「あ、そうだった。すいませーん、これどっちもください。後は服だけど、やっぱりこの時代だとやっぱ着やすい服は置いてないか。まぁ仕方ないのかな」

エイラ「映司ー、これは？」

映司「エイラちゃん、俺スーツはちょっと・・・」

アンク「映司、お前スーツ着てたろ」

映司「あれはハロウィンフェアの時だったからだろ」

エイラ「じゃあ何なら着るんダヨ？軍服じゃ駄目なのか？」

映司「うん。みんなには悪いけど、軍服はあんまり気分が良くないかな。着るんだったら、今着てるみたいな、締め付けが全然無い感じの服？」

エイラ「・・・映司ー、前も軍が嫌いミタイナ事言ってたけど、まだ私達に隠し事シテんだろ」

映司「隠し事っていうか、ちょっと、昔の事をね。」

サーニャ「映司さん、軍が嫌いって私たちの事も・・・」

映司「あ、ううん。サーニャちゃんたちの事は嫌いじゃないよ？でも、俺が嫌いなのは軍じゃなくて、本当に俺が嫌いなのは・・・『戦争』の方かな」

エイラ「なんだよソレ、詳しく教えろヨー」

アンク「チッ」

（こいつ、ちっとは潤ったと思ったんだが、まだまだ乾いてるなぁ）

映司「別に話すのはいいけど、ここ洋服屋さんだから後で教えてあげるよ。とりあえず今は洋服買わなくっちゃ。何着たらいっかなー」

サーニャ「映司さんの着るお洋服、カーディガンだったら似合いそう」

映司「そう？だったら、サーニャちゃんが俺に似合いそうなの選んでよ。」

サーニャ「わ、私が選んだの着るんですか？」

映司「俺そういうの疎くってさ、俺の服って全部古着屋で物々交換してもらったものだし。いいかな？」

サーニャ「は、はい。私が選んだのなんかでよければ・・・」

エイラ「サーニャ、顔赤いゾ」

サーニャ「そ、そんな事無いもん。からかわないでよ、エイラ。そ、それじゃ映司さん・・・・・・」

映司は洋服を買い終わって両手に紙袋を持ったまま、満足げに大きく伸びをする

映司「んーぅ、訓練が無いとこんな楽だったなんて」

サーニャ「一週間ですけど、朝から晩まで訓練でしたもんね」

映司「そうそう、滑走路を何往復も走らされたし、腕立て伏せなんて翌日が筋肉痛になってパンパンにはれるまでやらされたし。はぁー、まさかここまできつかったなんてなぁ」

アンク「ハッ、そのおかげでこうして休日を満喫できるんだろ。前の休日なんて、アテも無くぶらぶら歩いてるだけだったからなぁ」

映司「そう言われればそうかもしれないな、でもやっぱきついって。」

エイラ「オーイ、そろそろ着くぞー」

映司「へぇー、中々お洒落なカフェだね」

エイラ「ダロ？ふっふーん、ここにガリアから来たシェフが作った『パルフェ』ってお菓子があるらしいんだ、私はマダ食べた事は無いけどな」

アンク「ここにアイスが無かったら容赦しねーぞ」

映司「まぁまぁ、アイスは帰りに買えばいいじゃんか。そもそも勝手についてきたのお前だろ？」

アンク「なっ、おい映司！お前が」

エイラ「ささ、行くゾー」

ガチャ、コロンコローン

「いらっしゃいませ、四名様ですね。まだお席が空いてますので、こちらへどうぞ」

お休みとデートと潤い（後書き）

誰と誰を映司とくっつけようかと思ったけど、全員を映司が射止めるってことでここは一つ。
つまり映司のハーレムなのだぁ！

そう考えていた時期が俺にもありました、アンクも誰かとくっつける。

お休みとデートと潤い２（前書き）

誕生日回
映司とアンクの誕生日がわからなかったんで、中の人の誕生日使ってます。

鴻上
「ハッピバースディ！今日も新しい君の誕生だ！おめでとう！この話を読んでる君！そう、君だ・・・
ハッピバースディトゥーユー、ハッピバースディ・・・・・・・」

お休みとデートと潤い2

映司「ふー、よいしょっと。あー、やっと座れた」

アンク「フン」

映司「おいアンク、机に脚のっけんなって」

アンク「それより、ここにアイスはあるんだろうなぁ」

映司「無かったら無かったで仕方ないだろ、帰りに買って帰るから。ってか、アイスはあると思うけどアンクの言うアイスは無いかも・・・」

アンク「何?!」

映司「ま、まぁ俺が作るからそれで我慢しろって」

サーニャ「エイラ、あそこに居る二人って・・・」

芳佳「サーニャちゃん、エイラさん、映司さんにアンクさん!」

エイラ「宮藤、それにリーネまで!」

映司「あれ、二人ともロンドンに来てたの?」

芳佳「はい、リーネちゃんと一緒に観光してました」

リーネ「来る途中にルッキーニちゃんと、シャーリーさんも見ました。みなさんロンドンに来てたんですね」

エイラ「地球は意外と狭いナ・・・」

サーニャ「それ、綺麗なお菓子ね」

リーネ「うん。これがこのお店オススメで、ガリアから来たシェフが作ったパルフェってデザートなのよ」

エイラ「これだよサーニャ、珍シイ物って」

サーニャ「美味しそう。エイラ、私たちもパルフェ食べよ」

映司「パルフェかー、ん?でもそれって二人一つで食べるものだっけ?」

リーネ「パルフェのチョコの在庫が切れかかってて、でも気づいたのがチョコを頼んだ後で、他の人に迷惑になると思ったから、だから二人で一つ・・・」

芳佳「はい、リーネちゃんがそう食べる物だって。え、そうじゃないの?」

リーネ「うぅ・・・そ、そう！二人で一つなんです！」

サーニャ「二人で一つ・・・映司さん、一緒に食べませんか？」

映司「うん、いいよ。でもあれって二人で一つだっけ？クスクシエで見たときは、普通に一人で食べてたような・・・どうだったっけ、アンク？」

アンク「さぁーなー」

映司「ってあ、お前また勝手にアイス食べてるし！」

アンク「確かに俺の言ってたアイスとは違うが、美味い」

映司「なら良かったけど、じゃあパルフェ食べよっか。でも、俺とサーニャちゃんだと、エイラちゃんが余っちゃうから、俺は一人で食べるよ。サーニャちゃんごめん、また今度ね！」

サーニャ「でも、それだと映司さんが・・・」

映司「俺はいいよ、一回食べたことあるから。それに、二人ともたまのお休みなんだから、女の子同士で盛り上がりたいだろうし」

エイラ「映司ナイス！　ボソ　　そ、それじゃサーニャ、一緒に食べルカ」

サーニャ「うん。でもエイラ、大丈夫？顔真っ赤よ？」

エイラ「ソンナ事ないぞ、大丈夫だ！　スイマセーン、苺パルフェ一つと・・・映司は？」

映司「あ、じゃあ俺も苺で」

エイラ「苺パルフェもう一個追加でー」

リーネ「あ、すいません。それと紅茶の、えぇと、キャッスルトンのセカンド・フラッシュを６つお願いします」

「かしこまりました」

エイラ「６つって、リーネ一人でソンナに飲むのか？」

リーネ「ここは紅茶も美味しいんです、代金は私が持ちますから、みなさんに試してほしくて」

芳佳「えぇ、私が誘ったのに悪いよ！私が」

エイラ「そーゆーことなら、私がおごってヤルゾ」

映司「リーネちゃん、ありがと。でも、アンクと俺の分は後で俺が一緒にして払うから、大丈夫だよ」

サーニャ「リーネちゃん、ありがとう。私の分はエイラと一緒に払うから。それにエイラ、こんなところで階級持ち出すのはよくないよ」

アンク「ハッ、二人とも似たような事言ってんなぁ。おい、アイスお代わり！」

映司「アンク、アイスは自分で払えよ」

アンク「残念だったな、まだアイス一年分の期限は過ぎてないぞ」

映司「あー！すっかり忘れてた・・・まぁ、どうせお金なんてこんなとこでしか使わないし、いっか」

かちゃかちゃ、オマタセシマシター

サーニャ「エイラ、芳佳ちゃん、映司さん、この間はありがとう」

映司「なんてこと無いって、ライオンのメダルも手に入ったし」

芳佳「えへへ、友達だもん！」

リーネ「芳佳ちゃん、友達が増えたんだね」

芳佳「うん！」

サーニャ「リーネさんと映司さんが作ってくれたケーキも美味しかった。私、こんな風に誕生日を祝ってもらうなんて初めてで」

芳佳「あ、私も友達たくさんの誕生日で嬉しかったー。リーネちゃんの誕生日も同じようにしようね」

リーネ「私の誕生日六月だから、もう過ぎちゃった・・・」

芳佳「じゃあ、来年！」

リーネ「うん、絶対ね！」

サーニャ「エイラは？」

エイラ「私は、二月・・・ずっと先・・・」

芳佳「じゃあ、その時はお祝いするね」

エイラ「ほ、ホントか！」

映司「あ、俺も！」

リーネ「私も私も！あ、そう言えばシャーリーさんも、二月だって」

エイラ「へー、私は２１日」

リーネ「シャーリーさんは１３日」

芳佳「あれ？前にペリーヌさんは２８日だって言ってたよ」

エイラ「宮藤、なんであんなつんつん眼鏡の誕生日なんて知ってんだ？」

芳佳「前に坂本少佐と話してるの聞いたの」

映司「へぇー、その坂本少佐の誕生日は？」

芳佳「確か、私の誕生日の近くで・・・もうすぐじゃなかったかな」

サーニャ「じゃあ、みんなでお祝いしましょうか」

エイラ「少佐だけじゃなく、これから誕生日が来る度にお祝いができるとイイナー」

ルッキーニ「私の誕生日はー、１２月２４日ー！」

映司「うわっと、ルッキーニちゃんどっから、てか俺胸ないからさわんないで！」

ルッキーニ「残念賞ー」

映司「あったらそれ太ってるだけだから！あ、アンクだったら鳩胸でありそうだけど。」

アンク「あるか、んなもん。アイスお代わり！」

シャーリー「ハッハッハッハ、前から居たぞ。うわアンク、そのアイスの量は腹壊すぞー」

アンク「ハン、こんなんで壊すか」

サーニャ「気がつかなかった・・・」

ルッキーニ「リーネからこのお店聞いてたから、来てみたんだー」

リーネ「覚えていてくれたんだ」

ルッキーニ「だって、パルフェ・・・だっけ？食べてみたかったしー」

芳佳「あれ、そっちのは紫だよ？」

ルッキーニ「私のはー、ブルーベリー！」

シャーリー「私のもブルーベリーだ」

サーニャ「前に、リーネさんの持ってきてくれたブルーベリー美味しかった」

エイラ「！も、もう一つ頼むか？サーニャ」

サーニャ「うぅん、大丈夫」

「私の誕生日は、４月１９日ー」

芳佳「えっ、わっ、えっと、今の誰？」

リーネ「ん、どうかした？芳佳ちゃん」

芳佳「い、今誰かの声がした！」

バルクホルン「たるんでいるぞ、宮藤！」

芳佳「うわっ！バルクホルンさん、じゃあさっきのは」

エーリカ「わったしー！えーいじー、それ食べさせてー。あーん」

映司「うん？エーリカちゃん、全部あげるよ？」

エーリカ「そーゆーんじゃないのー。まったく、映司は分かってな

いねー」

アンク「こいつはドストレートで行かないと駄目なタイプだからなぁ」

バルクホルン「私の誕生日は、３月２０日。ちなみに、ミーナは１１日だ」

リーネ「カールスラントのみなさんって、誕生日がとても近いんですね」

ルッキーニ「うぎゅー、私だけ近い人がいなーい」

映司「俺の誕生日は、１０月２６日。アンクは2月１６日だし・・・」

ルッキーニ「映司とアンクまで遠いー！」

芳佳「お二人はなんでここに？」

バルクホルン「ハルトマンが、どうしてもここに来たいを言ってな。どうせ、甘い物目当てだろうが」

エーリカ「トゥルーデだって、乗る来だったじゃん。あ、パルフェ一つ！え、何種類かあるの？じゃあ全部！」

芳佳「リーネちゃんお先にどうぞー」

リーネ「うぅん、芳佳ちゃんから」

芳佳「いいよ、リーネちゃんから」

リーネ「芳佳ちゃんから」

芳佳「うーん、じゃあ。えっと、どうやって食べるの？」

リーネ「芳佳ちゃん、あーんして？」

芳佳「あーん、うん美味しい！」

（なるほど、ああゆーふうにすればイインダナ？）

エイラ「サーニャ、先に食べるか？」

サーニャ「うん、ありがとう」

エイラ（・・・・・・・・・アレ？）

映司「美味しかったー、それじゃそろそろ帰ろっか」

芳佳「そうですね、今日は楽しかったー」

エイラ「映司ー、洋服屋で言ってた続き聞かせろヨー」

エーリカ「何それ？私も聞きたーい」

映司「こ、ここで話すのはちょっと・・・。ほら、雰囲気壊しちゃう感じの話だから・・・」

シャーリー「なんだ？何か悩み事でもあるのか？だったらこのグラマラスシャーリー様に「いえ、悩み事じゃないです」だったら何だよ、余計気になるぞー」

エイラ「前に軍が嫌いみたいな事言ってたダロ？それにまつわる昔

の話を聞かせてくれるらしくてさー」

バルクホルン「火野、それについては私も引っかかってたんだ。この際だ、全部話せ」

映司「・・・はい。それじゃ、あんまり気持ちよくない話だけど。俺、旅の途中で内戦に巻き込まれた事があるんです。お世話になってた村の人たちと協力して、何週間か一緒に居て。でも、でも、内戦は激しくなるし、食料も無くなって、俺はぼろぼろで、情けなくて・・・村で一番最初に仲良くなった女の子を、助けられなかった・・・挙げ句の果てに、親に身代金を出されて、俺だけ助けられて日本に連れ戻されたんです。必死に少女を助けようとした、って所だけニュースに取り上げられてたし」

バルクホルン「なるほど、だから前もコアメダルの情報が漏れるのをあんなに必死に・・・」

芳佳「映司さん、そんな・・・」

映司「人の欲しいって気持ち。あれがほしい。これもほしい。いろんなとこ行ったけど、そう思わない人なんて一人もいませんでした。そう思うのが、生きるのに必要な国もありましたし。だから、欲しいって思うのは、そこはいいんじゃないって思うんです。大切なのは、その欲しいって気持ちをどうするか、かも。」

シャーリー「メダルの存在、それを軍が知ればメダルを応用して対ネウロイの兵器を作れるかも。だが、その欲を抑えられなくなって、更に強力な兵器を作ってしまったら、もう取り返しがつかなくなるから・・・か」

映司「そんなとこです。それと、何度も言うけど軍は嫌いじゃないからね。みんなみたいな軍人さんは初めてだけど、ただ純粋に誰かを守りたい。って人も居るって知ってるし」

エーリカ「なーんで映司は、そー簡単に私達を信じてるの？」

映司「前に言ってなかったっけ？朝からの長い付き合いだって。」

ルッキーニ「あ、それ私とシャーリーしか聞いてなーい」

シャーリー「前に出撃渋った時に、映司が言ってたもんなー」

映司「ま、つまりはそーゆー事だから。さーって、もう暗くなってきたし帰ろっか」

リーネ「あっ、もうこんな時間！」

ルッキーニ「やばっ、早く帰らないとみっちり訓練される！」

エーリカ「しかも明日ってあいつ来るじゃん！映司、早くかえろ！」

映司「うわっとっと、ちょ、ちょっと！すいませーん、お代置いておきます！」

アンク「さーって、今日の晩飯はうまいんだろうなぁ、映司」

映司「まったく、アンクも手伝えって！」

坂本「お、帰ってきたな」

「「「「「「ただいまー！！！」」」」」」

お休みとデートと潤い2（後書き）

映司「なぁアンク」

アンク「あ？」

映司「結局お前、どこに給料使ったんだよ。帰りのアイスは俺が買ったし」

アンク「ハッ、それなら全部ミーナに預けっぱなしだ。特に欲しい物も無いしなぁ、今は目先のコアメダルが先決だ」

映司「アンクもアイス以外に興味持てば？シャーリーさんみたいに機械いじったりさー」

アンク「興味、なぁ。アイス以外なら今は風呂だ。ここの風呂はでかくて温度も丁度よくて疲れがとれて気持ちがいい」

映司「お！いいな、お風呂！てか、冷たいのに温かいのって、アンクも結構極端だよな。でも、やっと手に入れた体だもんな。そっか、お風呂か・・・。アンク、飯食ったら一番に入ろうな！」

アンク「お前今単純な奴だと思わなかったか？」

映司「早く行こーアンク！」

アンク「おい！」

サインと混乱とアフリカ（前書き）

台詞だけの回は全部、映司「」こんな感じにすれば良かったね。見づらい事この上ないっすね、あとで修正しときます。

サインと混乱とアフリカ

「うーん、良い天気だねー」
「そうだね、お洗濯が早く済みそう」
「やー、やっぱパンツはいつも綺麗にしとかないとね」

時刻は9時手前、芳佳とリーネと映司は洗濯物を干していた。
夏ももう終わりに近づき、相変わらず太陽はサンサンと輝くが丁度良い暖かさで、風がいつも以上に心地よく感じられる。

ブルルルルルル
「あ、輸送機だ」
「結構大きい飛行機だね、なんの用なんだろう」

映司も音を聞いて上を見上げた、だが映司が見たのはそこから人が飛び降りた光景だった。

「ちょ、ちょっと、あれは流石にまずいって！」
「わっ」
「飛んだ！」

その飛び降りた人物は、滑走路のど真ん中めがけて真っ直ぐに頭から落ちていき、空中で魔力を巧みに操り体を半回転させて脚から綺麗にスタッと着地した。

「す、凄い」
「わぁー」

「もしかしてこの人って・・・」

飛び降りた人物はゴーグルをはずし

「やぁ子猫ちゃんたち」

フッと笑い髪をかき上げ

「悪いけど、サインはしない主義なんだ」

と、いかにもキザったらしく決め込んだ。

「・・・やっぱ、この人がマルセイユさん?」

「サインはしないよ?ところで君たち」「マルセイユ、なんでよりによって来るのがお前だったんだ、アフリカに居ればいいだろ」

ランニングが終わったバルクホルンが、マルセイユに食ってかかる。

「おー、ハルトマン!航空学校以来か?いや違うな、ＪＧ５２の第四中隊以来だ。そーだ、覚えてるか?ほら、融通の利かな上官の・・・えーっと・・・?」

「バルクホルンだ」

だが、当のマルセイユはそんなの目に入らないかの様に、バルクホルンの隣に立ってるエーリカに走り寄って手を取り再会を喜ぶ。しかも、バルクホルンに喧嘩を売っている。

「あぁー、そうだった。久しぶりだなバルクホルン、元気だったか?」

マルセイユはバルクホルンに握手を求める。バルクホルンもそれに応えて

「あぁ、大いに元気だ」

と返してがっしりと手をとり、ぐぐぐと思い切り握る。

（面倒なのが来た・・・）

エーリカは一方的に再会を喜んでいたマルセイユとは真逆で、心底面倒くさそうな顔をして心の中で呟くのだった。

―ミーティングルーム―

「あ、さっきの人だ！凄い、本に載ってるんだー」

「えっと、『ハンナ・マルセイユ』カールスラント中尉。第三十一飛行隊、ストームウィッチーズ所属で、１７０機撃墜のエース！」

「１７０機、凄い」

「しかも、容姿端麗でカールスラントにとどまらず、世界中に彼女のファンが多数。通称『アフリカの星』」

「アフリカの星、かっこいい！」

「はい、静粛に。」

芳佳とリーネは、ミーナが坂本とアンクとマルセイユを連れてきたのを見て、本を素直にしまった。

「今日マルセイユさんに来てもらったのは、コアメダルの輸送の為です」

「でも、なんでコアメダルを輸送するだけで、マルセイユ中尉が来るんですか?アフリカで忙しいんじゃ。それに、あんな大きな輸送機で・・・」

遠慮しがちにリーネは質問した。

「そうね、一つは輸送中にネウロイに襲われる危険性があるからよ。現に彼女は、ここに来る途中でネウロイと二回交戦し、二回とも撃墜してるわ」

「おかげさまで、撃墜数が増えたって事だ」

「それと、ここにマルセイユ中尉が来る事は表向きには、水・食料・物資をアフリカに運ぶ護衛任務に着いてもらっています。ですから、あの大きな輸送機が必要なワケです。」

それを聞いて、一同は納得した表情になって頷く。

だが、マルセイユだけは納得しない表情でポケットからタコメダルを取りだして指で転がす。

「それにしても、こんな一枚のメダルだけの為に、こんな大がかりな事をするかな?普通。それも、上層部の奴らに内緒でこっそりと」

「それ、マルセイユさんが思ってる以上に危険な物なんです。」

映司は、未だ納得をしないマルセイユを諭そうとする。

「お前はウィッチじゃないな・・・?ミーティングルームに居るっ

てことは、整備士でもないし。そうか、お前が噂の『オーズ』か。なるほどなるほど、ハルトマンが一目置く男なだけあるな、見た目は」

「マルセイユ！」

エーリカはからかわれて、頬を少し赤くする。

「おい、いいからさっさとそいつをよこせ」

アンクは相変わらず、映司の一つ後ろの机の上に赤いカーテンを垂らし座っている。

目と鼻の先にコアメダルがあるのを見て、じっとしてる性分でないアンクは、焦らすマルセイユをせかす。

そんな命令をマルセイユが聞くわけがなく、むしろニヤッと不適に笑う。

「フッ、そうだな、オーズが私と戦って倒せたらこいつをやろう。ま、私と互角に戦えるのはハルトマンくらいだがな」

「ハッ、上等だ。オーズに勝てる奴が居るとは、思えないがなぁ」

「ちょっとマルセイユ！」

「おいアンク！」

エーリカと映司は、二人を落ち着かせようとするが最早手遅れで、二人とも火花をバチバチと散らしていた。

「どうせここには、3日ほど居座る事になるんだ。ミーナ中佐、別に構わないだろう？」

「おいミーナ、タコメダルの為だ。許可を出せ。」

「ミーナ、一度こいつにはきついお灸を据えた方が良いと思うぞ」

そんな二人に、マルセイユを敵視しているバルクホルンも便乗する。
ミーナはしばらく厳しい顔をしてたが、映司にも意見を求める。

「オーズに変身する、映司君自身はどうなの？」
「俺はちょっと・・・っていうか、流石に戦うのは危険ですし」

首を少しかしげて拒否するが、弱気な映司を見てマルセイユは更に挑発する。

「怖じ気づいたか。まぁ、このエースの私を相手にするのが無謀だと言うんだ。そこの赤い手の化け物と一緒に、布団にくるまって寝てるといいさ。」

映司はそれを聞き、少しだけ顔色が変わった。アンクも今の台詞を聞き、勝ち誇った顔をしてニヤッと笑う。

「ハッ。映司、出し惜しみは無しで行くぞ」
「分かったよ。それとマルセイユさん、とりあえず、アンクはもう化け物は卒業しましたよ。まぁ、見た目と言葉のイメージは悪いですけど・・・」
「おい！」
「ミーナさん、そーゆー事で俺からもお願いします。」

ミーナは映司からも頭を下げられて、渋々ＯＫを出した。

「・・・分かりました。でも、今日は今日の予定がありますので、明日の午後になんとか予定を詰めてみます。それでいいですね？では、ミーティングはこれで終わりにします。そうそう、アンク君と映司君は男手が足りないみたいなので、輸送機の荷物の積み込みを

手伝ってください。以上です」

アンクは、ハッと笑い外に出て行った。映司はそれを「待てって、アンク！」と言いながら走っていった。
マルセイユはミーナに一言二言叱られていたが、その目だけはエーリカを見ていた。
だが、エーリカは少し楽しそうな顔をして映司の後にくっついて出て行ってしまった。

「それじゃ、マルセイユ中尉は基地を案内するので着いてきてください」
「了解した。ミーナ、オーズって強いのか？」
「・・・そうね、少なくともこの基地の中で勝てる人が居るかどうか、それくらい強いわ」
「エーリカよりも強いかも知れない奴か、これは期待できそうだ」

キングクリムゾン！

「ふぅー、仕事の後の風呂は気持ちいいなー。なぁー、アンクー」
映司は頭の上にタオルをのせて、顔を口元まで沈めてぶくぶくし始めた。

「あぁ、俺は特に何もしてないがなぁ。だが、風呂は相変わらず気持ちいい」

アンクも風呂を満喫し、両肘を少し後ろに引き淵の上に乗っけて楽な姿勢をとっている。

「なぁアンク」
「あ？」
「お前さ、元の世界に戻ろうとは考えてないの？」
「あぁ、まったくな」
「・・・そっか」

即答したアンクに、映司はがっかりしたような、安心したような表情でまたぶくぶくし始める。
とその時

ガラガラガラ！

風呂の扉を勢いよく開ける音がした。

「ここが風呂か。話には聞いていた通り贅沢そうだが、気持ちよさ

そうだ」
「ちょっとマルセイユ、風呂はいる時は服脱いでって！ていうか、今映司とアンクが入ってるんだって！外に看板あったでしょ！」
「私は全然構わないぞ、映司は私に負けず劣らず中々かっこよかったからな。それにあんな看板があると邪魔だから、私がはずしておいたぞ」

エーリカとマルセイユの声を聞いて、映司はビクッと体を強ばらせすぐに股間にタオルを巻き、ザパンと波を立てて立ち上がり口元に手を当てて叫ぶ。

「ちょ、ちょ、ちょっとマルセイユさん！俺が駄目ですって、俺が！風呂出るんで外出て待っててください！エーリカちゃん、抑えててね！」
「分かってるって！マルセイユ、明日勝負できなくなっちゃうよ！」
「何でできなくなるんだ、それより私は早く風呂を・・・」

マルセイユは、エーリカの制止を無視して階段を上ろうとするが、そこはお湯によってつるつると滑っており、そんなこと露とも知らぬマルセイユは、ツルンと一段目で盛大に滑りガンッと頭を打って目を回した。

「キュ～」
「ごめんね二人とも、今こいつ持ってくから」
「い、今の大丈夫なの？！」
「宮藤に治してもらうよー、多分すぐ起きあがるよ、こいつ。」

エーリカは、頭を打って気絶したマルセイユをズルズルと引きずって脱衣所の外まで引きずっていった。

「よし、アンク今の内に出よう！」
「あ？もう少しゆっくりさせろ」
「いいから行くぞ、アンク！また誰か来たら気まずいって！」
「知るか、んなもん」

映司はしばらくの間アンクを諭そうとしたが、逆に無理だと諭された映司は、アンクの腕をむりやり掴んで脱衣所まで引っ張っていった。
が、時すでに遅し。
そこには服を脱ぎ、風呂に入ろうとするシャーリーとルッキーニ、芳佳にリーネがそこに居た。

「・・・・・・・・・」
「ハッ」

ガラガラガラ　ピシャン！

映司はリーネ以外の誤解は簡単に解いたが、リーネが見るたび見るたび顔を真っ赤にして逃げるので、誤解を解くのに3時間はかかったとか。

サインと混乱とアフリカ（後書き）

次回に続く

サインと混乱とアフリカ２（前書き）

ヘイ！ヘイ！事件だッ！　ヘイ！事件だッ！

特になんもねーんすけどね。

そんなワケで後半

サインと混乱とアフリカ2

チュンチュンチュン
時刻は午前6時半、朝の訓練の一つである走り込みをウィッチの殆どがしている。
アンクは相変わらず、ミーナのお手伝いと称したコアメダルの情報集めで忙しい。最も、ミーナ自身は凄く助かってるとこの事。

タッタッタッタ
「ハァハァハァハァ・・・」

現在一位はマルセイユ中尉、余裕の走りを見せている。だが、最後の最後に映司は仕掛ける。

「クッ、ッセイヤー!!」
「一着、映司。二着、マルセイユ中尉」

かけ声と共に見事映司は一着。二着になったマルセイユは、映司に対する目つきが更に鋭くなった。

「何!私が二番だと・・・クッ!」

だがその後ろをエーリカは、相変わらずめんどくさそうにノロノロと走っている。それを見たマルセイユは、ころっと機嫌を変えた。

「だがエーリカ、お前には私の勝ちだ!」

朝の走り込みが終わり、みんな朝食を取る。

「もう一杯！」

「あ、はい」

マルセイユは空になった茶碗を映司に差し出し、お代わりを要求する。映司は茶碗を受け取り、木製の桶に入っている白米をしゃもじですくい茶碗に入れる。

その食べっぷりに、隣に割烹着を着てお手伝いしてる芳佳は感心していた。

「あの、扶桑の料理お好きですか？」

「あぁ、ウチの部隊にも扶桑のウィッチが居るからな。それにしても、映司が飯を作れるとは、やっぱり家庭的だな」

そう言ってまた箸を取り、ガツガツとお代わりした白米を食べ始めそれを彼女の好物である牛乳で流し込む。

牛乳の入っていたコップを、コトンと机において納豆を見る。

「でも、こいつは駄目だ」

「えー、納豆は体に良いんですよ？」

マルセイユは芳佳のアドバイスなんか気にせず、空になった茶碗を

映司に突き出す。

「もう一杯」

「あ、もうご飯無いです。凄い食べっぷりでしたからね」

「何？」

ご飯が無い事に腹を立てたマルセイユだが、真正面でノロノロとご飯を食べているエーリカを見て、ニヤリと笑う。

「また私の勝ちだ！・・・うっぷ」

そうして時は流れ午後1時、基地のウィッチーズは全員基地の外に出ていた。

「食後の運動には丁度いいな」

マルセイユは相変わらず軽口をたたき、自身のストライカーユニット『Ｂｆ１０９Ｆ－４　Ｔｒｏｐ』に魔力を集中させ、実弾が入っている機関銃を何度か試し撃ちする。ちなみにマルセイユのストライカーユニットは、既に輸送機か

らストライクウィッチーズの格納庫に搬送済みである。

「性格も見た目も優男な奴に、私が負けるものか。ミーナ、こっちは準備できたぞ！」

ミーナは無線でマルセイユからＯＫが出たので、映司にも空に出るよう促す。

「それじゃ映司君、くれぐれも手加減してください」

「映司、手加減無しで行け」

映司はミーナとアンクに真逆の事を言われたが、最初から手加減するつもりだったのでアンクの方を向く。

「いや、流石に手加減しないとまずいって。魔力で体強化してるにしても、直接あの技食らったら危険すぎるから」

「ハッ、そんなの知るか。昨日言ったろ、出し惜しみ無しだ、火力もな」

「だめよアンク君、こんな所で怪我人を出したくないわ」

「そうだよ。どっちにしろ、勝てばメダルもらえるんだから」

「ッチ、手加減しすぎて負けんなよ」

「分かってるよ」

チャリン！！ジャラジャラ・・・と音を出し、アンクは赤い右手だけにして手首を回転させ、手の中に有るタカ・クジャク・コンドルのメダルを映司に投げる。

映司は、左手に持っているオーカテドラルを腰に当ててセットし、アンクが投げたメダルを右手を右から左へ大きく凪いでキャッチす

る。

「っと、本当に出し惜しみ無しなんだな。アンク」
「ハッ、さっさと行ってこい」

それを空から見ていたマルセイユは、いきなり大量のメダルが出たことと、アンクが手だけになったのに驚く顔をするが、すぐになんてこと無い顔をしニヤッと笑う。

「手応えがあるといいんだが、まぁエーリカより強い奴は私くらいだろうな」

「それじゃ、みんな危ないからちょっと下がっててね」

芳佳とリーネは映司に声援を送る。

「映司さん、頑張って！」
「負けないで、映司さん」

エイラと眠そうな目をしたサーニャも映司に声援を送る。

「映司ー、落ちンナヨー」
「・・・気をつけてね」

エーリカとバルクホルンだけは方向性が違った声援を送る。

「映司ー、頼むから勝ってね。ほんと、勝ってね！」

「火野、あいつにだけは負けるな！あいつの性格を正す良い機会だ！」

「ハハ、それじゃ、とりあえず行ってきます」

腰にタカ・コンドルを入れ、ラストにクジャクのメダルを左手で入れ、そのまま左手でオーカテドラルを斜めに傾ける。

右腰についているオースキャナーを、右上から左下にスキャンする。

「変身！」

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ～！』

坂本は串田さんボイスに慣れないらしく、忍び笑いをした。

「クックッ・・・相変わらず面白い音声だな」

「慣れろ」

オーズはバッバッバと優雅なポーズをとり、大きく背中の羽根を広げ空へ飛ぶ。
マルセイユと同じ目線まで飛び上がり、滞空しているマルセイユに確認を取る。

「さて、それじゃ俺が落ちたら負け。マルセイユさんのストライカーユニットが、少しでも傷ついたり、弾切れになったら負け、って事でいいんですよね」
「あぁそうだ。ま、私が負ける事なんて無いだろうがな。弾切れを狙って逃げまどう、なんて真似はしないでくれよ？それにしても、かっこいい姿だな。変わる前の優男の顔を隠す『仮面』ってところか？」

マルセイユはジャキン！と機関銃を構える

「さぁ？でも俺、そんな優男なんてつもり全然無いですからね」

オーズもバッ！と両手を広げ、背中に無数の赤と金の混じった羽根、クジャクフェザーを出す。

「それじゃ、行きますよ！」
「あぁ、来い！」

オーズが左手を少し後ろに引き、右手を思い切り突き出す。それが合図となり、背中の羽根がマルセイユに向かって飛んでいく。
マルセイユはストライカーを巧みに操り、オーズから距離を取り体をひねりつつ機関銃を撃ちクジャクフェザーを次々に撃ち落として行く。
撃ち落とした側からボフン、ボフンと軽い煙が漂いオーズが視界か

ら消える。

「これでラスト！」

マルセイユは後ろに飛びつつ、羽根を全て撃ち落としたのを確認すると、オーズの姿を煙が漂う側をジッと目を懲らして探す。
だが、マルセイユはふと何を思いついたのか、海に下降しつつ今度は逆に煙に向かって距離を詰める。
その瞬間

「ハァー、ハッ！」

オーズの声がしたかと思うと、マルセイユが居た位置に火の玉が飛んでいく。
その火の玉を後ろ目にやり、マルセイユは固有魔法を使ってオーズの居る位置を特定し、そこに機関銃を撃ち込んでいく。
煙が弾の通った所だけ煙を晴らし、その弾の先にはオーズが居るのを目視した。

「当たった！」

マルセイユは勝ち誇ったように声をあげるが、聞こえた音はギギギギギィン！と弾を弾く音と、バチバチッ！と火花が散る音だった。
オーズは直前でマルセイユの位置をタカヘッドで認識し、機関銃の撃つ音を聞いてから左手に装備しているタジャスピナーを盾に見立ててガードした。
だが、音が聞こえてからガードできたのはものの１０発前後だけである。他の弾は全てもろに食らってしまった。

「っぐ！今のはちょっと不味かったかな。」
「チッ、見た目通り頑丈だな」
マルセイユは舌打ちすると、機関銃を撃ちつつオーズから距離をとる。
だがオーズは左手のタジャスピナーを盾にして弾をはじきつつ、もの凄いスピードで突っ込んで来た。

「なっ、早っ！！」
シャーリーは前に見た戦いで、自身の改造したストライカーユニットより早いタジャドルオーズを見てその早さを忘れられず、模擬戦観戦そっちのけでベランダから身を乗り出して速度を測っていた。
驚く姿の一方で、計測器とオーズを見つめる目は真剣そのものだった。

「９００！９２０！・・・１０００になったぞ！！！音速だ！凄い、凄いぞ映司！！」
「音速ってー、シャーリーが目指してた速度でしょ？」
ルッキーニは、オーズとマルセイユの戦いをはしゃぎながら見ている。

「そうだぞルッキーニ！まさか音速を超えるとは・・・それに耐えられる体も、流石映司だな！！」

「シャーリー、今は映司じゃなくてオーズだよー、オ・ー・ズ！あ、もしかして！最近シャーリー、映司意識してるー？」
「ば、バカを言うな！私が気になるのはスピードだけだ、スピード・・・だけだ・・・」

一方のマルセイユは焦っていた。
自身のストライカー最高速度である６３０／ｋｍに、こうも簡単に距離を詰められてしまったのだから。
いくらオーズから反対方向に逃げようとも、簡単に追いつかれてしまうと判断したマルセイユは、だったらと逃げるのをやめて突進してくるオーズに向かい直る。
そして、思い切りオーズの方向に向けてスピードを出しつつ、ぐんぐん上昇していく。
マルセイユはあのスピードでは、急な上昇には着いてこられまいと判断したのだ。
予想通り、オーズはスピードを止められずに自分の下を通っていく。
そこを上から撃ち落とす！・・・はずだった。

「な、何？！」

なんとオーズは、音速になったスピードをクジャクウィングで制御しつつ、難なくスピードをスッと落として真上に上昇してきた。
これは流石に予想外の展開であり、シールドを出してオーズの突進を防御しようと試みる。

オーズは左手のタジャスピナーを盾にしたままスピードを緩めず、右手で腰についているオースキャナーで、もう一度スキャンをする。

『スキャニングチャージ！』

スキャンが終わると、オーズは体に力がみなぎるのを感じていた。タジャスピナーを盾にするのを止め、クルンと空中で一回転する。その瞬間、脚が人間の脚では無くなり、得物を捕らえて離さないコンドルの脚に変形していた。

マルセイユは臆せずに、むしろ敵の盾が取れた事をチャンスと感じ、シールドを展開してる中から機関銃を放つ。
しかし、弾はむなしくキキキキィイイン！！と音をたてて、全てが弾かれてしまった。

「セイヤアァァー！！！」

オーズは必殺技『プロミネンス・ドロップ』をマルセイユに当てる。

「うおおおぉぉ！！」

マルセイユも、負けじとシールドに魔力を送り耐えようとする。
だがそれも三秒と持たずに、パリンと割れてしまった。
オーズはそのまま、猛禽類の爪に変形した脚で、マルセイユのストライカーユニットをバキン！と割る。

ドォーン！と大きな爆発が起き、下で観戦しているウィッチーズから歓声が沸く。

アンクもどこか満足げな表情である。

「ハッ、手加減しすぎだ」

オーズは、ストライカーユニットが破損したマルセイユを抱いて、スタッと滑走路に着陸した。
マルセイユを降ろすと、オーズは変身を解きマルセイユに言い放つ。

「っと。これで、俺の勝ちですよね」

マルセイユは、少し残念な顔をしたがすぐに笑顔になり

「あぁ、私の負けだ」

と負けを認め、映司にタコメダルを投げ渡す。

「・・・それは、私達の部隊が死ぬ気で勝ち取った戦利品だ。だから、どこの馬の骨とも知れん奴に渡すのは嫌だったんだが、お前なら大丈夫そうだな」
「・・・大事に使わせて貰います」

マルセイユは半壊したストライカーユニットを持ち、映司と肩を並べてみんなの元へと戻った。

映司とマルセイユとエーリカは一緒にお風呂に入っていた。
もちろんタオルを巻いてである。

「風呂はいいなぁー、固まった筋肉がほぐれる。話には聞いていたが、本当だった。」
「アフリカじゃ、水の一滴が血の一滴って言うくらい、水は貴重ですもんね」

マルセイユはリラックスして体を伸ばす。

「映司、アフリカにも行ったことあるの？」

エーリカは、映司が知った風な台詞を言ったので前の世界で旅をしたのかと考える。

「うん。前の世界で行ったアフリカと、ここのアフリカは話を聞いた限りじゃ、ネウロイが出ているって事以外変わらないみたいだからね」

映司はお湯を両手ですくい、顔のバシャとかけてこすり、フゥーと溜め息をつく。

「きっと、こんな使い方はできないんでしょうね」
「ふぅん、大変なんだな」

マルセイユは天井を見上げて、興味がなさげなエーリカに言う。

「あぁ、だがアフリカはいいぞ。うるさい上官は居ないし、怪しい連合軍上層部も殆ど関わってこない」

「じゃあ、なんでわざわざマルセイユが来るんだよー」

わざわざ部隊のエースが、表だった行動をするとマスコミがはやし立てるのをエーリカは嫌と言うほど知っている。

エーリカは、世界一のネウロイ撃墜数を誇るトップエースで、その事を記事にされたり、表彰式をするのが面倒で面倒で仕方のが無いことを知っているからだ。

「何、たまには外に出てみたくなるものさ。それに、５０１にはエーリカ・ハルトマンとオーズが居たからな！」

三日目はネウロイも出ず、何事も無く過ぎ去った。

バルクホルンは、相変わらずマルセイユといがみ合っていた。

マルセイユは輸送機に乗る直前に、映司に自身のサインの入った写

真を渡してくれた。

「みんなには内緒な。映司、今度はお前がアフリカに来いよ」

こうして、ハンナ・ユスティーナ・マルセイユ中尉は輸送機と共にアフリカへ帰っていった。

サインと混乱とアフリカ２（後書き）

芳佳「ところで、シールドを簡単に破った上にストライカーまで半壊させるなんて、本当に手加減したんですか？」

映司「うん、それに関してはしっかり手加減したよ。えーっと・・・１／１０くらい？」

アンク「フッ、お前が本気だした時の威力と比べたら１／３０くらいだろ」

芳佳「えぇー、そんなに威力制限してたんですか？！」

映司「うん。前のタトバキックとかはネウロイ相手だったから全然セーブしないけど、今回は本気出すとストライカー壊すだけにとどまらなくなっちゃうし、今回の目的は勝つだけだったし」

マルセイユ「そんなに手加減されてたのか・・・・・・」

映司「あ、でもマルセイユさん十分に強かったと思いますよ？正直、必殺技出さなくてもクジャクフェザーだけで倒せると思ってたし。」

アンク「映司、相変わらずお前は甘いなぁ」

マルセイユ「クッ、随分なめてくれるじゃないか、今度は勝ってやる！」

映司「い、いや、今度は無い方が望ましいけど・・・」

マルセイユ「駄目だ！私がお前に勝つまでまたお前に会いに来るぞ！」

映司「あ、でも今度は俺がそっちに行きたいな。ネウロイが世界中に出てるって聞くし、いつまでもここに居座るワケにはいかないし。旅もしたいし。」

マルセイユ「何、本当か！映司だったらいつでも歓迎するぞ！」

アンク「おい、俺は」

マルセイユ「アンクは・・・・・・」

アンク「おい！」

説明回　～オーズ～（前書き）

オーズは知ってるけどストライクウィッチーズは知らない、その逆、またはどっちもしらねーって人の為の内容となっております。

ネタバレが多量に含まれております、ご注意。
なお、この作中にてどんどんメダルを手に入れる度、ここに追加していきます。

ｗｉｋｉ参照

説明回　～オーズ～

――――――――――［　オーズの世界　］――――――――――

『現在、オーズの持っているコアは』

【タカ】
【クジャク】
【コンドル】

【クワガタ】
【カマキリ】
【バッタ】

【ライオン】
【トラ】

【タコ】

【ゴリラ】

『登場人物』

「火野　映司」

本作の主人公、性格等は本編そのままで行きます。故に恋愛関係が発展するのは難しい
映司本人について詳しい事はこの小説でも触れておりますが、詳しい事を要約すると

旅が大好きで世界中旅してました。旅の途中でとある国の内紛に巻き込まれて、親しくなった村の女の子を助けられませんでした。それからと言うものの、映司はずっと乾いたまんま。欲望の欠片もありません。時には自らの命を失うと分かっていても手を伸ばしに行きます。
そんな彼は、ひょんな事からメダルの戦士オーズに変身して、欲望の怪物ヤミーやグリードと戦っていきます。
本編の最終回では最後の戦いの後、自分が本当に欲しかったものに気づき、旅を再開しましたとさ。

と、本来であれば上記のような結末になるのですが、こちらの世界に来てからはオーズの世界より少し潤っただけ。まだ乾いてる部分

がいっぱいあります。
これから映司がどうなっていくのか楽しみに待っててね。

「アンク」

欲望の怪物グリード

その体は、コアメダルを中心にセルメダルで覆い作られた、無機物生命体。
色を識別もできず、食べ物は味がせず、温度を感じることもできない。

彼はそのグリードの一人で、鳥系のコアメダルから生まれました。
グリード1の知略家で、オーズに勝ち目が無いと見た彼はオーズの味方になりました。
しかし、オーズはメダルの力を制御しきれず暴走。オーズは自らと共に、全てのグリードを封印しました。アンクはオーズの封印から逃れようとした結果、現代になって右腕だけが復活。

ウヴァさんのヤミーの所為で、重傷を負った刑事さんの体に残った右手だけ憑依して映司と共に戦ったんだ。
アンクはグリード、欲望を求める怪物なんだ。絶対に満足できるはずがないながらも、最後の最後に映司達と過ごした日々に満足して消えていったんだ。

さて、この物語の冒頭に描かれていた通り、メダルが唯一粉々になるのを免れ、意識を内包したタカメダルが真っ二つになってしまい、ブラックホールに吸い込まれてウィッチーズの世界に来た。
自身のメダルが真っ二つになったにも関わらず、ウィッチーズの世界に自我を持って、コア無しセルメダルのみで右腕だけ復活していた。

右腕だけで、エーリカの部屋に忍び込み自身のコアメダル、クジャク・コンドルを盗み出し、映司の持ってたタカと会わせて3枚のコアメダルと数十枚のセルメダルでなんとか人間体を作り出す事に成功。

メダルだけの体にも関わらず、アンクはアイスやお風呂を楽しんでいる。
つまり、人の体を借りずに新しい『命』を手に入れたんだ。

その謎は後々解明されます。

アンクは普段、ミーナのお手伝いしながら、ネウロイに取り込まれたコアメダルの情報収集してます。
ようやく自分自身の命を手に入れたので、前の世界に戻るつもりはさらっさらありません、この世界で生き続けるみたいです。
でも、ＩＰｈｏｎ　の電池が切れたから戻ろうか迷ってるらしい。

『ライドベンダー』

バイクにも自販機にもなる機械。

バイク時のスペックは
重量：２６０ｋｇ
最高時速：６１０ｋｍ
最高出力：３９５ｋｗ

セルメダルがエネルギー源、セルメダルが無いと全然使い物になりません。
主に移動用として使います。

自販機になると、セルメダルを投入する事によってカンドロイドがでてきます。多分無限に。

『ミルク缶』

伊達が背負ってたあれ。
中身は大量のセルメダルと、タコカンが発見されています。

まだ何かあるかも．．．

『カンドロイド』

普段は飲料の缶詰の形をしているが、プルタブを開けるとそれぞれ固有の力を使ってサポートしてくれる頼もしい味方。本編劇中でも、何度かピンチを救ってくれたぞ。

しかし、使うためには自販機の形をしたライドベンダーにセルメダルを投入しなければいけないため、基本セルメダルがなくては使えない。一回外に出ちゃえば、壊れるかセルメダルの力を失うまでずーっと動いてくれる。

今あるカンドロイドは三種類だけ。

【タカカン】物を咥えたり、ネウロイの追跡等々。バッタカンと併用する事が多いです。

【バッタカン】ビデオカメラ・通信機器を持った大きいバッタロボ。

【タコカン】水陸両用、脚を回転させて空まで飛べる。お互いの脚を絡ませたりすることで柔軟なネットを作ったりすることも。

タカカンとバッタカンはサーニャの夜間哨戒のお供になっています。

タコカンはライドベンダー自販機のボタンを決まった順番に押すと、めっちゃくちゃいっぱい出てきます。

これでオーズ組は終わり。

次回はストライクウィッチーズ組の紹介です。

説明回　～オーズ～（後書き）

次回がめんどくせーくらいキャラがいる。

説明回　～ストライクウィッチーズ～（前書き）

どっか間違ってたり、足りねーよってとこがあったら、訂正するんで遠慮無く言ってください

ところで、ｗｉｋｉにネウロイが出現したのが１９３９年って書いてあるけど、１９３７年に戦闘があったって、これどっちなの・・・

ｗｉｋｉ参照

説明回　～ストライクウィッチーズ～

――――――――――［　ストライクウィッチーズの世界　］――――――――――

『ネウロイ』

世界中に突如として現れた正体不明の存在、目的も未だに解明されていない。
外形は金属を取り込んで使い、航空機や陸上兵器の姿をしている。
中にはミサイルを取り込んで、自身がミサイルとなったネウロイも確認されている。

ネウロイは、瘴気と呼ばれる生物に有毒なガスを纏っているため、ネウロイに征服された土地は生物が一切住めない場所と化す。
その上、ネウロイ自体の戦闘能力は高く、レーザー一つで艦隊一つを沈めるほど。それをバンバン撃ってくるから堪ったもんじゃない。

ネウロイを倒すには、コアと呼ばれる中核部分を破壊すればいいが、自己再生能力を持ち併せており、コアもどこにあるのか不明な為、爆発に巻き込むなり、コアを一発で打ち抜くなりしないと倒すのが厄介。

しかし、映司達がこちらの世界に来る少し前から、ネウロイに亜種が出始めた。

コアメダルの能力を吸収し、コアを壊すと中からコアメダルが出てくるネウロイの出現である。
ミーネとアンクの手回しによって、亜種の存在はウィッチのみに留められている・・・といいね。

『ストライカーユニット』

芳佳の父、宮藤一郎博士が開発した魔力を動力とするエンジンを搭載し、航空タイプ・陸戦タイプ等がある。
一部のウィッチが訓練を積まねばできない、飛行能力や身体能力強化、防御魔法などを訓練無しに使えるようにしたが、それらを完璧に自分の物とする為にははやり訓練が必要である。

ストライカーユニットは、分解することで小スペースに収納も可能だったりする。

『第５０１戦闘航空団　ＳＴＲＩＫＥ　ＷＩＴＣＨＥＳ』
以下メンバー

「宮藤　芳佳」

倒れてる映司を発見した一人。
原作の主人公、のわりには今作で出番が少ないとお嘆きである。

固有魔法は【治癒能力】
その力はすさまじく、大きな外傷を傷跡無く治すことができるが、当初は魔力の制御をうまくできず、人一人の怪我を治すだけ精一杯だった。これからの活躍に期待だぞ。

ストライカー・ユニットの開発者である、宮藤一郎博士がお父さん。
自身の誕生日にお父さんが死んだと軍から通達があり、それきり戦争とネウロイが大っ嫌いに。

魔力の潜在能力の高さを見込まれて、坂本から直々にスカウトが来たものの、最初は実家の診療所を継ぐ為に断っていたが、父親の消息を知る為に結局渡英。
その際なんやかんやあって、ストライクウィッチーズに入隊した。

持ち前の優しさから、映司と気が合いすぐに仲良くなった。
映司とアンクをお兄ちゃんの様に慕っているぞ。

「坂本　美緒」

扶桑で知らない人はいないスーパーエース

固有魔法は右目の【魔眼】、普段は眼帯をしている。
ネウロイのコアを見分けたり、遠くの物体を目視できたりと便利。

豪快な人で、細かいことは気にしない。
よく笑います。

ウィッチの中でも珍しく刀を主要武器とする。
実力も伴って、ネウロイを一刀両断する姿は『大空のサムライ』と言われている。

訓練で人を育てるのが大好き。

幼少期から魔女としての資質を持ち、宮藤一郎博士と共にストライカーユニットの開発に深く関わってたらしい。
それ故に芳佳の事をとても大事な存在に思っている。

「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ」

坂本と同期、ＢＢＡっつったやつちょっとこっちこい。

固有魔法は【超感覚】
遠くの声や気配を知ることができ、それを立体的に空間として把握することも可能。
坂本と手を繋ぎ、魔眼と併用する事ができその力は凄い・・・らしい。

小さい頃は歌が大の得意で歌手を目指してたらしい、しかしネウロ

イとの戦争の為断念。
ウィッチになる道を選んだ。

性格は穏やかで誰にも慕われる良い人。しかし部下を危険に曝す理不尽な命令には従わず、真っ向から立ち向かうという芯の強い場面も見せる。

映司とアンクを別世界から来た存在として、初めこそは半信半疑だったものの、映司と芳佳の言動が重なり二人を信用しきる。
アンクにデスクワークを手伝って貰いつつ、コアメダルの情報を上層部に漏れるのをなんとか阻止しようとしている。

味覚が一般のそれとは別物、同じく味覚がおかしいアンクと意気投合する事がしばしば。

「リネット・ビショップ」

通称はリーネ、リーネちゃん等。
倒れてる映司を心配してくれた心優しい女の子。

固有魔法は【射撃弾道安定】
スコープ無しでも、約１ｋｍ先の標的を狙撃できる。

芳佳と同期に配属され、歳も近くとっても仲良し。
裁縫・編み物や、料理が得意で家庭的。

映司と一緒にご飯を作るときが、とても楽しいひととき。
が、反面芳佳が映司になついてしまい、少し寂しい思いをしている。

「ペリーヌ・クロステルマン」

貴族の子女でプライドが高く、自分より能力が劣る者にきつく当たる。所謂お嬢様。

・・・が、家族と故郷をネウロイとの戦争で亡くした悲しい過去を持つ。
映司にその話をしたときは、映司が一緒に悲しんでくれたとか。

固有魔法は【雷撃（トネール）】
広範囲、または一点に集中して雷撃を放つ、攻撃型の固有魔法。若干クワガタさんとかぶった感がしないでもない。

故国ガリアをいち早く取り戻すために、日々ネウロイとの戦闘に明け暮れている。
前に配属されていた部隊では、ネウロイとの戦闘が中々無かったため周囲にきつく当たっていたらしい。

映司の話を初めて聞いたときは、それはそれは可哀想な冷めた目で見つめていた。
でも、映司に庇って貰った時にそれまでの映司を見直し、他人に厳しく接する態度も改め始めた。

「エーリカ・ハルトマン」

世界中のウィッチーズの中でも、トップの撃墜数を誇るエース中のエース。

その理由は腕前はもちろんのこと、バルクホルンに戦場で五月蠅く指示されているからしい。

固有魔法は【疾風（シュトゥルム）】

劇中では見ることが少なかった、大気を操る事のできる攻撃型の固有魔法。

シュトゥルムはドイツ語でいうところの、「嵐（ｓｔｕｒｍ）」である。

普段の生活はずぼらで部屋がもんの凄く散らかっており、相部屋のバルクホルンに早く片付けろといつも口うるさく言われている。それでなくても、普段から規律を重視するバルクホルンには口うるさく言われているのだが。

その上トップエースであるにも関わらず、格式ばった典礼主義を嫌い上官に反抗する事も多く、何度も自室禁固を受けている。

映司の戦いをかっこよく思っており、見た目も性格も好みでよく映司に引っ付く。

周囲にはあまり知られていないが、サーニャと仲がとてもよく長時

間話し込むこともある。
ドラマＣＤ聞いてね。

「ゲルトルート・バルクホルン」

ロンドンに最近意識を取り戻した妹が入院している。お姉ちゃん。

固有魔法は【超身体強化】
怪力である。
その長所を生かすために訓練を怠らず、威力の高い武装を多く使いこなしている。

故郷と妹・クリスを守れなかった事を悔やんでおり、それを戦いの原動力とし、時に自らの命を危険に晒す行動をとったりする。

本編では芳佳の真っ直ぐな思いに打たれ、ミーナの「私たちは家族でしょう」という言葉に本来の自分を取り戻す。
が、今作ではまだまだ危険な所があり、マルセイユと会ったことで更にそれが加速しそうな勢いが・・・

アンクとエーリカを訓練に連れて行くのが日課。
無論アンクには逃げられている。

「フランチェスカ・ルッキーニ」

天真爛漫な女の子、部隊の最年少で１２歳。
映司と芳佳を残念賞。

固有魔法は【光熱攻撃／多重シールド】
自分を守るシールドを幾重にも張り巡らせ、頂点が光熱を持つ魔法。
頂点と対象を接触させると、簡単にえぐることができる。と、防御魔法としても攻撃魔法としても優秀である。

胸を触りそれで他人を判断する癖があり、部隊１の巨乳のシャーリーになついている。
芳佳と映司には性格でウマが会い、仲良くご飯を食べたりする光景も見られる。

基本めんどくさがりでエーリカ以上に訓練をさぼり、昼寝ばっかりしている。
歳が歳だから仕方ないよね。

アンクとペリーヌをからかうのが一つの楽しみ。
が、アンクには反撃されるので、最近ちょっかいを出しづらい。

「シャーロット・Ｅ・イェーガー」

基本マイペースで楽観的。

固有魔法は【超加速】
特に加筆すること無いシンプルな能力。

メカ好きのスピード狂で、ウィッチに入隊する前は魔導エンジンを搭載した改造バイクで、時速２８６．９ｋｍを突破した記録を持つ。更なるスピードを求める為に、ストライクウィッチーズに入隊。その後もストライカーを独自に改造し、目標の飛行速度１０００ｋｍを掲げ今日も空を飛ぶ。

色物なメカの上、スピードがとても速いライドベンダーをどう改造してやろうかと目論んでいるが、アンクから厳しく改造するなと言われ、改造しようにも持ち前の道具では分解できない為断念している。
が諦めきれず、魔導エンジンを取り付ければもっと早くなれるとアンクの説得に試みるが失敗に終わった。

映司のその何事にも怯まない精神力に底なしの優しさと、タジャドルオーズのスピードに心惹かれた。
下着だけでバッタリあっても、映司は下着に耐性があるため効果が薄いので、映司をどう口説き落とそうかが最近の悩み。

「サーニャ・Ｖ・リトヴャク」
本名が長い。
物静か。

固有魔法は【全方位広域探査】

名前通りとても便利な魔導針レーダー。
その特性を生かした夜間哨戒が主な任務で、朝昼は眠そうにしているがしっかり起きて訓練等をこなす頑張り屋。
夜中でもタカカンが一緒に飛んでくれて、寂しさが無くなり少しだけ楽しく任務をこなしている。

ネウロイとの戦争で、故郷が襲われてしまい家族とは生き別れに。
家族については生死不明だったが、誕生日に聞こえたピアノの音をお父様が昔自分の為に弾いてくれたピアノだと核心し、家族がどこかで生きてる事を信じて今日も戦う。
その時にきっと家族に会えると映司に諭され、ウィッチーズとアンク&映司に誕生日を祝ってもらい、それからというもの映司にデレデレである。

タカカンとバッタカンが新しいお友達。

「エイラ・イルマタル・ユーティライネン」

共通語が下手なのか、棒読みでカタカナが多い子。
字体にしたとき分かり易くていいです。

固有魔法は【未来予知】
チートである。
未来予知なのでネウロイの弾が来る場所を察知でき、事前に回避行動が取れるため一度も実戦でシールドを貼った事が無い事を自慢している。

占いが趣味で、タロットカードを用いて部隊の仲間達の運勢を鑑定するが、大体真逆の事が起きる。ある意味大当たり。

つかみ所が無い人物で、茶目っ気が多く暗いことは苦手。
映司の昔の心の闇に気づき、それを聞き出したが正直重かったので黙りしてしまった。

サーニャに友情で留まらない感情を持っているが、それ以上に発展しない。
友達以上恋人未満。

アンクと共に突っ込み役に回るのが多い。

説明回　～ストライクウィッチーズ～（後書き）

1と2をミックスした感じなので、成長している人物がいれば、まだ始まったばっかりの人物もいる。

これからの展開にこうご期待

スオムスと奇襲と守るべきモノ（前書き）

元々旅が好きな映司。
いつまでもストライクウィッチーズ基地にこもりっぱなしってのもあれなんで、ついに長期出張になります。

イテラー

シャーリーと映司の絡み期待してた人ごめんね、でもそのうちやるからね！

余談だけど、織田信長が開いた幕府の延長線上が、ストライクウィッチーズの扶桑らしいですね・・・・・ノブ君。

スオムスと奇襲と守るべきモノ

「５１、５２、５３・・・もう無理です・・・」

ドサァ

「もう音をあげるとは、それでもオーズに変身する者か！」

映司と坂本は、朝の日課である訓練をしていた。
映司は基礎筋力をつけるために腕立てをやっていたが、連日の訓練とネウロイとの戦いが度重なり日々の疲れが出てき始めていた。
ましてやウィッチの様に魔力が無いので身体強化なんて真似もできず、飛行訓練など一部の訓練を除き、他の基礎訓練をウィッチーズと同じ量をこなそうとしているのだ。
生身の映司にがたが来て当然である。

「コンボを使うだけでも疲れるんですよ・・・、最近セルメダルの量をアンクが気に出して、バイクがあんまり使えないからタトバで行こうにも行けないですし」
「ふむ、確かに最近映司はネウロイと戦いっぱなしだな。コアメダルを出すネウロイは、マルセイユ中尉が来てからさっぱりこなくなってしまったしな。そのセルメダルを増やす方法は、ヤミーとやらを生み出すしかないのか？」
映司は地べたに倒れ伏しながら、なんとか考えを巡らす。

と、映司はある事に気づいた。

「いや、別の方法でできる・・・と思います」
「何、それは本当か！」
「あ、はい。でも、アンクがやってるところ見たこと無いし、そもそも何が起こるかわかりませんから、やめた方がいいと思いますけど」

映司の考えは、ウヴァがせこせことヤミー金融で集めていた、クズヤミーを使って一人から一枚セルメダルを生み出す方法である。
しかし、前のようにクズヤミーが暴走してしまい、周囲に危険を及ぼすかもしれない。
それに、クズヤミーはそこそこ耐久度があり、銃だけで倒せるかどうかの不安もあるからである。

「ふむ、そうか。まぁまだミルク缶の中にいっぱいあるから、早々無くなる事はないだろう。ハーッハッハッハ」
「無くなったら無くなったで困りますけどね。それに、あのセルメダル俺のじゃないんです。こっちの世界に来てるの俺とアンクだけなんで、使っても問題は無いと思いますけど・・・」

パーッパラパッパー・・・

「フム、みんな起きてくる時間だな。私たちも戻るか」
「お疲れ様でした・・・あ、俺風呂入ってからにしますね」

映司は汗でべとべとになった服をつまんで、ぱさぱさと仰いで基地へと戻る。

「そうか。それじゃあ私は先に食堂に行ってるぞ、あんまり汗もかいてないしな」

坂本はチャキンと真剣を鞘に収めると、映司の隣に立って基地へと歩いた。

「・・・来週そちらに向かわせます。それじゃ」

ミーナは受話器をガチャンと置き振り向く。

「アンク君、亜種のネウロイが出たとウィッチから情報があったわ。四足歩行をして、ビームは撃って来ない代わりにものすごい力で、駐屯地を丸々破壊したそうよ。魔力を込めた弾も効かなかったみたい」

アンクはミーナから報告を聞き、書類が整った机の上に座り伏せていた顔をミーナに向ける。口に入れていた、映司に作らせたアイスキャンデーをシャリとかみ砕き飲み込む

「本当か！それで、どこに出た？」

ミーナは壁に貼ってある世界地図の基地を指差し、そこからススッと上に持って行き北東をさす。

「場所は・・・北の国、スオムスよ」

「・・・という事で来週、映司君とアンク君、宮藤さんにスオムスに向かってもらいます。何か質問は？」

「芳佳のご飯が食べられなくなるのー？やーだー」

「我慢しろルッキーニ、ほんの少しの間だ」

みんな朝ご飯をすまし、ミーナからブリーフィングルームに呼び出されていた。

映司は首をかしげながらミーナに聞く。

「あの、俺とアンクだけ行けばいいんじゃないんですか？」
最もな質問である。アンクを後ろに乗っけたり、腕だけにして連れて行ったりとやりようはある。
「前にマルセイユ中尉が来たように、何かしら表向きな用件が無くては怪しまれます。ですから、宮藤さんを治療魔法が使えるウィッチの一時的な派遣として送り出します。これには上層部も戦力上昇の理由で納得しました」
「なるほど・・・」
映司は納得した。
今度は芳佳が手を挙げる。
「あの、移動手段は？」
「ここからバルトラントまで、是非とも宮藤さんにお礼をしたいと申し出た戦艦赤城が。そこから先は、スオムスのウィッチーズの護衛付き輸送航空機で向かってもらいます。」
赤城と名を聞いて、芳佳は嬉しそうに照れ笑いした。
「エヘヘ」
「芳佳ちゃん、初めてストライカー穿いて空飛んだの、赤城が襲撃された時だもんね」
「うん。でも私は特に何もやってないのに、そんなお礼だなんて・・・」
そんな芳佳に、腕組みをしたバルクホルンから厳しい言葉が飛んでくる。

「ミーナ、私は反対だ。宮藤は訓練を積んだとはいえ、まだまだ新人だぞ。スオムスは極寒の地だ、その上ネウロイとの戦闘が激しい地域。火野とアンクだけじゃ駄目なのか？」

そこにいつも通りに、だるそうに机に突っ伏したエーリカが心配そうに聞く。

「トゥルーデ、まだクリスの事引きずってるの？」

バルクホルンは眉をひそめ難しい顔をした。
まだクリスの事が忘れられず、手の届かない場所へクリスと重なる芳佳を送り出すのは私情での反対だった。
ミーナとエーリカはバルクホルンの境遇を知っていたので、上官のミーナでもただの『命令』で済ます事はできなかった。

「バルクホルン大尉、申し訳ないけどもう軍に書類を提出してしまったの。取りやめはできないわ・・・」
「・・・そうか」

これで今日は解散、みんないつもの訓練や昼寝やらに戻っていった。

映司はまだバルクホルンの事を気にかけ、坂本に簡単な提案をする。

「あの、素人の俺が言うのもなんですけど、編隊訓練でバルクホルンさんと芳佳ちゃん組ませてみたらどうですか？」

坂本はうーむと、手をあごに当てて考える。

確かに、バルクホルンは最近になってクリスの意識が戻ったばかりで、早く故国を取り戻そうと躍起になってる部分がある。

そこで、バルクホルンがクリスと同じくらいの歳、同じくらいの背格好の芳佳と組ませれば何か科学反応が起きるとの提案。

バルクホルンを吹っ切らせて、いつもの冷静さを取り戻らせたい坂本はその案を承諾した。ミーナも同様の理由で実行に移した。

「宮藤、遅れているぞ！」

「はい！」

「宮藤、その軌道だと避けられないぞ！」

「すいません！」

訓練は中々順調に進み、二人の息もあって来た頃事件は起きた。

今度は坂本とペリーヌを加えての二機編隊二つ、四人で飛ぶ編成シ

ユバルムで飛んでいる最中だった。

ウゥ～ウゥ～

「警報、敵襲か！位置は・・・」

バルクホルンはネウロイの位置・高度を確認すると、編隊を飛び出て一人先にネウロイへ突っ込んで行った。

急いでその後をくっついて飛んでいく芳佳だが、ネウロイが目の前に、後ろには芳佳が居ることで冷静さを欠いていた。

「止まれ、バルクホルン大尉！前に出すぎだ！」

坂本の制止も虚しく、バルクホルンは一人ネウロイに攻撃を仕掛けようとする。

が、直前に気づく。

そのネウロイが今までのネウロイとは違う、亜種のネウロイだと。

そのネウロイは、後半身が戦闘機だがその翼に鎌が有り、前半身には虫の複眼が複数くっついていた。

通常のネウロイではないと、亜種と断言するには十分だった。

「今度こそ、宮藤は私が守る・・・！」

バルクホルンは両手に持った機関銃を、ダダダッ！と撃ち表面を削っていく。

ビームは緑色の形をしているものの、威力は通常のネウロイと変わらないのでシールドで簡単に防げる。

「・・・倒せる！」

自分の直感を信じ、バルクホルンは持ち前の筋力と魔法を生かした特攻をしかけようと、シールドを貼りつつ前に出た。

が、ネウロイが鎌を思い切り振り、その先から緑色の大きいビームが出てから意識が飛んだ。

薄れゆく意識の中、自分を抱きしめてくれたバイクに乗ったオーズと、特大のシールドを貼ってくれた芳佳だけは覚えていた。

「あ、起きました？これ、芳佳ちゃんが作ったおかゆです。傷が治って安定してきたから、そろそろ目が覚めるかなって」

映司はベッドの横の机に、コトンとおかゆの入った木のお茶碗とスプーンを置いた。

「私はまた周りに迷惑をかけていたのか・・・ネウロイは？！」

「倒しました。これ、メダルです」

映司は薄緑のメダルをつまんで、バルクホルンに見せる。

「そうか、宮藤は無事か？」
「はい、今はおかゆ作って眠っちゃってます。もう夜中ですし」
「夜中か、悪いな。お前に迷惑までかけて・・・」

そんなバルクホルンを、映司はまるで自分を見ているように感じた。
映司は自分の右手を見ながら、握ってそっと開く。
（手の届く所に、大事な人が居たら誰だってそうするもんな。俺もあの時、手を伸ばせる力があったら・・・だからこそ・・・！）

「大丈夫ですよ、バルクホルンさん」
「！そういえば火野、お前も・・・」

バルクホルンは前の休暇に映司から、何故戦争が嫌いなのか、何故戦っているのか。
それを聞いたのを、今の映司を見てハッと思い出した。

「バルクホルンさんの事情は前に聞きました。だから、遠くに行く芳佳ちゃんが大切な人だから、心配するのも分かります。」
「そうだ、だからまたあんなことにならないためにも・・・！」

映司はやっぱりと心の中で確信した。
どこか似てると思ったのは、一度大切なものを失った悲しみ。
しかし、境遇は似てるものの違う部分も有るもので、バルクホルンの場合はやっと取り戻した幸せ、それを失うのが怖いのだ。
今までに多くの人と接した映司は、すぐにそれを理解した。

「・・・だから、だと思うんです。いつか自分の手が届かない所に大切な人が行っても、せめて自分にできる範囲で」

一度区切って映司は両手を大きく広げる。

「俺は・・・これくらい。ここまでなら手が届くから、何かあっても何とかできるし」
「・・・そうか、これくらいか」
そう言ってバルクホルンも、大きく両手を広げた。
それを見て、映司は少し微笑む。

「そうです。もしも大切な人がこの手が届かないところに行っても、信じて帰りを待ってあげるんです。この手が届く範囲でちゃんと帰りを待ってあげるのも、きっと大切な事だと思うんです。それに、せっかく周りに助けてくれる仲間がいるんですから、自分から手を伸ばしてみるのも一つの手だと思います。」
「そうか、この手が届く範囲か・・・」
バルクホルンは右手を胸に当て、ベッドの上で大きく深呼吸をした。

「ありがとう火野。なんだか、気分がすっきりした。帰ってこられる場所を手が届く範囲で守って、信じて帰りを待つのも一つの手・・・か。お前には色々と助けてもらってばかりだな」
バルクホルンは映司に向かって、フッと笑ってお礼を言う。
映司はいつもの調子で、だがどこか嬉しそうにバルクホルンから目をそらした。

「いえ、俺は何も。ただ、芳佳ちゃんが頑張ってくれたからこうして丸く収まったんですし。お礼なら芳佳ちゃんにも」
「・・・わかってる」
「あと、心の支えになってるクリスちゃんにも」
「あぁ、わかってる」

（そうか、仲間・・・か）

バルクホルンはお茶碗とスプーンを手に取り、おかゆを食べた。

梅干しと卵が入った温かいおかゆは

とっても

美味しかった。

スオムスと奇襲と守るべきモノ（後書き）

戦闘シーンカット、次回に持ち越しです。

スオムスと奇襲と守るべきモノ２（前書き）

今回は少し長いお話に、書きたい事が結構あるんすよ。
でも更新ペースは速め、みんな妄想ふくらまして待っててね！

「準備できました！」
「俺と、アンクもです」

映司はミルク缶を担ぎ、芳佳は大きなボストンバッグを持ってミーナの部屋に集まった。
ミーナはそれを確認するとこくりと頷き、横に立っていた坂本がドアをがちゃりと開ける。

「どうぞ」

坂本がドアを開けると、軍服を見事に着こなした白髪交じりの初老の男性が入ってきた。
その男は芳佳を一目見るなり、両手をがっしりと掴んで感激の意を表した。

「宮藤さん、お会いしたかった」
「え、えぇ？あの？」
「宮藤、こちらは赤城の杉田艦長だ」
「杉田です。赤城を代表して、今回お礼をさせて頂ける機会があった事、とても嬉しく思います。あの時は宮藤さんのおかげで、被害も最小に食い止められて、皆とても感謝しております」

戦艦赤城の艦長の杉田は、前に芳佳が初めてながらも出撃してくれたおかげで、戦艦・多くの人員が助かった旨を芳佳にとても感謝しており、それは杉田だけに非ず赤城の船員みんなが喜んで今回の提案に乗ってくれたのだった。
芳佳は困ったように笑い謙遜する。

「いえ、私は何も。あの時は坂本さんと他の人たちが・・・」
「いや、それは違うぞ宮藤。お前が出撃してくれたおかげで多くの人命が助かったんだ、誇りに思っていいぞ」

芳佳は坂本にまで褒められ、エヘヘと笑って嬉しそうにした。
杉田は手をほどき、映司に向き右手をさしのべて握手を求める。
映司はそれに応え、軽くお辞儀をした後ミルク缶を床にガシャンと置き、握手をする。

「貴方のお話はミーナ中佐から聞いております。なんでもウィッチ以上の力を持ち、その癖階級を持たず、ネウロイを倒してまわる旅人だとか。我々の耳にはまったく入ってきませんでしたが、そのお力はこの基地の誰もが勝てないほどと」
「い、いえ、俺はそんなに強くないですよ。」

映司はオーズの力が過大評価されすぎた感がしたので、芳佳と似たように遠慮する。
実際、バイクに乗ってウィッチと戦うときは、相手が小回りが効き遠距離攻撃ができるので、空に飛ばれたら対策が全然無いのだ。

「そんなに謙遜しなくていいんですよ、映司君。艦長、彼の力は本当にお強いです。私もこの目で確かめるまで半信半疑でしたが、ネウロイの撃墜数はここ1ヶ月足らずで25を超えるペースです」
「なんと、一ヶ月で25も・・・！それはそれは、とても頼もしいじゃないですか。きっと、スオムスの方々も喜んで受け入れてくれる事でしょう」

杉田は映司のネウロイ撃墜数に驚き、歳相応の顔のしわをほころばせた。

ミーナは坂本と目配せをし、厳しい顔をして杉田に言う。

「それと艦長、今回の件ですが」

「分かっています。火野　映司さんの事は、上の耳には届かせぬ様手はずをしています。まして、我々の船に内通者もおりませぬ故、ご安心してください。皆、事情を察してくれております」

映司は杉田と会ってものの数分だが、この人物に安心感持てる人物だと中々好感触だった。

「艦長さん、バルトラントまでよろしくお願いします」

映司はもう一度艦長に頭を下げて、これからの航海に得体の知れない自分を乗っけてくれた事を感謝した。

「私こそ、スオムスは常に人員が不足してる上にネウロイとの激戦区との事、ネウロイと戦ってくれる火野さんと宮藤さんの一時的なとはいえ、派遣を断るウィッチはいないでしょう。」

艦長は頭を下げた映司に対して、ビシッと敬礼をとった。

「貴方がたの戦果を期待しています」

杉田は敬礼と解くと、すでに出航準備を進めている赤城に二人を誘う。

「それではお二人とも、赤城へ案内します」

「航海を無事に終える事を祈っています。そして二人とも」

ミーナは大きく息を吸ってはき出す。

「何が何でも生きて帰ってくるのよ」
「「はい！」」

坂本は自分の言いたい事は大体ミーナが言ってくれたので

「私もミーナと同じだ、絶対に生きて帰ってこい。スオムスでの活躍に期待しているぞ」

とだけ付け加えて二人を見送った。

「それでは、失礼します」
「それじゃ、行ってきます」
「い、行ってきます！」

映司と芳佳はそれぞれ別れの挨拶をすまし、杉田の後に続いて部屋を出て行く。

すでにストライカーとライドベンダーも船に運び終わり、残すは出航だけとなった。
映司と芳佳はそれぞれ隣の部屋を借り、部屋に荷物を置いて甲板に出る。
芳佳は、空を飛び誰もが憧れの的である『ウィッチ』であり、赤城の恩人なので周りには数人の人だかりができていた。
映司はその様子を見て、楽しそうだなぁと笑い甲板から基地を見渡す。

（しばらくの間ここからお別れか、旅は慣れてるけどこんなに寂しい思いしたの初めてかもなぁ・・・あ、ベランダからルッキーニちゃんとシャーリーさんが手を振ってくれてる）

映司も笑って手を振り返した。

「えーじー！絶対帰ってこいよー！」

「芳佳と映司のご飯美味しいからー、だからー、早く戻ってきてねー！」

「ハハ・・・早くネウロイを倒して、この戦争終わらせないとな。」

「映司ー！」

と、映司は下から声が聞こえたので、そちらを見やると眠そうな目をしたサーニャと、隣にエイラが居た。

「映司ー！メダル取り返してサッサと戻ってコイヨー。それと、スオムスは絶対に守りキレよー、ネウロイ倒せなかったらタダじゃおかねーカラナー！」

「映司さん、頑張って」

「スオムスはエイラちゃんの故郷だもね・・・分かってる、絶対にネウロイに侵略させないよ。サーニャちゃんとはバッタカンがあるから、通話楽しみにしてるよー！」

「はい、私も楽しみに待ってます。映司さん、忘れないでくださいね」

二人は芳佳に行ってらっしゃいを言おうということで、映司と手を振って別れる

映司は一度自室に戻り、ミルク缶を開ける。

「アンク、もう出てきていいぞ」

「おい、あんまり揺らすな！置くときはもっと慎重に置け！」

中から右手だけとなったアンクが出てくる、アンクは出て早々映司のあごを掴んで文句をたれる。映司はアンクの腕を掴んで引き離した。

「悪いって、でもああでもしなくちゃ怪しまれるでしょ。アンクの事、みんなになんて説明すればいいのかさっぱりだし。あ、クスクシエみたいにガラの悪い」

「ハッ。もう少し時間に余裕があれば、ミーナに俺の性格を偽っておくよう考えたんだがなぁ」

アンクは右腕だけふわふわ浮かせて、丸窓から海を眺める。

「それじゃ俺、もう少しで出航の時間らしいから基地見てくる」

「ものの1、2ヶ月くらい離れるだけだろ。バッタカンもあんだろ」

「でも、セルメダルの効果が切れたら使えなくなるし」

「セルメダルなら、ミーナに数十枚預けてある」

アンクの意外な言動に映司は廊下に出ようとして開けたドアを、思わずバタンと閉めてしまった。

「え、えぇー！アンク、セルメダル預けちゃっていいの？！」

「あぁ、ミーナはお前と違ってバカじゃないからなぁ。俺の体を生

成する分と、半年はカンドロイドに使っても無くならない分のセルメダルを置いてきた。」

「そ、そんなに?!あ、だからこんなに軽かったんだミルク缶」

映司はミルク缶の重量の違和感に気づき、ミルク缶をこんこんとノックする。

そして、アンクのセルメダルを大量に置いてきた事実に感動していた。

「あんなにメダルにこだわってたアンクが・・・アンク、お前やっと人を・・・」

「ハッ、勘違いすんな。向こうで気になる情報が手に入ってな、セルメダルを無駄遣いするお前には、しばらく教えん」

映司はスオムスに、亜種ネウロイ以外に何か別のものがあるんだなと勘ぐった。

その時、バッタカンが独りでにバッタモードになり、ピョンピョンと映司の周りを跳ねる。

「よっと、なんだろ?」

映司はバッタカンを手のひらに乗っけて、もしもーし、とバッタカンに呼びかける。

「映司さんですの?」

「その声、ペリーヌちゃんだね。どうしたの?」

バッタカンから、ペリーヌと思わしき声が聞こえてきた。

「その、あの・・・」

「ん？」
「ま、まだまだ聞きたい話がたくさんあるんですから、早くスオムスでネウロイを倒して、絶対に戻ってくるんですのよ！」
「映司さん、おいしいお茶用意して待ってますからね。いつでも戻って来てくださいね」
ペリーヌの声の後ろから、リーネの声も聞こえてくる。
「ありがとね、二人とも心配してくれて・・・それじゃ、行ってくるね」
「スオムスに住み始めるんじゃありませんのよ！絶対、絶対ここに戻って来るんですのよ！」
「行ってらっしゃい、映司さん！」
一方的に向こうから、ぶつんと切られてしまい、バッタカンも元の缶詰の形に戻る。
映司はそれをミルク缶に入れると
（俺って結構心配されてるなぁ。まぁオーズに変身しなくちゃ只の旅人だし、仕方ないか。でも結構嬉しかったり・・・）
とベットに座り、一人で軽くそんなことを考える。
すぐにベットから離れ、扉に手をかける。
「それじゃ、俺外に出てるね。あ、誰にも見つかるなよ？」
「ハッ、お前じゃあるまいし。俺がそんなヘマするか。さっさと行ってこい」

「・・・風が気持ちいいな。やっぱり、旅に出る前って寂しいけどワクワクするなぁ。しばらく忘れてたな、この感じ」

映司は大きく伸びをする。

まるでそれが合図の様に、同時に出航の汽笛があがった。

「映司さん、いよいよですね。何か緊張してきました」

隣に来ていた芳佳が、胸の前で両手をグッと握り拳を作り、口元をギュッと結んだ表情で基地を一緒に見る。

「うん。亜種ネウロイの特徴を聞いた限りじゃ、コアメダルの種類はゴリラ。駐屯地一個丸々破壊したって聞いたし、結構厄介な相手だと思う。でも、ここに戻って来る事が一番だから、またここに戻ってきたい！って思って戦えば、きっと勝てるよ。それに、スオムスの人たちの為にも、負けてられない」

「そうですよね・・・そうです！スオムスで困ってる人たちがいっぱいいるんです、その為にも、私自身の為にも、絶対に勝ちましょう映司さん！」

船は基地の港を離れて、北欧のスオムスを目指して出航していった。

「えと、今日からしばらくの間お世話になります。火野　映司と」
「宮藤　芳佳です」
「目的地につくまで、料理と洗濯、掃除を手伝わせてもらいます。よろしくお願いします」
「お、お願いします！」

時刻は夕方にさしかかり、出航してからしばらく立った。
食事の時間となり、戦艦に乗っている全員が食堂に集められ、映司と芳佳の挨拶に船員のみんなは惜しみない拍手を送った。

「宮藤さんのご飯、楽しみにしてますー！」
「火野ー、軍服に汚れが少しでも付いてたらみっちりお説教だからなー！」
「火野ー、色々なところ旅してたんだろ？後で聞かせてくれよー！」
「あの宮藤さんのお役に立てるなんて、自分嬉しいッス！」
「宮藤さん、あの時はありがとうございましたー！今度は俺らがお礼する番です！」

食堂に集められた船員達に歓迎されて、二人とも嬉しそうに笑顔を浮かべ、船員達と握手をして挨拶をしている。

「皆に歓迎されてるようでなによりですな、お二方」

側に来ていた杉田が歓迎されてるのを見て、自分の事の様に嬉しそうに声をかける。

「はい、なるべく迷惑かけないように頑張ります！」
「俺にできることがあったら、なんでも言ってください。手伝いますよ」

二人とも、何気にこの船で働くことを少し楽しみにしていたので、雑用係になる気満々である。
何せ航海なんて、芳佳は扶桑から基地に行った一回切りだけ。
映司は旅自体が楽しいので、雑用くらいなんてこと無いと思っている。

「ハハハ、1週間半くらいで目的地に着くので、それまでくつろいでください。」

艦長の杉田は楽しそうな笑みを浮かべている二人を見て、まるで二人のおじいちゃんの様にご機嫌に笑う。

その日の夕飯は、映司と芳佳、それに元々居たコックと一緒にカレーを振る舞った。
前に作った辛いカレーでは無く、現代の日本で食べてるカレーのそれである。
とっても評判が良く、週二回はカレーを出せと船員からリクエストが来たとか。

それから一週間、二人は楽しそうに航海をしていった。
赤城の中を案内してもらったり、映司が旅の話をしたり、甲板を思い切り走ってモップ掛けをしたり、芳佳が体が鈍らないようにと見事な飛行を見せてくれたり。
船員も、映司と芳佳も、まったく退屈のしない航海を送っていた。

アンクはバッタカンでミーナと話して暇つぶしして、夜中はこっそり外にでて、腕だけで風に当たってたりして時間を過ごした。
映司と芳佳もバッタカンで、サーニャや他のストライクウィッチーズと話しをし、日々の楽しい航海を離して聞かせていた。

何のトラブルも無く順調に航海は進み、残り二日程度で目的地であるバルトラントに着こうとしていた。

「うーん、今日も良い天気ですね」
「そうだなー。火野、天気が良いからって掃除さぼるなよー」
「俺は寝っ転がって、ひなたぼっこしたいけどなー」
「そんなんじゃ、宮藤さんと艦長に怒られるぞー」
「ハハハ。それじゃ、俺向こう掃除してきますね」
「おーう、行って来い。今日は『カナダ』とやらの旅を聞かせろよー」
「楽しみに待ってるからなー」

顔と名前を覚えるのも旅をしている映司にとっては難なく、ものの数日だが、映司の性格上誰とでも仲良くなれるので、船員達とすでにうち解けていた。
そんな様子を、艦長の杉田は微笑んで操舵室から見ていた。

その数分後、楽しい一時は一気に戦場と化した。

ウゥ～ウゥ～
警報が鳴り響き、スピーカーから『敵襲！敵襲！』と見張りの船員がマイクに告げる。

「ハァハァ、ネウロイが、出たんですね」
「ハァハァ・・・艦長、私出撃します！出撃許可を！」

映司と芳佳は操舵室に走り込み、肩で息をしながら杉田にそれぞれ確認を取る。
杉田は帽子のつばを掴んで、深くかぶり顔を下げる。

「済みません、今近くに赤城以外に護衛艦が居なく、赤城だけで迎え撃つしかありません。予報ではこの航路に奴がでるはずは無かったのですが・・・。赤城だけでは、どうにも奴を倒しきれるほどの力がありません。お願いします、お二人の力を貸してください」

杉田は頭を二人に頭を下げる、周りに居た数人の船員も頭を下げた。
芳佳と映司はネウロイと戦うのは当たり前の事なので、顔を上げてくださいとしどろもどろになっていた。

「言われなくても、俺は勝手に戦ってますよ。この艦には一週間の長い間、お世話になりましたし。それじゃ、行ってきます！」
「私も、絶対にこの船を沈めさせません！私と映司さんが守ってみせます！」

映司は操舵室を後にして、部屋に一度戻りミルク缶をかついで甲板に出る。

芳佳も戦艦内部にある整備室兼・格納庫に走って行き

「オールオッケーです、宮藤さん！」

「絶対にネウロイ倒して戻ってきてくださいね！」

等々、整備員達から声援を背にもらい、ストライカーを穿いてリフトアップして甲板の先端に出る。

足下に小さな魔法陣を出して、空へ向かう為にブルルルルルとエンジン音とうならし、グッと前のめりの姿勢をし機銃を構える。

「宮藤芳佳、発進します！」

芳佳は映司より一足早く、ネウロイに向かって飛んでいった。

甲板では、既に船員達が忙しそうに動いていた。弾薬を運んだり、ネウロイの攻撃に備えて外に出ていた荷物を運んだり。

そうして甲板に誰もいなくなったのを確認すると、映司はミルク缶のふたを少し開ける。

「アンク、メダル！」

「ハッ、相手は普通のネウロイだ。この艦、落とさないで勝てよ」

「・・・分かってるって、行ってくる！」

アンクは右手からタカ・トラ・バッタのメダルを映司に投げる。
映司はいつもの感じでキャッチし、前のメダルに執着したアンクと変わりつつある言動に微妙に反応して、すでに巻き付けてあるベルトにはめ込んでいく。

一部の船員と杉田は、一体映司が何をしようとしているのかを興味深げに見ながらも、各自に指令を送っていた。

「総員！迎撃準備！」

映司は事前にネウロイが出たらリフトにライドベンダーを運んで、甲板に出しておいてくださいと頼んでおいたので、自販機のライドベンダーがリフトアップされたのを確認して、スキャンし変身する。

「変身！！！」

『タカ！トラ！バッタ！』
『タットッバ！タトバ！タットッバ！』

操舵室からは、おぉぉとどよめきが走り、みんな目を見開いていた。

「かっこいい・・・」
「すげぇ・・・」
「あれがどんなウィッチより強いっていう・・・」

「火野さん、宮藤さん・・・皆、我々も応戦するぞ！」

杉田の言葉を聞き、変身を見ていた船員達はすぐにおぉ！！と勇ま

しい雄叫びをあげ、迫り来るネウロイに向けて砲撃していく。

映司はライドベンダーにセルメダルを入れ、タコカンを大量に出し、もう一度セルメダルを入れど真ん中の大きなボタンを押し、バイクモードに変形させタコカンの作る道を走りネウロイへ急ぐ。

芳佳は戦闘に入っており、ビームをシールドで防ぎつつダダダッと機関銃を撃ち込んでいく。

「「絶対に、守ってみせる！」」

スオムスと奇襲と守るべきモノ２（後書き）

エーリカはバルクホルンと病室にてすでに映司と芳佳にお別れをしています。

バルクホルンは寝っ転がりながら、恥ずかしそうに芳佳に聞こえるか聞こえないかの声で『ありがとう』と言いました。

それとスオムスの登場人物・ストーリーですが、これまた時空系列が乱れおります故、スオムスいらん小中隊が奮闘している最中のお話となります。オリジナル要素を加えてね。
大体一巻の真ん中くらい、まだまだ人員不足の頃・・・とか言ってる時期が俺にもありました。

――訂正――
その後、つまり今のスオムスを中心に描いていきます。

スオムスと奇襲と守るべきモノ3（前書き）

今更ながら２００Ｐ越えあざーす

スオムスと奇襲と守るべきモノ3

・・・ィィィイイン！！

ネウロイがビームで海を大きく凪ぐ、ビームは赤城すれすれにはずれ、赤城も負けじと砲撃する。
巨大なネウロイは速度はそこまで無くいい的で、撃ったそばからどんどん当たっていく。
ネウロイのあちこちから大きな爆発音がし、煙が立ちこめる。
しかし、ネウロイも負けておらず、持ち前の再生能力で即座に再生していく。
芳佳はネウロイの周りを飛び回り、弾を無駄にしないようにまだ砲撃が当たっていない場所を、シールドで防ぎつつ的確に撃つ。
こうしてネウロイのコアを、手探りながらも探っていく。

「ハァ！」

オーズもバイクでネウロイに接近し、ビームを避けながらどんどんスピードをあげていき、ネウロイと真っ正面から対峙する形になる。
そのままのスピードを生かし、脚に力を込めて胸のバッタマークから光が緑の光が脚へと走る、脚はバッタの脚になりバイクを思いっきり蹴ってネウロイにジャンプした。
バイクはそのままタコカンが作ったネットに入り、他のタコカンで作った足場に落ちる。
空中でトラクローを展開させ、今度は腕に力をこめ胸のトラマークから光が腕に走った。

「セイヤー！」

ネウロイの頭を、両腕をクロスさせたトラクローで切り裂く。
大きな黄色い×のエフェクトが出て、大きな爆発が起こる。
オーズはタコカンのネットの上に着地した。

「おぉ」
「やったか！」

船員達は、ネウロイを切り裂いたオーズを見て大きくどよめく。
だが煙が晴れてそこに見えたのは、ネウロイがオーズの切り裂いた頭をパキパキと音を立てて再生していく。
再生が終わると、ネウロイはまたビームを撃ってくる。

「っと、コアの位置は頭でもお腹でも両翼でも無い・・・ってことは！」
「映司さん、多分コアの位置は尻尾の付け根だと思います！」

隣にシールドを展開しつつ、飛んできた芳佳がオーズにアドバイスをする。

「尻尾の付け根、なるほどね。芳佳ちゃん」
「はい」
「俺がコアを表に出すから、コアを撃ってくれる？」
「はい！」
「それじゃ行くよ！」

芳佳は先にネウロイの背後に旋回し、ちまちまと攻撃を避けつつオーズが攻撃して、コアを撃つタイミングを見計らう。
オーズはもう一度バイクにまたがり、ネウロイの上をとろうとタコカンの道を走る。
だが、それを良しとしないネウロイが手当たり次第にオーズにビー

ムを撃っていく。
オーズはビームを避けながら、なんとかネウロイとさほど変わらない目線まで持って行き、ビームの嵐がやむチャンスを待つ。
ちょこまかとすばしっこく避けるオーズに、しびれを切らしたネウロイは赤城に狙いを変えた。
体の赤く線が走る部分や、両翼の赤い色が六角形になっている部分からビームを一点に集中させて、それを赤城に向けて撃つ。

「あ、危ない！」

芳佳はそれに気づき、赤城へと向きを変えスピードを上げていく。
だが

「間に合わない・・・！お願い、届いて！」

芳佳と赤城の距離は遠く、間に割って入りシールドを貼ることなどとても無理だった。
それを悟りつつも、芳佳はスピードを止めず、最後まで諦めなかった。
だが芳佳は、ネウロイのビームと赤城の間に何かが居るのに気づいた。

「あれって・・・え、映司さん！無茶です、シールドを持ってないのに！」

芳佳は声を張り上げる。
あんな大きなビームを受けたら、いくら撃たれ強いオーズの装甲でも耐えきれず壊れてしまうだろうと。
既にビームがオーズに当たる直前まで来ている。
ぐんぐんスピードをあげて、オーズに向かって手を伸ばした。

だがそれも虚しく、目の前で大きな爆発が起きてしまった。
芳佳はストライカーを減速させ、左手に銃を構えたまま絶望の表情を浮かべ滞空していた。
あのビームを直撃してしまったオーズは、爆散してしまった。
そう思ったのだ。

「そんな・・・映司さん・・・映司さーん!!」

その声に応えるように、オーズが居る位置から大きく緑色の閃光がはじけ、バチバチバチと大きな音を立てる。

「うぉぉぉおおおおお!!!!!」

芳佳はフラッシュのような瞬く光に目を細めたが、確かにそこには両腕をふるわせながら雄叫びを上げ、頭から緑の雷を発しているオーズが立っていた。

「ハアッ!」

両腕を気合いを入れて振り下ろし、頭の発光が止まる。
オーズは咄嗟に頭のメダルをクワガタに入れ替え、ビームを雷で止めていたのだ。
だが、あまりにもネウロイのビームとクワガタの雷、どちらの威力も高くそれ故大きな爆発が起きたというわけだ。

「危なかった、間に合ってよかった・・・。てか、タコカンよく耐えてくれたね」
「映司さーん!!」

「うわっとっと」

芳佳がオーズに抱きついて来たので、オーズはバランスを崩しながら抱き留める。

「良かった、良かったです！」

「ハハハ、ちょっと危なかったけどね・・・って芳佳ちゃん後ろ！」

「え？きゃあ！」

ネウロイが再びビームを撃ってきたので、芳佳はあわててオーズから離れてシールドをはる。

「それじゃ、もう一度行くよ！」

「はい！」

芳佳は再び空に飛んでいき、チャンスを待つ姿勢に入る。

オーズはチャリンチャリンとベルトのメダルを入れ替え、スキャンする。

ライオン！カマキリ！バッタ！

オーズは飛んでくるビームを、カマキリメダルで付属した腕の鎌カマキリソードや回し蹴りなどで弾き、切り裂きつつ、ネウロイの真下にたどり着きメダルをスキャンする。

『スキャニングチャージ！』

ライオンヘッドが光り始め、腰を深く落としカマキリソードを構える。

ネウロイのコアがあるであろう尻尾の付け根に向けてジャンプした。

「ッセイヤー！！！！！」

ライオンヘッドから光を放ちつつ、カマキリソードで切り裂く。
鉄でできたネウロイの体はいともたやすく切り裂かれ、芳佳の予想通りの場所にコアが露わになる。

「はあぁぁぁぁ！」

芳佳はシールドをはりながら、体をねじって旋回しつつコアに近づく。
そしてコアに狙いをつけ、引き金を引く。
ダダダダッ！と機関銃特有の連射音を出し、弾は吸い込まれるようにコアに命中する。
コアは四散し、周囲に綺麗なネウロイの破片が散らばった。

「良かった・・・倒せた・・・」

たった二人だけで大型のネウロイを倒せて、芳佳は安堵しながらストライカーのエンジン音と、赤城の船員達の歓声を聞きながらバイクに乗ったオーズと共に赤城へ戻って行った。

「それじゃぁ皆さん、お世話になりました！」
「一週間ありがとうございましたー！さよーならー！」

「おぅ、元気でなー！」
「またなー！」
「カレー美味しかったですー！」
「達者でー、じゃあぁなー！」

芳佳と映司は赤城から降り、手を振って一週間半お世話になった船員と別れた。

「・・・行っちゃいましたねー」
「そうだね・・・」

二人は長いようで短かった赤城に乗った時間を振り返って、それぞれ少しの間物思いにふけっていた。
その静寂を破ったのは、芳佳じゃない女性の声だった。

「火野映司さんと、宮藤芳佳さんですね。スオムス空軍カウハバ基地からお迎えにあがりました。ハッキネン大尉です」

ハッキネンと名乗る女性は、スッと綺麗な敬礼のポーズを二人に取った。

スオムスと奇襲と守るべきモノ3（後書き）

まだスオムスとしか名を聞かされてかった時

映司「そういえば、エイラちゃんもスオムス出身だったよね？」

エイラ「ソウダ、スオムスはいいぞー映司。スオムスで食べるパンと、あったかーいスープの組み合わせは凄く染みて、こう、何とイウカ・・・」

アンク「んなもん、どこで食っても同じだろ」シャリシャリ

エイラ「全然違うゾ！スオムスで学校を終えて家に帰って、暖炉に火をつけて体を温めながら椅子に座って、木の燃えてはじける音を聞きながら・・・アー、早くスオムスに帰りたーい！」

サーニャ「エイラ、スオムスの話をするとすぐに帰りたくなるの」

映司「ま、まぁ分からなくも無いけど。早く、ネウロイ倒さないとだね」

アンク「そーいや前に『俺に元の世界に帰りたくないか』とか聞いたなぁ。お前はどうなんだ、映司」

映司「俺は、今自分にやれる事をやるだけ。元の世界に帰るの考えるのは、これが終わったら考えるよ。そもそも全部倒したところで、帰れるかどうかも分からないし」

サーニャ「あの、映司さん」

映司「ん？」

サーニャ「もし・・・前の世界に戻れなかったら・・・その時は・・・私と・・・」

エイラ「わ、わあああああぁぁ！！映司！ガリアのネウロイの巣ぶっ壊したら、サーニャの家族捜し手伝ってモラウぞ！イイナ！」

映司「びっくりした・・・分かってるよ、エイラちゃん。せっかくサーニャちゃんの家族が『生きてる』って事が分かったんだ、俺も手伝うよ。なぁアンク？」

アンク「ハッ。俺はネウロイ全滅させたら、ミーナに『ずっとアイス食べさせてあげるわよ？』って言われたんだ。カールスラントに行く」

「「「え、えええええええええええええぇぇぇぇぇ！！」」」

有名人と繋がりと火のグリード（前書き）

スオムス編、今回から本格的に始まります。

有名人と繋がりと火のグリード

バルトランドからスオムスへ向かう輸送機、それに乗り込んで約４５分が経っただろうか。
ハッキネン大尉が口を開いた。

「もうスオムスに着きます、降りる準備を」
「「はい」」

ハッキネンと共に輸送機に乗り込み、スオムスへ向かう三人。
映司と芳佳はそれぞれ自分の荷物を持ち、降りる準備をして着陸を待つ。

「む・・・あれは」

銀髪の髪が長い女性が、ストライカーを止めて滞空した。

「見えて来たわね。『ザッザザザー・・・』」

隣にぱっつんの黒髪で、巫女服を着た女性が追いつき同じ目線で滞空する。
女性は眼下に見える基地に、なにやら無線で報告しながら降りて行った。
銀髪の女性もそれに続き降下する。

ガチャン、ガガガガと輸送機のドアが開いた。

「どうぞ、降りてください」

映司と芳佳はハッキネンに促され降りていく。

「さっ、寒！」

「はぁー、本当に寒いね・・・」

芳佳はスオムスが極寒の地だと聞いていたので、輸送機の中ですでにコートを着ていたが、初めての極寒の地の上、輸送機と外との温度差を肌で感じガタガタ震えていた。

しかし、寒いながらも氷に覆われた湖と針葉樹に被さった雪の景色に見とれた。

映司も息で手を温めながら、ミルク缶をガシャンと地面に置く。

「おい、揺らすなっってんだろ！」

ミルク缶の中からアンクのこもった怒声が飛び、ミルク缶の蓋が持ち上がる。

映司はあわてて、開きかけたミルク缶を閉めた。

「ちょ、ちょっとアンク、今はまだまずいって」

「ハッ、だったらもっと丁寧に扱え」

アンクは相変わらずの上から目線で映司に命令しておとなしくなる。

「ハッキネン大尉、お疲れ様です！」

芳佳はそんなやりとりを見ていたが、ふと声が聞こえ映司の横を見る。

映司もミルク缶から手を離して顔をあげた。

そこには金髪の背が小さい女性が立っていた。。

「・・・えっと？」

首をかしげながら女性達の顔を見ていくが、一人も心当たりのある顔が無い。

が、芳佳は軍服を見てハッと気づき敬礼をとる。

「だ、第５０１戦闘航空団から派遣されてきました、宮藤芳佳軍曹です！」

船に乗り輸送機に乗り、すっかり旅気分だった映司は、何の為にここに来たのか芳佳を見て思い出した。

目の前の女の子も、芳佳の後に続いて敬礼をとって名乗り出る。

「スオムス義勇独立飛行中隊隊長、エルマ・レイヴォネン中尉です。一時的な派遣とはいえ、あの『ストライクウィッチーズ』から来ていただき歓迎します！」

エルマは一気にまくしあげると、敬礼を解いてちらりと輸送機の側に立っていたハッキネンを見やる。

ハッキネンはこくりと頷いて前に出る。

「こちらは自己紹介のあった通り、宮藤芳佳軍曹。そしてこちらは」

ハッキネンは一呼吸置いて、少し眉を上げて続ける。

「火野映司です」

ハッキネンに紹介されると、軽く頭をさげた。

「ども、火野映司です。えと・・・」

オーズに変身しますと言いかけて、彼女の後ろに見える基地が目に入った。

視界の端に基地の入り口に銃を持った男性がおり、珍しい物を見るような目でこちらを見ているのが見えて言葉を止める。

少し目を泳がせると、格納庫ではストライカーをいじっている作業着を着た人や、たばこをふかしながら楽しそうに話し合っているグループも見えた。

「オーズって、ここで話したらまずいと思うんですけど・・・？」

オーズの事は、赤城では仕方なくとは言えばれているが、ウィッチの間だけで知られる極秘事項。

ウィッチでも無い軍人が周囲に居るこの状況では、オーズの話はまずいと思ったのだ。

エルマはハッと口を押さえ、頭を下げる。

「すす、すいません！オーズについて配慮が足りませんでした、今基地へ案内しますね！」

わざわざオーズの部分を省いて火野映司とだけ言ったハッキネンは、はぁと溜め息をついてエルマと共に基地へ二人を連れて行く。

「こちらへどうぞ」

映司と芳佳は、倉庫を改装したかのようなブリーフィングルームへ案内された。
既にそこには5名の女性がおり、扉を開けて中に入ってきたハッキネンを見ると、本を読むのをやめたり、火をつけようとして咥えていたタバコを箱に戻したりしていた。

「その人たちが新しく派遣された人ねー？」

金髪のコーラを飲んでいた女の子が、扉から入ってきた二人を横目に遠慮も無く後ろに着いていたエルマに聞く。

「そうです、宮藤さんと火野さんです。あ、せっかく全員揃ってるんでお二人ともどうぞ！」

エルマに促されて五人の前に出た。
二人は先ほどと同じように挨拶をする。

「火野映司、オーズです」

事前にオーズを知っていたので、これがオーズに変身する男かと、

五人がマジマジと見る。

「第５０１戦闘航空団から派遣されてきました、宮藤芳佳軍曹です！えと、これからよろしくお願いします！」

宮藤が敬礼して映司に続く。

宮藤と名を聞き、黒髪の長身の女性が真っ先に反応する。

「宮藤って、もしかしてあのストライカーユニットを作った、宮藤博士の娘さん？」

隣にくっついていた黒髪パッツンの子も反応して、身を乗り出してくる。

「え、本当ですか？！」

「あ、あぁの、はい、そうです」

「わ、凄い！こんな有名人に会えるなんて・・・」

二人はすぐに敬礼して、芳佳に挨拶をする。

「迫水ハルカ一飛軍です！」

「スオムス義勇軍中隊、穴拭智子、階級は少尉です。」

それにつられて他の三名もそれぞれお挨拶を済ます。

「エリザベス・ビューリング、階級は少尉」

腕組みをして壁に寄りかかりながら、映司を鋭い目で見ている。

それに気づいて映司は少し首をかしげたが、ビューリングからはそれ以上個人的に何も言われなかったので特に映司も話しかけようと

はしなかった。

「キャサリン・オヘア少尉でーす、どうぞよろしくねー」

キャサリンはコーラの瓶を机に置き、映司と芳佳に敬礼をした。

「おぉ・・・」

わきわきと怪しげに手を動かして芳佳は目を光らせる。
隣に座って眼鏡をかけていた少女を、せかしながら座る。

「ウルスラ・ハルトマン、階級は曹長です」

眼鏡の少女も敬礼をしてすぐに座り、二人には興味なさげに本を手に取りすぐに読み始める。
ハルトマンと聞いて、映司はもしかしたらとウルスラにとある事を聞こうとしたが、それより先に芳佳が智子に質問をした。

「あ、あの、智子少尉って『扶桑海の巴御前』の？」

「えぇ、そうよ」

智子は、同じ出身である扶桑の宮藤が自分の事を知っていたので少し自慢げになる。

「わわ、やっぱり！こんなところで会えるなんて、嬉しい限りです！あの、握手してください！握手！」

芳佳は智子まで走っていき、握手を求めるがそれをハルカが拒んだ。

「駄目です、いくら宮藤さんでも智子少尉の体は私の物です・・・

ですよね、智子少尉！」
「宮藤さんに知ってもらえてるなんて、光栄だわ」
立ちふさがるハルカを無視して、体をぐいっと押しやり宮藤の握手に応じる。
映司は智子の事など知るよしも無いので、隣に立っていたエルマに聞く。
「あの、穴拭さんって有名人なんですか？」
「はい。それはそれは、扶桑海軍でのエースであの坂本さんと同じくらい凄いんですよ。扶桑では巴御前人形とやらもあって、智子少尉の人形が流行ってるくらいなんです。」
「人形まで作られちゃってるんだ、凄い人なんだなぁ・・・」
感心している映司だが、ミルク缶の中からジャラジャラとメダルの音がしたのを聞いてミルク缶の蓋を開ける。
「おい、ついたならさっさと出せ」
「ごめんごめん、とりあえず体作ったら？」
ミルク缶から、アンクの手だけがフワフワと中に浮き出す。
「わお、それが噂に聞いたアンクですか？聞いてた通り真っ赤な腕ねー」
キャサリンがアンクの腕をまじまじと見ている。
アンクは鼻で笑うと、ミルク缶からセルメダルを一カ所にばらまき、そこにクジャクとコンドルメダルを投げ込んで自分の腕もそのセルメダルのそばに浮く。
ジャラジャラと音を立ててアンクの体を生成していく。

「それがグリードとやらか」

ビューリングは火がついたタバコを咥えて、フーと煙をはきながらガラの悪いアンクを見る。

「あぁ、これがグリードだ」

アンクは右手をグーパーしつつ、さほど驚かないビューリングを横目に、ハッキネンに一言二言告げてハッキネンとどこかへ行ってしまった。

「それじゃ、お二人を部屋へ案内します。あ、一時的な派遣と言うことで、私たちの部屋とは別なんですよ」

ムッとした顔でハルカと対峙していた芳佳を、ミルク缶を背負った映司はほらほらとミーティングルームから連れ出してエルマについて行く。

有名人と繋がりと火のグリード（後書き）

ウィザードリィオンラインにはまってしまった、これはいかん。

有名人と繋がりと火のグリード２（前書き）

全部のメダル出すから・・・長編になる予感！

有名人と繋がりと火のグリード2

朝日が昇って間もない時刻、窓にこびり付いた霜に朝日が反射し、キラキラと光が差し込む中、久々に映司は熟睡していた。
早朝の訓練も無ければ、ここは食堂で働く人が朝ご飯を出してくれるのである。
しかし、ぐっすり寝る映司をアンクが許さなかった。

「映司、さっさと起きろ」

枕をボフンと、仰向けに寝ている映司の頭に投げて起こす。

「ん～・・・」

アンクに投げられて顔に乗っかった枕を手で避けて、のっそりとベッドからはい出る。
流石の映司も、スオムスの寒さに耐えられずパンツ一丁ではなく普段着を着た状態だが、ベッドから出ると寒さに体を震わせながら目をこする。

「う～寒っ！」
「さっさとしろ、お前以外もう起きてんぞ」
「へ？こんな早く・・・あっ！」

映司は昨日ハッキネン大尉に言われていた事をすっかり忘れていた。

『お二人は我々が保護した旅人という設定の為、基地内の一部共有

施設はともかくウィッチーズの寝泊まりする部屋・ミーティングルーム・武器庫への頻繁な出入りを見られると厄介です。ですので、こういった施設を使う時は人目につきづらい早朝、もしくは深夜に限らせてもらいます。早速ですが、明日の朝・・・』

「わ、忘れてた！」

「ハッ、昨日言われたばっかの事を忘れるとはなぁ。ここ、しっかり使え」

アンクが自分の頭を右手の人差し指で、トントンと叩きながら笑う。

「それとも、坂本が居なくて楽か？」

「楽っちゃ楽だけど・・・仕方ないだろ、毎日きつかったんだから」

身支度を整えた映司がドアを開けて、廊下に出ながら尻目に言う。

アンクも、真っ赤なカーテンが縁から降りた自分のベッドから降りて映司について行きミーティングルームへ向かう。

ガチャリ

「すいません、すっかり寝てました」

「遅刻よ遅刻、まったく何寝坊してんのよ。ふぁ～・・・」

頬杖をついて足をぷらぷらさせている智子が、眠そうに欠伸をしながら言う。

「すいません・・・あれ？」

倉庫の様なミーティングルームのドアを開けながら謝りつつ入る映

司だが、昨日より人が少ない事に気づく。
智子とエルマ、それにハッキネンと昨日見たこと無い前髪を持ち上げた金髪の女性だけである。
アンクは特に挨拶も無く、ハッキネンと軽く見交わし映司の横を通って、二つあるウチ片方の石油ストーブ付近の机に膝を立てて座る。

「いえ、そんなに遅れてないから大丈夫ですよ。」
「そうですか？でも遅刻って怒られたばっかりだし・・・」
「智子さんは色々と厳しすぎですからね」

エルマがもう片方の石油ストーブが近くに置いてある机に座りながら、アンクが閉めなかった開けっ放しのドアを見ながら映司に聞く。

「あれ？宮藤さんは一緒じゃないんですか？」
「いえ、俺らと芳佳ちゃんの部屋別なんで、てっきり来てるかと思ってたんですけど、そう言えばいないですね？」

キョロキョロと部屋を見渡す映司だが、直後映司が立っている入り口の後ろから、廊下を走る音が聞こえた。

「すすすいません、すっかり寝坊してしました！」

いつものセーラー服を着た芳佳が映司と同じように、ミーティングルームに謝りながら入ってくる。

「・・・ギリギリ遅刻です、とりあえず席にお着きください。」

ハッキネンが眼鏡をクイッと持ち上げて、映司と芳佳に席に座るよう促す。
二人はエルマの後ろの席に座って説明を待つ。

「では、そろそろ皆が起きる時刻ですので手短に説明します。」

ハッキネンは一番前に座っている、前髪を持ち上げた金髪の女性を手招きして自分の横に立たせる。

「こちら、今回スオムス独立義勇軍と共に亜種ネウロイと戦ってもらう、スオムス空軍第一中隊中隊長」

「ミカ・アホネン大尉です」

アホネンは敬礼をして挨拶する。

芳佳も敬礼を返す、だがその頬はピクピク動いてつり上がっている。

映司も思わず名前を聞いて笑いそうになったのをこらえている。

「宮藤芳佳軍曹で・・・す・・・プッ」

「ア、アホ・・・プクッ・・・」

腕を組んでいた智子が「わたしはあほやねん」と呟くと、映司は下を向いて忍び笑いし、芳佳はあっはっはと笑ってしまった。

アホネンは敬礼をすぐに解き、自分の名前を笑いのダシに使った智子を恨めしげに見る。

「智子、また私の名前を笑いものにして！扶桑の人たちってこれに弱いんですの？」

芳佳はあわてて笑うのを止めて席に着く。

「さぁ、でもそうとも限らないみたいよ？」

智子は親指を立てて後ろの机に座っているアンクに向ける。

アンクは相変わらずの仏頂面で、机に座ったまんまでちっとも笑っていないでやりとりを見ている。
アホネンは、スオムスに来た扶桑人で自分の名前を聞いてクスリとも笑わない人は珍しく、アンクに対しては男なのに好意を持った様子だった。

「あら、貴方私の名前聞いて笑わないのね。扶桑人にしては珍しいまともな人ね」
「あ？笑うとこあったか？」

素直に笑いどころが無いと返すと、アホネンは上機嫌で「それが普通よ」と呟いて座った。
ハッキネンは部屋が静まったのを確認すると、任務について説明を始める。

「・・・さて、時間が殆ど無いので今回の作戦を手短に説明します。敵ネウロイはこの基地の後ろの街・スラッセンに迫ってきているとの報告がありました。ネウロイの数は多く、主に陸上型のネウロイが大半を占めているとの事です。スラッセン偵察部隊が寄越した写真の中に、陸上型ネウロイに紛れて亜種のネウロイを確認。この間、スオムス南の街の駐屯地を破壊したネウロイと同型だと、その場に居たウィッチにより判明しました。陸上型ネウロイが多いので、ウィッチ隊はそれぞれ担当の箇所へ爆撃をお願いします。いままで通りのネウロイであればそれだけで十分ですが、報告にあった通り銃器を殆ど無力化する程の装甲だとの事です。ですので、爆撃だけでは十分に倒しきれません。そこで、あなた方を援軍として要請したと言うワケです」

芳佳は背筋を伸ばして

「一生懸命頑張ります！」

と、映司は

「・・・街が懸かってるんですから、死んでも守りますよ」

と意気込みを見せた。

エルマはあわわとなって

「え、映司さん、死んでは困ります！」

天然ぷりをいかんなく発揮していた。

そこで、とハッキネンは続ける。

「スオムス独立義勇軍と第一中隊には、空からの爆撃を中心に陸のネウロイを削ってください。」

「あの、私は？」

「宮藤さんには、義勇軍の方々と一緒に動いてもらいます」

それまで静かに聞いていたアホネンが、ガタッと椅子から立ち上がると芳佳が自分の部隊に来ないことにいきり立った。

「ハルカさんといい、なんであんなに可愛い子がウチの部隊じゃないんですの？」

可愛いと褒められて、芳佳はエヘヘと頭をかいて照れ笑いする。

「期間は1ヶ月の派遣ですので、こちらの方が出入りもし易いとの配慮です。」

ハッキネンが一度区切って続ける。

「とりあえず、各隊が爆撃後亜種ネウロイが確認されずとも、オーズにはスラッセンの街を守ってもらいます。そういう事でよろしいんですよね？」

「あぁ、こいつなら亜種だろうが亜種じゃ無かろうが、ネウロイを見つけたら間違いなく倒しに行くバカだからな」

「ふーん、でも一人で大丈夫なの？オーズって奴の力がどれほどかも分からないのに。」

映司を見ながら、言い方にとげがあるものの智子が心配そうに聞く。スオムスのナイトウィッチから映司の人柄は聞いており、そんな好青年を失うのは智子としても申し訳がない。

ましてや特別なオーズになる度に、自分たち以上に力を消費するまで聞いているのだ。

空を飛ぶだけでも魔力を消費し、シールドや固有魔法を使おうものなら更に魔力を消費する。

それは肉体的疲労として蓄積していくので、どれほど疲れるかを智子はよく知っていた。

それよりもきついとの事だから、よほどの力とそれに見合うだけの反動なのだろう。

「ハッ、オーズは強い。ネウロイに負けるか」

「いや、私が心配してるのはそっちじゃなくて・・・」

「大丈夫ですって、街は俺が絶っ対に守りますから」

映司とアンクも見当違いの安全を保証する。

「オーズって相当強いんですね、頼りにしてます！」

「映司さん、怪我したり疲れたら言ってくださいね。治しますから

！」

エルマと芳佳もいつもの調子である。

「・・・ハァ、この事を各隊員達に伝えるように。」

場の雰囲気が崩れつつあったので、そのままハッキネンは今日はここまでと解散した。

「はー寒いなぁ。あ、お疲れ様ですー」

「おぅ、お疲れ！」

輸送機で来た後、ライドベンダーがどうなったのか結局分からずじまいなので、映司は朝食を取った後、ライドベンダーを見に格納庫へ来ていた。

格納庫では作業着を着た男達が、様々なストライカーの整備をしていた。

その時、丁度となりを通り過ぎようとした眼鏡をかけた整備士に、自分のバイクがどこにあるのかを訪ねた。

「あの、黄色いバイクがあると思うんですけど、どこにあるかわか

ります？」

その整備士は、眼鏡の奥に澄んだ好奇の瞳を光らせて逆に映司に訪ねる。

「失礼だが、あれは君のバイクかい？」

「あ、そうです」

「ふむ・・・とすると、君が例のラッキーボーイか」

「え？」

映司はなんで自分がラッキーボーイなのか全然見当がつかず（えーっと、何か変なことやらかしたっけ？）と頭を回転させて考える。

「スオムスに旅してたところに、基地に拾われたんだろう？容姿端麗で美人なウィッチが揃う基地に保護されて、みんな凄い羨ましがってたよ。まぁ僕も羨ましいとは思うけどね」

「あ、あぁ、いやー、基地の人に聞くまでここら辺がすっごい危険なんて、聞いてませんでしたからね！」

自分の立場に気づき、必死に今来たばかりの旅人を演じる映司。

だが、それが裏目に出てしまい逆に怪しまれてしまった。

「今なんて、ここに限らずどこも危険だよ？大体、旅人を基地で保護するなんて話自体信じられないのにさ。今までに発見されてないネウロイを見た、なんて人も居るし」

ウィッチ間のみで使って連絡を取って、秘密として守ってきた今までのネウロイとは違うネウロイ。

その言葉が眼鏡の整備員から発せられた。

今回の被害はウィッチだけではなく、駐屯地に居た軍人・一般人にも被害は及んでいる。
もしかしたらゴリラネウロイもばれているのではないか。
そう予想していたが、予想は半分的中だった。

はずれた半分は、ネウロイの形をはっきりと見た人が居なかった。
当たった半分は、今までに見たことのないネウロイだった。

「・・・み、君！ボーッとしてたけど大丈夫かい？スオムスの寒さにやられたかな？」

アンクは、上層部はこの事をどこまで知っているのかが気になったが、眼鏡の整備士によって現実に戻された。

「す、すいません、ちょっと寝不足気味で。あ、俺の名前、火野映司です。」
「寝不足か、これからもっと寒くなるんだから冬眠なんてしないでくれよ？僕は糸川　衛。ストライカーの販売ついでに、しばらくはここの整備士をやることになったんだ」

そうそうと糸川は思い出して、シャッターの隅を指さす。

「バイクだったね、あれじゃないかな？」
「えーっと・・・本当だ、ありがとうございます」
「それじゃあ、僕は本社に報告があるからこれで失礼するよ。また後でね」

有名人と繋がりと火のグリード2（後書き）

次回に続く

有名人と繋がりと火のグリード３（前書き）

『スオムスいらん子中隊』
ネウロイとの激戦区になっているスオムス。
流石にきついので、世界各国にウィッチを要請しました。
来たのは各国で問題ばかりを起こしてきた、問題児のウィッチ達。
所謂厄介払いである。
しかし、穴拭智子を中心にいらん子中隊は成長を遂げ、協力し合い助け合い、支え合った結果、他のウィッチに負けないくらいのエリート集団になりました。

って感じ。
ちなみに、５０１～５０８戦闘航空団はスオムスを見習って作られたらしいです。

なお、この作品で階級は小説のを使っていきます。
ハルカはともかく昇級すると、別の地方に飛ばされるからとかなんとか理由をこじつけてます。

ご都合主義である。

４巻早く出ないかな・・・

有名人と繋がりと火のグリード3

「ざけんな！！」

ハッキネンの部屋からアンクの怒声が響く。
こちらの世界に来てから、初めてアンクが切れた瞬間である。

「ふざけてなどいません、我々も想定外の出来事だったのです。ネウロイの陽動、亜種のネウロイ、やむなくスラッセンから撤退せざるを得ない状況だったのです」

しかしハッキネンも負けてはいられない、スラッセンから撤退しなければ多くの物資・人命が失われる状態だったのだ。

「ッチ」

アンクは舌打ちをして前に出て、ハッキネンの机にあるスオムス地方の地図の一カ所を指さす。

「確かにここにあったんだな？」
「はい、確かにここに保管しておきました。上にも見つけられないような、盲点になると思ったので。ネウロイに破壊・吸収されていなければ、今も残っているかと」

アンクがここに来た理由、それは亜種ネウロイからコアメダルを奪還するだけではなく、とある目的の物を手に入れるためでもある。
その目的の物が、ネウロイに襲撃されたスラッセンの食料保管庫にあると聞いてブチ切れたのである。
しかし、何かを思いついたように顔をあげて、開き直って笑う。

「・・・ッハ、上等だ。おい、俺は作戦中は自由に行動させてもらうぞ。特にやることも無いだろうしな、それぐらいいいだろ」
「はい、作戦に支障をきたす範囲でなければ構いません」

それを聞いてアンクは、右手首を左手で掴んで意味ありげにグーパーしつつ胸の前に持って行き、顔をふせてニヤリとした。

映司達が来てから一週間が経とうとしていた。
そして深夜、スオムス義勇軍と映司、芳佳はミーティングルームに呼び出されていた。

「このタイミングでの呼び出しって事はつまり」
「あぁ、恐らくスラッセン奪還の日時が決まったんだろうな」
「前の借り、しっかり返させてもらうわ」

ビューリングは壁に寄りかかって、片手を上着のポケットに入れ、もう片手でタバコをつまんで口に持っていきながら智子に応える。

「スラッセンから避難してきた住人は、一時的な避難としか聞かされていませんからね。いつ戻れるんだって怒ってきたのかも知れません」

「ただ単にネウロイが攻めて来るだけかもねー」

エルマとキャサリンも真面目に考えていたが、緊張はしてないらしく二人揃って欠伸をして笑い合った。

ウルスラは本をぱたんと閉じ、邪魔にならぬようにと部屋の隅に居た映司に近づき、ポケットから缶詰状態のバッタカンを取り出して映司に渡す。

「これ、ありがとうございました」

「ん、ずっと持っててもよかったのに」

「そういうワケにはいきませんので」

映司はとりあえずとバッタカンを受け取る。

「どうだった？エーリカちゃん」

「元気だったか？とか、仲間はずれにされてないか？とか、色々心配してくれてました。映司さんにもよろしくと」

「そっか、エーリカちゃんが優しいお姉さんでよかったね。びっくりしてなかった？」

バッタカンの連絡が映司からでは無い。というニュアンスを含んで聞くが

「はい。姉様、私がスオムスに居ること忘れてました」
と帰ってきて苦笑いした。
「そ、そっか、ショックじゃなかった？」
「少し」
では、と映司に軽く会釈をしてウルスラは前に戻っていった。
丁度良いタイミングで来たらしく、隣に芳佳とハルカが来ていた。
「へぇー、ウルスラさんってあのハルトマンさんの妹だったんですね」
「私も知らなかったです、恥ずかしい・・・」
始めは変な関係だったが、扶桑出身でミーハーで好きな食べ物は扶桑の料理という共通点を持っていたので、二人はあっという間に仲良しになっていた。
「エーリカちゃん、全然妹が居るなんて言ってなかったもんね」
「私も全然聞いてないです、話に出てきませんでしたからね。多分バルクホルンさんが居たからだと思いますけど・・・」
それを聞いて映司は納得する。
「あー、なるほどね・・・」
「え、バルクホルンってあのバルクホルンさんですよね」
かの有名なカールスラント軍人のバルクホルンが、なんでこの話に関わっているのか全然ついていけないハルカの当然な疑問である。

「うん、バルクホルンさん妹の話になると少し五月蠅いから・・・いや、心配しすぎって言うか、なんていうか・・・」
「私なんて、バルクホルンさんの妹にされそうでしたからね」
「あー、されかけてたね。年下のウィッチならしかねないからなぁ」
「・・・なんか、私の中でバルクホルンさんのイメージが崩れていきます」

なんて感じで談話していると、ドアがバタンと開いた。
その瞬間、全員話をやめて入ってきたハッキネンとアンクを見る。
ハッキネンは全員集まっているのを確認すると、アンクにかるく目配せをして話を始める。

「作戦決行日時が決まりました。物資調達・ストライカーの調整・傷ついたウィッチの療養・ネウロイの行動を予測。これらを視野に入れて熟慮し、アンクさんと話し合いました。その結果、5日後が作戦を決行するのに最適だろうと判断しました。皆、作戦は聞いていますね？」

一人一人の顔を見ながらハッキネンは聞く、すると「「「「はい！」」」」と返事が返ってきたので、軽く頷いて話を続ける。

「他のウィッチには私からも話しておきますが、空では連携が大事です。くれぐれも問題を起こさないようにお願いします。では、時間も時間ですので短いながら私からは以上です。追って後々詳しお説明をしますので、本日はこれで解散します。皆、しっかり休んでネウロイとの戦いに備えてください」

ハッキネンが部屋を出て行くのを見ると、それに続いてみんなも出て行った。
映司も自室に戻ろうとドアに向かうと、アンクが腕組みをしてドア

の横に突っ立っているのが見え、何かあるだろうと思いアンクの前で立ち止まる。
すると予想通りアンクが口を開いた。

「お前、作戦ちゃんと頭に入ってんだろうなぁ」
「うん、みんなが爆撃してネウロイを倒してひきつけてくれている間に、ゴリラネウロイを探し出してメダルをゲット。そしてスラッセンの街を奪還して終了。だろ？」
「お前はゴリラネウロイを倒したら、そこでお前の任務は終わりだがな。相変わらず、お前は変わらないなぁ」

またしてもアンクの変化に映司は気づき、映司はニヤッと笑った。

「まぁね。でも、アンクは変わってるけどね。今までだったら間違いなくメダルを無くすから止めろー。って、止めるとこだったのに」
「ハッ、止めたってどうせやるだろ。言うだけ無駄だ」

作戦を覚えているかだけを聞きたかったのか、アンクはそう言うと部屋から出て行った。
映司も部屋を出ようとしたが、まだ部屋に誰か残っていたらしく後ろから声をかけられた。

「待て」
「ん？」

後ろを振り向くと、ビューリングがタバコを吹かしながらこっちを見ていた。

「お前の任務はさっきのが言ったとおり、亜種ネウロイを倒したら終わりだろ。それ以上する必要は無いはずだが？」

ビューリングは考えていた。
何故この男は危険で強い相手とたった一人で戦うのか、その上スラッセンの街を奪還しようと手を貸してくれるのか。
狙いは噂のメダル、それさえ手に入ればもう用はないはずである。
手を貸してくれれば頼もしいに超したことはないが、それにしても不思議である。
だが、そんな難しい考えを映司は簡単に一言で片付けた。

「特に理由は無いですよ、ただ手を伸ばせば届くだけです」
「・・・それだけか？」
「はい、それだけです」

じゃ、と映司はドアを開けて自室へと戻っていった。
ビューリングはしばらく考え事をしていた。

（手が届くからだと？たったのそれだけで敵陣のど真ん中に行き、しかも一人で強大な敵と戦えるというのか？たったそれだけで、見ず知らずの私たちを助けてくれるのか？なんで・・・）

あの去り際の顔、なんであんなに苦しげだったんだ。その考えにたどり着いた途端、ビューリングは気づき、考えるのをやめた。
鏡で見てきた自分に顔立ちは違えど、表に出ていた感情的な部分が、スオムスに飛ばされるまでの自分にそっくりだと気づいたのだ。

「・・・火野映司、お前もか？」

朝食のトレイを持ち、どこに座ろうかと周りを見回していた映司は、先に糸河と朝食を取っていた智子に声をかけられた。

「おはよう映司君」
「あ、おはようございます」
「ここ、空いてるから座ってちょうだい」

智子が糸河との間に一つ不自然に空いた椅子を、ぽんぽんと叩いて促す。

「ども、糸河さん」
「やぁ映司君」

映司は右隣の糸河に軽く挨拶をして座る。
糸河も挨拶を返してくれる。
だが、糸河の左頬が妙に赤く腫れ上がってのを見て、映司は心配そうに聞いた。

「大丈夫ですか、こっちのほっぺた赤く腫れてますよ?」
「これかい?」

はぁ、と溜め息混じりにほっぺをさする。

「智子に挨拶をしただけなのに、お返しがこれさ」
「挨拶したらはたかれるって・・・智子さんと何かあったんですか？」

映司はスープを飲みながら、挨拶のお返しがビンタとは並々ならぬ事情があるのだろうと察した。

「まぁね、前に智子にドレスを買ってプロポーズをしたことがあったんだ」
「へぇー、プロポーズですか・・・でもその様子だと」
「あぁ、見事に振られたよ」

糸河もスープを飲みながら愚痴る。

「まったく、僕が女というだけで」
「ゲホゲホゲフエホ・・・」

映司は盛大に咳きをした。
男口調で一人称が僕、顔立ちも凛々しく整っており、男性と思うのが一般人のそれだ。
映司も例外ではなく、今まで男だと思って接してきたので、いきなりの女だとカミングアウトされて気管にスープが入ってしまったのである。
その上、女性が女性に本気のプロポーズである。
無理も無い。

「ちょ、ちょっと大丈夫？貴女、まだ話してなかったの？」

智子が映司の背中をさすってあげながら、自分の二の舞になってしまった映司を不憫に思っていた。
そんな様子を羨ましそうに見ながら、糸河は朝食を食べる。

「何だ、気づいてなかったのか。てっきり僕は気づいてるかとばかり思っていたよ」

糸河は朝食をすまし、トレイを持って立ち上がり、何かを思い出したように智子に言う。

「そうそう、ストライカーの件だけどキ４４の一部パーツを使って、キ２７改ができたよ。旋回速度はどの機体にも負けないくらいだけど、エンジンスピードはキ４４に劣る。これは仕方ないと思ってくれ。それと、魔力の伝達力を上げてシールドの耐久力の強化・持続時間の調整が、少しの魔力で簡単にできると思うから、試しに飛行してほしい」

「分かったわ、流石一流の整備士ね」

素直に糸河整備士としての腕前を関心する。
随分前に壊れてしまった、戦火を共にくぐり抜けてきた愛機のキ２７を修理だけではなく、キ４４のパーツを使ってまで自分の要望に応えてくれたのだ。
感謝もしている。
が、男だと勘違いし一時は恋をし、肉体関係を持つ寸前まで行った自分を恥ずかしく思う自分も居た。

「あ、もう大丈夫です、ありがと」

背中をさすっていた映司が、口を押さえながらお礼を言う。

「でも、まさか智子さんにプロポーズしただけでもびっくりなのに、女性だったんですね」

「それが普通の反応なのよ。まったく、あいつの女好きの性格どうにかなんないのかしら・・・」

「完全に本人の意思しだいですからね、周りがどうこうしても多分・・・」

「そうよね・・・あ」

智子は急に真面目な顔をして、映司を真っ直ぐ見つめる。

「貴方、男よね。実は女でした、とかじゃないわよね」

「男です」

有名人と繋がりと火のグリード３（後書き）

他のウィッチーズも出したいっすね、どっかに資料ないかな・・・

有名人と繋がりと火のグリード４（前書き）

スオムス編は次の次くらいで一度終わりにします。

ミラージュウィッチーズって格好いいですね、響きが。

詳しい設定を持ち出すと面倒ですが、スオムスいらん子中隊は後の『第５０７統合戦闘航空団　サイレントウィッチーズ』として活躍しております。

が、スオムスの詳しい資料が手元の小説しかありませんので、５０７にならずに若干のアレンジを加えつつの『スオムス義勇独立飛行中隊』として行きます。

なので、この世界に統合戦闘航空団は５０１～５０７のサイレントウィッチーズ抜きで行きます。ご了承くだしー

有名人と繋がりと火のグリード4

映司は、外からやかましく聞こえるエンジン音で目を覚ました。
ベッドから起きあがり、大きく伸びをして朝食に向かう。

「映司ー、おはよー！」
「おはようございます」
「あ、映司さん。おはよーございますー」

眠い目をこすりながら部屋を出てすぐ、タイミングばっちりでキャサリンが後ろから映司の腕に抱きついてきた。
キャサリンの後ろから、芳佳とウルスラも映司と挨拶を交わす。

「うわっ！び、びっくりした。3人ともおはよ」
「映司さんも、これから朝食ですか？」
「うん」
「なら一緒に食べるねー！」

映司はなんとか冷静を保ちつつ、歩きながら抱きつかれたキャサリンから手を抜こうと必死に上にぐいぐいと引っ張るのだが、相手はウィッチである。
耳や尻尾を出すほどの魔力も使わずに、ほんの少しの魔力を使うだけで簡単に肉体強化が可能なのだ。
腕に軽く力を込めて抱きつくキャサリンは、映司を手放す事はしない。

「キャサリンさん、いい加減、手、離し、て」

「ノー、テキサスのママが言ってたねー。男は牛より逃げやすい生き物だから、逃がさないように自分の手で直接離さないのが大事って」

「映司ー！モテモテだなー」

「ハハッ、羨ましいぞー」

廊下ですれ違う兵士達にやじられて、映司はなれない女性とのくっつきにあたふたしながら共同の食堂へ向かう。

芳佳は後ろから、手を前に突き出してにぎにぎしながらついて行ったが、ウルスラに指摘されるまで口の端から少しよだれが垂れかかっていた事に気づかなかった。

「あー、暖まるー」

「暖まりますねー、扶桑の冬とは比べものにならないくらい朝が辛いです」

スープを口に運び、映司は冷えた体が芯から温まっていくのを感じながら、恥ずかしさでも体が温まってきていた。

「ほんと、朝布団から出るのはきついね。一番冷えるこの時期には、あったかーいジャガイモとキャベツのスープに限るねー」

ふぅ、と一息ついてキャサリンは食堂を見渡し、唐突に語り始める。

「二人は知らないかもだけど」

「「ん？」」

「相変わらす二人は仲良しねー・・・。私たち、最初はいらん子だったね。各国で問題を起こしたウィッチの寄せ集めだから、最初の頃はこんな食堂なんか無かった。あの倉庫みたいなブリーフィングルームの、一角を区切って使ってたね。私たちはいらん子だから、さっきの映司みたいにここで見知らぬ兵士と仲良くなることも無ければ」

隣に座って黙々と食べているウルスラの頭を、くしゃくしゃとなでる。

「ウルスラも映司と普通に話せるくらい、コミュニケーション能力が無かったね。最初は本ばっかり読んでたから、正直ミーは不安だった。でも、今は安心して背中を預けられるくらい強くなって、最近は本だけじゃなくて機械にも興味を持ちだしたから、ここに来たことはみんな良いことづくめねー」

「そうだったんですか・・・。あ、でも訓練に参加させてもらいましたけど、智子さんすっごい強かったですよね。今じゃ『扶桑海の巴御前』なんて言われてますけど、昔は弱かったんですか？」

芳佳の言葉にキャサリンは、ＨＡＨＡＨＡと笑う。

「芳佳は扶桑出身なのに、智子の事あんまり知らないみたいねー。智子は当時の扶桑でもエースで、辺境のスオムスに来ないでカールスラントの前線で戦うことが決まってたみたいね。でも、お友達の武子中尉と・・・今は大尉だったか忘れたね。その武子の進言で、カールスラントじゃなくてスオムスに変更させられたみたいね」

「あ、武子さんなら知ってます！確か、『加藤隼戦闘隊』って映画が作られたってくらいの有名人だって。でも、何でスオムスに？」

スオムスなんて今は有名な所の一つとして上がるが、ミーナに教え

られた話によると、当時はスオムスよりカールスラントの方がネウロイとの激戦区であるとの事。
さっき言ってた、いらん子とは全然かけ離れている人物が何故スオムスに来たのか、芳佳は不思議がっていた。

「智子少尉はワンマンプレーヤーでしたから」
「ウルスラの言う通りねー。武子に進言されたって聞かされた時は、それはそれは大荒れに荒れて大変だったね。武子を見返してやるとか、義勇軍は私一人で努めるとか。智子は、今でこそチームとしてまとまり上げる指揮官になったけど、昔は一人で戦果をあげるワンマンプレー中心だったね。でも、ビューリングのおかげでなんとかなったねー」
「そういえば、ビューリングさんって何かあったんですか？」

あのミーティングの後、特にこれと言って話す事は無く、どうしてあの時ビューリングがつっかかってきたのか分からず仕舞いだった。映司も気にはしなかったが、スオムスをまとまり上げるのに一役買うような人柄には見えないので、ついでにと聞いてみる。

「・・・・・ビューリングは、一回戦友を亡くしてるね」

帰ってきたのは、予想よりも重い重い言葉だった。

「死なせたのは、自分がネウロイを深追いしすぎたからだって。自分を責め続けて死に場所を探してスオムスに来たみたいね。でも、智子も昔の自分みたいに戦果に夢中になって、危ない目にあうんじゃないかってことで一計はかってみたねー。そしたら、智子は目を覚ましてチームとして、スオムスで頑張るって事になったねー」

どうしてあの時、映司にビューリングがネウロイだけでなく、街を

守る事に異議を唱えたのかがなんとくなく分かった気がしていた。
自分が街を守るために無茶をするのではと、そんな自分の身を案じてくれたのではないかと仮説と立てて、勝手に良い人だなぁとビューリングを解釈していた。
ウルスラは話のキリが良いところで、ついでにと付け加えておく。

「それと、紹介してないけどうちにはもうウィッチが一人います。今は病院ですが」
「病院ですか？どこか怪我したなら、大抵は直しますけど」

病院なんて、よほど大きな怪我でもしない限りは行かない場所なので心配そうに聞く芳佳に、大丈夫と首を振るウルスラ。

「持ち前の魔力と気力でもうそろそろ退院できるそうですが、亜種ネウロイに酷くやられたらしいです。本人は、命があるだけでも儲け物だって笑ってました」
「凄い人ですね・・・」

酷い怪我になりながらもポジティブに考える思想は、とてもじゃないが芳佳にはできない考えだった。
映司はスプーンを空になった皿に置き、ご馳走様してチラリと壁にかけてある時計を見る。

「・・・そろそろ時間だね」

その一言で、和やかな雰囲気で談笑していたテーブルが、一気に静まりかえる。
五日目となる今日、作戦の時間が刻一刻と迫ってきており、それ故に殆どのスオムス組はさっさと朝食を済ませ、エンジンを慣らせる為の試行運転や爆撃の為の編隊飛行など、それぞれが今できる事を

していたのだ。
そろそろで作戦の時間だと思い出されたウィッチは、暗い雰囲気など微塵も感じさせず、逆にやる気を見せていた。

「避難してきた人の為にも、スラッセンの街を取り戻して見せるね！」
「姉様の為にも、成功させます」
「あまり重いのは持てませんけど、シールドと治癒なら任せてください！」

芳佳も意気込みを見せるが、映司は爆撃にはあまり乗る気ではなかった。
というのも、彼女らが爆弾を直接持ち、敵に降下するという危険きわまりない行為からだったからである。
映司は他に手段は無いものかと智子に相談をしたが、無いと断言されて渋々とこの作戦に乗ったのだった。

「・・・絶対に無茶はしないでね」

心配する映司だが、逆にウルスラに心配されてしまった。

「映司さんだって十分危険です。爆撃のど真ん中での、亜種ネウロイとの戦闘。下手すれば倒し損ねた陸戦型ネウロイだって来ます。映司さんこそ、無茶しないでください」

有名人と繋がりと火のグリード４（後書き）

アニメもあの後、芳佳ともっさんが飛べなくなって幸せだったかどうかが今回の映画で分かるけど、せめてこの小説だけでも飛んでほしいっすわ。

有名人と繋がりと火のグリード５（前書き）

タトバキックが成功しすぎ？
気にスンナ（・ｘ・）

有名人と繋がりと火のグリード5

滑走路には２０人前後のウィッチがストライカーを穿き、それぞれの部隊長が一人前に出る形で横に並び、なにやら偉そうな男性とハッキネンの話に耳を傾けている。
格納庫の扉は開け放たれており、中からは作業員達が慎重そうに大小様々な爆弾を運んでいる。
一方、映司はフルフェイスヘルメットを被り、ライドベンダーを北西の街、ミッケリへと走らせていた。
バイクを取り出すとき、作業員達には買い物へ行くと嘘をついている。

『映司の誠実な性格なら怪しまれないだろう』

と、智子の判断だった。
５ｋｍ程走らせただろうか、バイクのスピードを落とし、ポケットから地図を取り出し目を走らせる。

「・・・この道だよな」

地図から顔をあげ、スラッセンへ続く抜け道の農道へとバイクを走らせる。
農道とは言うが、地面からは脛まで伸びている雑草が道を隠しており、周囲の田畑も全く手入れされておらず草が伸び放題だった。
ミッケリ周辺は半年前にネウロイに襲撃され、復興作業の途中で農業まで手が回らず、それ故誰も使っていないこの道を使おうとのアイディアである。
しばらく農道を走らせていると、綺麗に舗装された大きな道路に出てきた。

左手にはスラッセンの街が見え、見事に誰にも気づかれる事なく入り口へとたどり着いた。
だが、鋪装されてる道路とは違い、スラッセンの建物は屋根が崩れ、壁が壊れ、瓦礫の上には雪が積もっている悲惨な光景が広がっている。
住民は全員避難しており、不気味に静まりかえった街はネウロイの爪痕が生々しく残り、映司は拳をギュッと握りしめた。

「やっと来たか」
「あぁ」

アンクは朝早くから、誰にも見つからず基地から抜け出し徒歩でここに来ていた。
しかし、息をつく間も無く通りの向こう側から、うっすらと黒い点が大量に迫ってきていた。

「来たね」

映司はバイクから降りベルトをつけ、メダルを入れていく。
これでいつでも変身する体制はできた、後は無線からの合図を待つだけである。

「ヘマすんなよ」
「アンクこそ、さっさと捜し物見つけないとね」

アンクが街にポケットに手を突っ込んだまま歩き出した時、上空からエンジン音が聞こえた。
映司は空を見上げると、アホネンを真ん中に横一列に並ぶエシュロン隊形と呼ばれる編隊で、こちらに向かってくる陸上型のネウロイに向かって爆弾を抱えて飛んでいく。

先行する第一中隊に続いて、巫女と袴を混ぜた一際目立つ飛行服の智子を先頭に、義勇軍のみんなも少々小型の爆弾を抱え、各々が得意とする武装を背負い飛んでいった

直後、あちこちから大きな爆発が起き煙が立ち上り、空から銃撃音が聞こえ、地上からは紫のビームが無数に飛んでいく。

「聞こえますか、映司さん！陸上のネウロイは殆ど倒しました！」

無線からは、ハルカの切羽詰まった声と銃撃音が流れてきた。
陸上のネウロイを倒しても銃撃音が聞こえるとなると、恐らく飛行ネウロイと戦っているのだろう。
助けに行きたい気持ちをこらえ、オーズは冷静に無線で返す。

「それで、肝心のゴリラネウロイは？」
「えと・・・周囲にネウロイは見あたらないので、今は街のど真ん中で孤立状態です！」
「分かった、すぐ向かうね！」

スキャナーを手に取り、街の奥目指して走りながら、いつもの変身ポーズでスキャンする。

キン！キン！キン！

「変身！」

タカ！トラ！バッタ！
タ・ト・バ　タトバ　タットッバ！

「多分、こっちかな」

地図を思い出しつつ、家と家の間を駆け抜けて行く。
そうして道の角を曲がり街の中心地である大きな広場に出た途端、灰色の体に赤いラインの走ったゴリラネウロイが片腕だけで、しかし力強くドンドンドン！と空気を揺るがすドラミングし、鳴らし終わるとドシンと地面に手をつきオーズと対峙する。
体の一部は先の爆撃で欠けたのだろう。

「あんまり気持ちがいいと思えないけど・・・」

オーズはトラクローを展開させ、負傷しているゴリラネウロイに切りかかる。

「ハッ！セヤッ！」

ゴリラネウロイは、攻撃を食らいつつも片腕を振り回してオーズを追い払おうとする。
それをよけつつ次々と攻撃を加えていくが、装甲の表面を火花を散らして少しづつ削っていくだけで、致命的なダメージは中々与えられない。
負傷しているとはいえ、今スキャニングチャージをしても倒せるほどでは無いだろうと、映司は直感で感じていた。
ただ、通常のネウロイとは違い攻撃した側から回復はしてないよう

で、切り裂いたトラクローの後がうっすらとだが跡がついているのが見えていた。
現に無くなった片腕は、未だに回復しきれていない。
もう一度切り裂き、ゴリラネウロイが手を大きく振り上げたのを見て、脚に力を込めて後ろに飛び退き距離を取る。

「っと、ほんとにビーム撃ってこないんだ。なんか、人型の敵を相手にするのって、凄い久しぶりな気がするな」

こっちに来てから相手にするのは全部空を飛んでいる飛行型だったので、しっかりと地面を踏めて海に落ちる心配も無く、今までのヤミーやグリードを相手にしてきた戦い方がこのネウロイに通じる事に、オーズは体を慣らしつつ戦っていた。
だが、ゴリラネウロイとの戦いに集中しすぎたのがまずかった。

「後ろだ映司！」
「え？」

もう一度切りかかろうと踏み込むが、無線からではなく頭上からビューリングの叫び声が聞こえ、オーズは前のめりになりつつ後ろを振り向こうとした。
その瞬間、背中に大きな衝撃が二度走り、オーズの背中から火花がバチバチ散り地面に倒れ伏す。

「ぐっ、うぁ・・・」

一度目の爆撃に耐えた大型の陸上型ネウロイが、何を思ったのか標的をウィッチでは無くオーズに切り替えて攻撃してきたのだ。
ガシャン、ガシャン、と不気味に四つの脚を動かし、倒れたオーズ向けて砲口を定め、撃つ。

「させるか！」

その間にビューリングが割り込み、シールドを展開させてなんとか砲撃に耐えたが、二度、三度と打ち込まれる度に押され、それでも何とかシールドを保ちオーズを守る。

痛みに耐えて、オーズはふらふらと立ち上がりスキャナーを手に取る。

「ハァハァ・・・ビューリングさん、少し、そのままでお願いします！」

『スキャニングチャージ！』

腰を低く落とし、息を吐きつつ高くジャンプする。

そのまま陸上型ネウロイに向けて、タトバキックを放つ。

「ハァァ、ッセイヤー！」

爆散、見事陸上型ネウロイを一撃で打ち破ったオーズだが、食らったダメージが深かったのか息は荒く、その場に方膝をついてしまう。

それでもなんとか立ち上がり、自分を助けてくれたビューリングにお礼を言おうと振り返る。

だが、ここまで爆弾を運び、空でのネウロイとの戦闘、更にはオーズを助けるためのシールドで魔力を大量に消費しており、ビューリングは魔力が尽きかけ、ストライカーが脚から抜けた状態でその場に倒れてしまった。

そんな状況に追い打ちをかけるように、視界に入ったゴリラネウロイは、先ほどまでボロボロの体が見える範囲で殆ど回復されていた。

「ちょっと、まずいかも・・・」

「あれ?ビューリング少尉は?」

空のネウロイを一通り倒し、他にネウロイはいないかと周囲を見渡すエルマだが、先ほどまで肩を並べて戦っていたビューリングが、空のどこも飛んでいない事に気づく。
すぐに他の者も気づき、空を見渡しビューリングを探す。
智子も口頭無線で呼びかけるが、向こうからまったく反応が無い。

「あ、あれ!」

ハルカが地上の一カ所を指さす。
そこには地べたに寝っ転がったビューリングと脚から取れたストライカー、そのすぐ側でオーズがゴリラネウロイ相手に戦っている姿だった。
しかし、オーズの動きはよろよろとし、今にも倒れてしまいそうな程その姿は弱々しかった。

「キャァ!」

オーズはゴリラネウロイのパンチをもろに食らい、火花を散らしな

がら吹っ飛ばされていく。
気弱なハルカがオーズが吹き飛ばされたのを見て悲鳴を上げるも、
ゴリラネウロイはずんずんとオーズに距離をつめる。
オーズは食らったダメージが大きすぎ、変身が解け、映司の姿に戻ってしまった。

「まったく、世話の焼ける・・・！」

智子は弾の残量が少なくなった機関銃を投げ捨て、愛刀の備前長船を鞘から抜き放ち、地上のゴリラネウロイめがけて急降下をする。

「智子、無茶ねー！」

キャサリンの制止などどこ拭く風で、智子はゴリラネウロイに迫る。

「はあぁぁぁぁ！！」

歯を食いしばり気合いを入れ、ゴリラネウロイの頭を縦に切り裂く！

・・・はずだったが

「硬っ・・・！」

ギギギィィン！と金属と金属がこすれる音と火花が盛大に散り、
傷をつけることは適わなかった。
智子はキ27改の持ち前の旋回力を生かし、すぐさま空へと飛び上がる。
だが、今の攻撃でゴリラネウロイの注意は逸れ、映司から空へと飛ぶウィッチ達にのっそりと体を向ける。
ゴリラネウロイはそこら中に散らばった瓦礫を、手当たり次第にウ

ィッチめがけて投げていくが、シールドで防いだり撃ち落としたりと、中々当たらない。
ウィッチは巧みにゴリラネウロイを誘導し、ゴリラネウロイを一度、映司とビューリングから遠ざけていく。

「よし、このまま行けば、なんとか体制を立て直して」

その時、智子めがけてコンクリートの塊が飛んできた。
智子は難なくシールドではねのける。だが、その回避方法が間違いだった。
弾かれた塊が倒れて動かないビューリングの真上に、非情にも落下していく。

「しまっ」

「ハッ、世話がやけんのはどっちだ」

無線からアンクの声が聞こえた。
直後、落下するコンクリートの塊が、どこからか飛んできた火の玉に当たり空中で塵と化した。

「ここまでこいつが強いのは、計算外だったなぁ」
「惜しいところまでは行ったんだけどね・・・てか、アンクもうそこまで力戻ってきてたんだ」
「最も、まだ空は飛べないがなぁ。鳥のグリードが聞いて呆れる」

アンクは炎を出した右手をにぎにぎしながら、ふらつくきながら歩いてくる映司に二枚のメダルを投げる。

「じゃあ、今は属性だけの火のグリードってところだな」

映司はメダルを空中でキャッチしながら、アンクに軽口を叩く。

「そんな事言ってる余裕あんなら、さっさとメダルとってこい」

相変わらずいつもの命令口調だが、言われるまでも無く映司は倒すつもりである。
受け取ったメダルを見て、映司は

「ちょっときついけど、背に腹は代えられないか」

と言いつつメダルをはめていく。

キン！キン！キン！

「変身！」

クワガタ！カマキリ！バッタ！

ガーッタガタガタキリッバ！ガタキリバ！

有名人と繋がりと火のグリード５（後書き）

スオムスチーム出番あんま無くてごめんね・・・

でもまた後でスオムス出す予定なんすよね、まぁ先は長いけど。

ビューリングが倒れたのは、スオムスでは慣れない大型ネウロイの攻撃が予想を超えた威力で攻撃してきたので、シールドに魔力を急激に消費したからです。

スゥーっと魔力を使うんじゃなくて、グンッ！と魔力を使う感じ

有名人と繋がりと火のグリード６（前書き）

通貨の説明をば少々

１ポンド＝１９．６円＝現在の約３万５０００円

映司のお給料が、実力だと大佐クラスだが、正式ではないため少し減って１５０ポンド。

現在の貨幣価値に換算して、なんと・・・５２５万！（ただし半年分）

お金はガランド少将がミーナに、そこから映司に渡されました。

ちなみに、芳佳軍曹の年俸は現在の約８４０万です。

アンクはミーナの部屋直行でした。

有名人と繋がりと火のグリード6

「今度は全身緑になったねー！」
「おぉ、なんか色が統一されてかっこいいです！」
「あれがコンボ・・・聞いてたのとは別ね」

上空でウィッチが驚くが、彼女達は更に驚く事になる。

「うぉおおおおおお！！！！！」

ガタキリバになったオーズは、こぶしを握り両手を震わせ雄叫びをあげる。
叫び終わると、今度はゴリラネウロイに向かって全力疾走する。
だが、ただ走って行くわけではない。
なんと走るオーズが2人、3人、4人・・・瞬く間に増えていき、あっという間に総勢50ものガタキリバオーズがゴリラネウロイ向かって走っていくではないか。

「な、何よあの数！」
「すっごい！映司さん凄いです！」
「あれなら流石のネウロイも倒せるねー！」

ウィッチが驚く中、芳佳はゴリラネウロイがオーズに向いたのを機に、ビューリングを治療しに地上へ降りる。

「待っててください、今助けますから！」

ビューリングの胸の上に両手を重ねて、魔力を集中させて外傷を治していく。
ウィッチ達も、ゴリラネウロイは元々の作戦にあるようにオーズに任せて、ビューリングの側に降りていく。

瓦礫を投げるのを止め、再びオーズに向き直るゴリラネウロイだが時すでに遅し。
５０ものオーズがゴリラネウロイの足下に群れ、それぞれがキック、パンチ、カマキリソードで攻撃していく。
再生能力の低いゴリラネウロイはこの攻撃に耐えられるはずもなく、腕を振り回してもがくがその抵抗もむなしく終わり、一瞬で右足が

消し飛び、次いで左足も無くなる。
重たい胴体が地面にドシンと落ちた。
何体かのオーズはダメージを食らうも、勢いをまったく衰えさせずに何度も群がっていく。
胴体を何度か切りつけたオリジナルオーズは、動けなくなった今がチャンスとスキャナーでスキャンする。
それに習って、分身したオーズも全員一斉にスキャンする。

『『『『『スキャニングチャージ！！！！！』』』』』

全部のオーズが同じタイミングで走り出し、ゴリラネウロイのど真ん中向けて一斉に『ガタキリバキック』を放つ。

「「「「「セイヤー！！！！！」」」」」

綺麗に５０ものキックが１つに纏まり、一カ所に５０ものキックがたたき込まれる。
ゴリラネウロイも腕をクロスさせてガードするが、その瞬間の威力はとてつもなく、両腕を突き抜け頑丈なゴリラネウロイの胴体に大きな風穴が空く。
その瞬間、ゴリラネウロイは爆発した。
キックを決めたオーズは、いつの間にか一体だけになり、爆発をシルエットに決めポーズを取って地面に着地する。
オーズは変身を解き、握っていた手のひらを開ける。その手には、ゴリラメダルが握られていた。

「ハァハァ、勝った・・・けど・・・」

映司は振り向き、遠くに目を覚ましたビューリングと喜び合うウィッチーズを見て、良かったと呟き少し微笑んでスローモーションの

様にがっくりと膝をつき、意識を失い地面に突っ伏した。

「ッチ、あの程度で倒れるとは思えないが、コンボの使いすぎか」

左手にアタッシュケースを持ったアンクは、舌打ちをすると映司に近づきゴリラメダルを取り上げ、グリード化した右手に取り込む。

「・・・ま、上出来だな」

珍しくアンクが映司を褒め、治療を終えた芳佳が映司のそばに駆け寄り、今度は映司の治療に急ごうと服の上から両手をかざし魔力を集中させる。

「凄い傷！こんな傷で戦ってたなんて・・・」

「５０の映司がダメージ食らって、５０の映司が一気に一つに戻ったんだ。傷だけじゃなくて精神的にも来るだろうなぁ。それに、少しの間休ませたとは言っても、コンボを使いすぎたんだ。今まで倒れなかったのが不思議なくらいだろ」

アンクはビューリングが智子の肩を借りてこっちに来るのを見て、右手をポケットに入れてアタッシュケースを持ち、映司を芳佳に任し基地へと帰っていた。

「すまなかったな」
「え？」

基地の一角に取り付けられたバーで、指や体に包帯を巻きほっぺたに絆創膏を貼った映司はコーラで割ったカクテルを、ビューリングは手に収まる程度の大きさのグラスで酒を飲んでいた。
ほんのりとほっぺたに赤みが差したビューリングは、隣に座る映司に突然謝った。

「私たちがネウロイを取り逃したせいで、お前を危険な目に遭わせた事だ」
「あぁ、全然気にしてないですよ、ネウロイも倒せたし、俺もビューリングさんも芳佳ちゃんに治してもらって無事だし。これでスラッセンの街も、なんとか復興に取りかかれますしね。そもそも、ビューリングさんはやることちゃんとやったじゃないですか、身をていしてシールドはって助けてくれたし。大事なのは、何をしたかですよ」
「何をしたか・・・か」

グラスの残り少ないお酒をグイッと飲み干し、コーラ酒を飲む映司の瞳を真っ直ぐ見据える。

「昔、私と同じ事をした親友がいてな」

映司はキャサリンから聞いた話を思い出し、酒を飲む手を止める。

「それって」
「・・・死んだ、彼女と私のやったことは同じだ。だが、彼女と同じ末路を追わず、私が今こうして酒を飲んでいられるのは、優秀な仲間と映司のおかげだ。ありがとう」

仲間、と映司だけ略さない引っかかる言い方をしたビューリングはスッと目蓋を閉じ、ほんの少しだけ笑った表情を作った。
そんな顔を見た映司は、あまりお酒が入ってないにも関わらずビューリグと同じように顔を赤くし、目をそらして

「こっちこそ、ありがとうございました」

とだけ返した。

「そろそろー、芳佳と映司の料理がたーべーたーいー」
「まぁまぁ、今日帰ってくるって言ってたし、そろそろ来るんじゃないか？」

蒸かした芋をフォークに刺して口に運びながらシャーリーが、芋に飽き飽きしてるルッキーニをなだめる。
丁度のタイミングで食堂のドアが開き、坂本と映司と芳佳が入ってきた。

「「ただいま帰りました！」」
「芳佳ー！映司ー！ご飯ー！」

有名人と繋がりと火のグリード６（後書き）

ストライクウィッチーズ基地帰還前

映司「そいや、アンクが探してたのってなんだったの？」

アンク「メインの物は無かったが、代わりにこいつがあった」パカッ

芳佳「これもカンドロイドの一つなんですか？」

アンク「ゴリラ缶とクジャク缶だ、」

映司「へぇー、でも結局セルメダルは稼げなかったんだな・・・。あ、そうだった。これ、持ってきたんで使ってください」

智子「何、この厚みがある封筒？」

映司「復興に使うだろうと思って、前もって持ってきてた援助金です。まぁお給料の残りですけど」

キャサリン「へぇー・・・って、１４０ポンドも！」

ハルカ「そそそそんな大金を！？」

芳佳「映司さん全部あげちゃったんですか！」

ビューリング「そんなにもらっていいのか？こちらとしては助かるが」

映司「いいんです、どうせ使い道無いですし。本当なら自分の手でお手伝いしたいんですけど、今はこれぐらいしかできませんが」

ハルカ「私たちに力を貸してくれただけでなく、復興の義援金まで頂けるなんて・・・映司さんは扶桑の誇りです！」

キャサリン「別に映司は扶桑から来たわけじゃないけどねー」

ウルスラ「・・・私達が別の事に使うかもしれない」

映司「うん、俺もそれは考えたよ。実際、武器の資金とか自分のポケットマネーにしちゃう人もいるけど。でも、敵は人じゃなくてネウロイだし、みんなならきっと復興の為に使ってくれると思うんだ。一ヶ月も見てきたら、それくらい分かるよ」

ハルカ「人が敵になるわけないじゃないですか、映司さん心配しすぎですよー」

アンク「ハッ、どうだかなぁ。人間は欲望の塊だ。ネウロイを全滅させたら、今度はお前ら同士で戦争するかもなぁ」

映司「そうなったら、俺が止めるって。ここに俺が居る以上、絶対に人間同士で戦争はさせないよ・・・絶対に」

智子「映司も色々な物背負ってるのね・・・」

アンク「お前にはそう見えるんだろうが、俺から見ればお前らのがよっぽど色んなもん背負ってるぞ。まぁ、それがまともな人間の持つ欲望だがなぁ」

映司「ん、俺だって、最近欲望にも手を出すようになったよ」

アンク「・・・ハン、言ってみろ」

映司「世界中のネウロイを倒す。お前がくれたどこにでも届く腕があるんだから、今はそれができる力があるんだし」

アンク「・・・言ってることが前と変わんねーぞ」

映司「あれ?そう?」

秘め歌もどき（前書き）

もっさんが映司の事を火野と呼ばずに映司と呼んでるのって違和感ありますね。

秘め歌もどき

ザアアアァァァ・・・・・・・・

映司「ふあぁ～・・・ん、まだ6時半か。ご飯まで時間あるし、朝風呂行くか・・・」

『お風呂』

ざぱぁーん

映司「はぁ～、気持ちいぃ」

ザアアアァァァ・・・・・・

映司「今日は雨か、訓練無くなるかなー」

坂本「ほぅ、映司は訓練無しの方が嬉しいのか？」

映司「・・・」

坂本「・・・」

映司「うわ！？坂本さん入ってたんですか！？」

坂本「なんだ、今の間は」

映司「すすすいません、気づきませんでした！すぐ出ます！」

坂本「はっはっはっはっは、風呂では階級なんて関係無い。何も出ていく事はないぞ、気にするな」

映司「いやいや階級の問題じゃないですから！湯気の量が多くて助かりましたよ！」

坂本「おっと、落ち着け映司。風呂は疲れを取る場所だぞ、そんなに騒いでどうする」

映司「ってか、なんで坂本さんそんなに落ち着いていられるんですか」

坂本「たった今言ったばかりだろう、風呂は心身共に休める場所だ。体だけでなく、精神も安らぎ交流を深める場所だ。それに、映司と私と歳の差はそんなに無いだろう。そんなに緊張する必要は無い」

映司「歳の差以外に、緊張するのがあるんですけど・・・そういえば、坂本さんって１９歳ですもんね。そっかー、俺と一年しか変わらないのか」

坂本「そうだ。それに映司は軍隊に入っていない、敬語を使う必要も無いんだぞ。現にアンクは平語だ」

映司「アンクはいつもあれですから、敬語使ってるの見たこと無いですし。うーん、いきなり敬語使うなって言われても、威厳のある人には慣れないんですよね」

坂本「私に威厳？はっはっは、私はいつも通りにしているだけだぞ。しかし、ふむ、確かにいきなり平語にしろと言っても無理かも知れんな。どれ、私は映司を名前で呼び捨てているんだ、試しに私を呼び捨てで私を呼んでみろ」

映司「後でペリーヌさんが怖いな・・・」

坂本「どうした、映司」

映司「な、何でも無いです。それじゃ、えっと・・・坂本」

坂本「坂本さ、まで言いかけただろう。もう一回だ」

映司「坂本」

坂本「何か違うな・・・もう一回」

映司「坂本」

坂本「違和感があるな・・・もう一回」

映司「坂本」

坂本「ふーむ・・・気持ちの入り方か？」

映司「まだ駄目なんですか。んー、呼び捨てといえば、ミーナさんが坂本さんの事を、美緒って呼んでたりしましたよね」

坂本「そうか、それだ！映司、美緒で呼べ」

映司「えっ」

坂本「そっちのがしっくり来る。ほら、どうした早く呼べ」

映司「・・・・・・美緒」

坂本「もう一回」

映司「美緒」

坂本「ふふ・・・もう一回」

映司「美緒」

坂本「何首をかしげている、もう一回だ」

映司「美緒」

坂本「これからはこれで行こう！もう一回」

映司「美緒」

坂本「角度を変えて言ってみるか、ちょっと立ってみろ」

映司「あの、どんだけやるんですか」

坂本「私が満足するまでだ。とういうか、敬語はやめろと言ったはずだが？私はウィッチで扶桑人だ、この程度でのぼせるか。ほら、立て」

映司「そ、そういえば、坂本さんって」

坂本「美緒だ」

映司「・・・これって風呂出ても？」

坂本「そうだな、流石に他の者に示しがつかないから、風呂の中だけにしておくか。それでどうした？」

映司「芳佳ちゃんから歌が好きだって聞いたんですけど、俺、こっちの世界の曲あまり分からないんで、有名な歌とかあったら教えてくれませんか？」

坂本「そうか、歌については私よりミーナが知っていると思うが。風呂で歌うのは気分が良い、どれ、一つ歌ってやろう」

挿入歌【ｆａｌｃｏｎ　ｅｙｅｓ】

秘め歌もどき（後書き）

小さくパート分けします

早く仕上げるように頑張ります

秘め歌もどき2（前書き）

ウィッチの魔力で防水のラジオも作れると思うの

ＭＯＶＩＥ大戦とストライクウィッチーズ、どちらの映画も楽しみですね。

翔太郎とフィリップもゲストで出演するらしいし、アンクが復活するし、芳佳ともっさんがもう一度飛べるかもしれないし

［くさいふ　に　５０００えん　の　ダメージ　！

秘め歌もどき2

映司「はっ、すっかり聞き惚れていた・・・。坂本さん、歌上手ですね！」

坂本「そ、そうか？風呂だから声が響くだけだ、そう聞こえるだけだろう。んっん、あ、あぁー」

映司「いえいえ、そんなんじゃないですって。曲がちょっと切ないけど、語りも入ってとっても綺麗な歌でした」

坂本「私は小さい頃から軍隊に居たから、最近の扶桑の曲はあまり知らないが、これくらいなら知っていたからな。有名な曲かも分からないから、趣旨に沿っていなくて悪いが。どれ、そろそろ朝食を食べに行くか。今日の担当は、バルクホルンとエーリカだからもう作り終わってるだろう」

ざぱぁーん

映司「き、急に立ち上がらないでください！」

坂本「なにをタオルで目隠ししている、先に上がってるぞ」

映司「どぞ、俺後から上がるんで」

坂本「あぁ、忘れていたが今日も訓練はあるぞ、室内メニューだ。ビシバシ行くぞ！」

映司「えぇ・・・」

坂本「そんながっかりした顔をするな。まったく、お前はそこだけ宮藤に似ているな。それじゃぁ先に出てるぞ」

映司「分かりました・・・」

映司「ふぅ、お芋美味しかったー」

エーリカ「えーいじ」

映司「っと、エーリカちゃんどしたの?てか、抱きつかないで」

エーリカ「いいじゃん、ちょっとくらいさー。映司、長い間スオムスに行ってたからつまんなくって。宮藤までスオムスに行くもんだ

から、トゥルーデがいつもに増して規律・訓練・妹って、五月蠅くってもう大変だったんだから」

映司「ははっ、バルクホルンさんって、芳佳ちゃんと話してる時嬉しそうにしてたよね。事情が事情なだけに仕方ないと思うけど、傍目から見ると仲の良い姉妹って感じだもんね。俺は兄弟いないから分からないけど、あーゆーのって羨ましいなぁ」

エーリカ「そぉ？まぁ、優秀な身内がいると周りに自慢できるからね。かくいう私の妹のウルスラも、自慢の妹なんだよ。バッタカンで連絡とらせてもらったけど、引っ込み思案なところは直ってたし、フリーガーハマーは作るし」

映司「フリーガーハマーって、サーニャちゃんが使ってるあの？」

エーリカ「そうそう、あのどかーん！って攻撃するロケット兵器。本国で、実用化に向けての開発にも携わってるって言ってたし、姉として嬉しい限りだよ」

映司「ウルスラちゃんも大変なんだね。そういえば、バルクホルンさんが妹のクリスにも会わせるーって」

バルクホルン「ハルトマン！掃除を途中で抜け出したと思ったら、火野に油を売っていたとな・・・」

エーリカ「げえっ、トゥルーデ！」

バルクホルン「げえっとはなんだ、げえっとは！お前の私物がまた境界線を超えて、私の領域まで入っていたぞ、さっさと掃除に戻るんだ！」

エーリカ「うわわ！助けてー映司ー！」

映司「んー・・・休憩してるだけだったし、掃除なら手伝おっか？」

エーリカ「ほんと！ありがとーえい」

バルクホルン「駄目だ。火野、あまりハルトマンを甘やかさないでくれ。この調子だと、将来も誰か助けてくれる人がいないとダメな、ずぼらな人間になってしまう。今でさえ、カールスラント軍人として目を疑うことばかりしているんだ。これ以上怠け者になってもらっては困る。」

エーリカ「トゥルーデだって、宮藤甘やかしてばっかじゃんかー。こないだの飛行訓練だって『よく追いついてこれたな、今の飛行は中々良かったぞ』って、そっからもべた褒めのオンパレードだったじゃん」

バルクホルン「あ、あれはだな！扶桑人は基本、褒められて伸びるタイプだと、前にミーナが話してたのを思い出して、坂本少佐の訓練メニューは新人の宮藤にはきついだろうと、それを考慮した上でだな。別に、最近クリスと会えないから寂しいわけじゃないぞ！ちゃんと褒める理由と、褒める場所があったから・・・・・・」

映司「・・・ほんと、デレデレだね」

エーリカ「・・・だね、姉バカだね」

バルクホルン「おい、聞いてるのか？」

映司「あぁ、は、はい。えっと、バルクホルンさんがクリスちゃんに会えなくて寂しいから、芳佳ちゃんを自分の妹にしようと褒めて」

バルクホルン「ひ、火野！変なところを抜き出して繋げるな！」

エーリカ「あながち間違いでも無いんじゃないの？」

バルクホルン「エーリカまで何を言うか！えぇい、さっさと部屋に戻って掃除をしろ！火野、邪魔をしたな」

エーリカ「ま、待って待って！私、映司に用があって来たんだから！」

映司「ん、どうしたの？」

エーリカ「ペリーヌから聞いたよー、最近歌にはまってるんだって？」

映司「ペ、ペリーヌちゃんから？！どこからか視線を感じてたけど、まさかもう・・・」

バルクホルン「ほぅ、歌か・・・良いシュミをしているな」

映司「ども」

エーリカ「そこで、私が一曲歌ってあげようってワケなのさ」

バルクホルン「ふむ、歌は志気を昂揚させて、やる気を出させるにはもってこいだからな。しかし、・・・」

エーリカ「ダメ？」

バルクホルン「許可しよう。火野、聞いてやってくれ」

映司「はい。てか、俺も聞きたいと思ってたんで、願ったりかなったりです。エーリカちゃん、お願いします」

エーリカ「ふふん、任せなさい。それじゃ、いっくよー！」

挿入歌【２　ｈｕｎｄｒｅｄ　ｏｖｅｒ】

秘め歌もどき2（後書き）

挿入歌ってよりキャラソンだね

声優さんが頑張るストライクウィッチーズなので、俳優の渡部秀君は絡みづらいようです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4430w/

オーズとストライクウィッチーズとパンツ

2011年11月10日06時21分発行